松田家の歴史

簡略版

本誌は533ページの「松田家の歴史」の225ページ簡略版です。

「松田家の歴史」533ページから下記の記述を削除してあります。

1. 吾妻鑑125か所
2. 太平記14か所
3. 戦国時代の古文書160枚
4. 津久井城主内藤氏の古文書等8ページ
5. 加賀藩侍帳10か所5ページ
6. 松田家先祖由緒并一類附帳65ページ

松田家の歴史

「松田家由緒」

相模松田家 22 代 松田邦義

松田家の遠祖は藤原鎌足である。鎌足は中大兄皇子と共に乙巳の変(645)を行い蘇我氏を討ち、天皇を補佐し、天智天皇に官位の最高位「大織冠」を賜り、同時に藤原の姓を賜った。

次男不比等は太政大臣となり、正一位を賜った。不比等は藤原の力を強力にし、その子房前は太政大臣となり、藤原北家の祖となった。8 代秀郷は平将門の乱を鎮圧した。

鎌足の 13 代公光の時に相模守となり、神奈川県秦野市近郊に住んだ。一族は秦野市近郊から松田郷を始め足柄郡から箱根に掛けての地域を開拓した。

14 代経範は姓を「波多野」に改め、その後波多野遠義の嫡男義通の弟達は其々の本貫地の地名から秀高は河村・実方は広沢・経家は大友・義景は波多野・実経は菖蒲・家通は沼田に姓を改めた。大友氏は九州の大名大友宗麟、波多野氏は永平寺を建立した波多野義重を輩出した。

また、波多野義通の嫡男義常の弟達も次男高義は大槻に改姓し、その弟達、忠綱と義元は其の儘波多野を名乗った。1180 年義常は源頼朝に反旗を翻した為領地を没収されるが、1188 年 4 月 3 日義常の子有常は鎌倉鶴岡八幡宮の流鏑馬で見事な技量を見せ源頼朝の賞賛を受け、亡父所領の松田郷を与えられ、初めて松田有常を名乗り鎌倉殿御家人となった。当時の松田郷は東海道の足柄越ルートと太平洋に注ぐ酒匂川の交差する水陸交通の要衝に位置しており、古来足柄上郡(中井町・大井町・松田町・山北町・開成町)の中心を占めていた重要な地域であった。又、大槻高義の 3 代目成家(鎌足の 22 代)は松田郷に住み「松田」を名乗り相模松田家の初代となる。鎌倉時代に一族は相模に残る者や、戦いに手柄を立て備前・出雲・九州等の守護や地頭となって各地に分散していった。

備前松田家は有常の子孫に盛朝がおり、承久 3 年(1221)承久の乱に髄兵し、その功によって鎌倉幕府より備前の国に領土を賜り、備前国守護となった。

正慶 2 年(1333)松田元国が南朝方の後醍醐天皇に味方し新田義貞の下で、鎌倉幕府討伐の功により備前国御野郡伊福郡を与えられた。

その後、相模松田家は南朝方だったが、備前松田家は北朝の足利尊氏に味方し、足利氏の家紋「丸に二引き」の使用を許される程であった。

松田家 7 代頼重は備前松田元成の弟で、北条早雲と共に京都の足利将軍の奉公衆であった。将軍足利義政の命により京より子の頼秀と共に相模に下向し、相模松田家を家督した。

また、備前松田家より足利将軍の近習と奉公衆が 20 名存在し、8 名が偏諱を受けている。

北条早雲の小田原城攻めの時に頼重・頼秀は最大の協力をし、北条家御草創七手御家老衆となり、盛秀は北条家 2 代氏綱の付家老となった。

9 代盛秀と 10 代憲秀は筆頭家老として敏腕を振るい、家臣として最高の 2798 貫（松田氏族 3922 貫）を給されていた。豊臣秀吉の小田原攻めの時憲秀は籠城策を主張し、野戦論の北条氏照・北条氏邦等と論戦を戦わせた。結果的に籠城策がとられ、何千何万という人命を救った事は憲秀の最大の功績である。

11 代直秀（四郎左衛門憲郷）は北条氏直の筆頭家老であったが、北条家滅亡後加賀前田家に 4000 石で召抱えられ、御普請奉行となり、小田原城を参考にして金沢城の惣構を完成させるなど活躍し、子孫も御馬廻役でも高位の定番御馬廻御番頭、検地奉行、武具奉行等を歴任した。

明治時代には金沢市長町三番町―参勤交代の江戸の住い文京区湯島天神の近く―東京市神田区鍛冶町―東京府豊多摩郡中野町(東京都中野区)―八王子市南町と、先祖に引き寄せられるように現在は神奈川県相模原市に移り住んでいる。

松田家の歴史

「松田家の歴史」簡略版目次

松田家由緒.....1
目次.....2~3
松田家と一族の系図.....4~9
松田家関係略年表.....10~25
松田家の起こり　神代の時代？から鎌倉時代　松田亭.....26~29
松田一族の本貫地と守護・地頭 等.....29
伊勢神宮禰宜と松田家の一族、.....30
鎌倉時代・室町時代・戦国時代の松田家一族と云われている五輪塔群.....31
大蔵院・寒田神社.....31~33
大庭景義と松田家.....34
松田一族と戦役.....35~40
松田家は源氏？平氏？　1188年4月3日松田姓公式に使用.....41
鎌倉幕府の滅亡と松田家.....42
松田家共通の先祖　藤原鎌足・藤原秀郷・波多野経範・波多野義通...43~47
相模松田家の先祖　大槻高義・実山永秀禅師.....48
相模松田郷の松田家　北条早雲公の小田原城入城と松田頼重.....49~54
山北町岸にある「松田新次郎頼秀の題目塔」.....54
松田康元から盛秀、二人の松田盛秀(室町幕府奉行人と北条氏家老).55~57
松田憲秀 松田憲秀家印.....58~64
松田憲秀邸の門柱　東京浜松町駅前　旧芝離宮恩賜庭園内茶室の柱.....64
相模松田一族で活躍した人々　康郷・康吉・康長・直長・大石照基..65~69
山本勘助と松田七郎左衛門・絵本甲越軍記.....70
「相州兵乱記」・「小田原記」の松田家関係の抜粋(内容同一).....71
北条氏所領役帳・松田家の所領高と領地.....72~79
北条氏家臣団、松田家家臣団　家臣・同心・配下・指南.....79~82
小田原の松田屋敷と武田信玄と徳川三代将軍家光.....83
笠原政尭考 笠原新六郎忠臣説.....84~85
秀吉の小田原攻め　加賀前田氏へ.....85~86
先祖由緒并一類附帳――(本文詳細は別紙古文書欄).....86
小田原評定と松田憲秀　北条氏評定衆.....87
松田憲秀の内応説　加賀前田氏が直秀を何故召抱えたか？.....88~96
北条氏からの偏諱　盛秀・康郷・康定・康吉・康長・直秀・直長.....96
松田直秀、高野山高室院文書.....97~99
北条夫人（武田勝頼正室）武田家の忠義の士.....100
真田幸村の六文銭と松田家　(真田庵にある六文銭旗の由来).....101
相模松田一族と城：小田原城・松田城・山中城・浜居場城・八王子城 102~109
相模田一族と寺院：龍泉寺・宗閑寺・極楽寺・松田寺・松栄寺等....110~113
相模松田一族と寺院：本因寺.....113
金沢城の惣構(総構え)と松田四郎左衛門憲貞(直秀・憲郷)・高山右近...115
江戸時代の松田家文書　松田五郎左衛門儀郷・松田五郎兵衛知郷....115~116

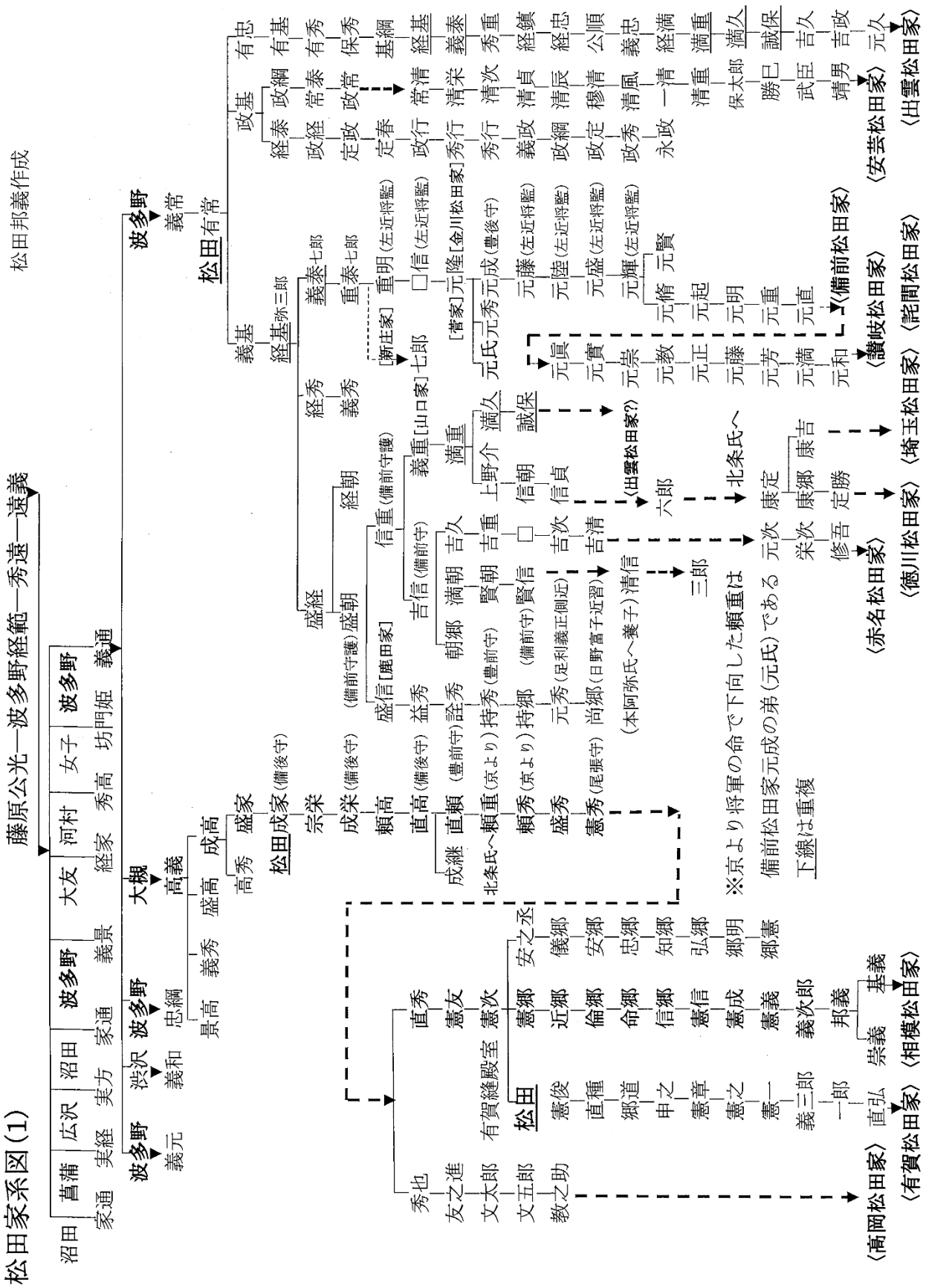
松田家の歴史

江戸時代の松田家、憲次・憲郷・近郷・倫郷・命郷・信郷・憲成 …… 117
明治以降の松田家：憲成・憲義・義次郎 …… 118~122
松田義次郎の手記　『通字「憲」から「義」への理由』 …… 118
松田義次郎：松田家 21 代義次郎の親友達：有住直介氏（気象庁長官）.. 119~123
　中条静夫氏（俳優）・高橋一氏（丸善石油重役）・広瀬博氏（国税局）
　林良一氏（筑波大学名誉教授）・菅谷英二氏（画家）
昭和・平成の松田家 …… 123~125
美容院の歴史（かほり・旭子）…… 126~128
松田家戒名　熊之助憲郷流・安之丞流…… 129~130
松田家家紋の歴史・松田家と家臣団の家紋・徳川氏家臣・松田家家臣. 131~135
松田家略系図（頼重・頼秀京都依り下向後の系図）…… 136
加賀藩前田氏侍帳――（詳細は別紙古文書欄）…… 137
江戸時代の加賀藩の松田家屋敷古地図…… 138
「吾妻鏡」に登場する一族 …… 139~140
津久井城城主　内藤氏と松田家・内藤氏略系図…… 141~142
大石氏と松田家…… 143
備前松田家…… 144~158
　室町時代の組織…… 159
　近習・奉公衆の松田家リスト、榎原雅治氏作成…… 160~162
　足利将軍からの偏諱　詮秀・詮忠・満重・満朝・持秀・持郷・尚郷 162
　備前松田家と城：金川城（玉松城）・岡山城・徳倉城・等…… 164~174
　備前松田家と寺院：蓮昌寺・大乗寺・道林寺・妙国寺…… 176~178
　吉備津神社…… 181
　玉松城改名 500 年記念 …… 173・179
　備前松田家の子孫　土光敏男氏・松田伊三雄氏・八千草薫氏…… 180~183
出雲松田家 …… 184~190
　出雲松田家の一族 …… 184~190
　山中鹿之助と松田誠保、松田誠保の救援に駆けつけた武将 …… 190~192
　出雲松田家と城　白鹿城・十神山城・愛宕山城 ……192~194
　尼子氏と松田家　尼子十旗 …… 195~198
高岡松田家・埼玉松田家・群馬松田家・甲斐松田家・長野松田家 ..... 199~200
波多野氏　永平寺（曹洞宗大本山）波多野敬直氏 …… 200~213
　波多野忠綱と 3 代将軍実朝の御首塚 …… 202
　六波羅評定衆波多野氏 …… 201~202
　松田家・波多野氏が担当した室町幕府内の役職 …… 202
　波多野氏で活躍した人々 …… 203~210
その他の一族、河村氏・広沢氏・沼田氏・大友氏・大槻氏 …… 210~216
本阿弥氏と松田家 …… 217
松田家関係の古文書、加賀藩侍帳、戸籍謄本・徐籍謄本…… 218
松田町・教育委員会主催町民大学・全国松田サミット …… 219~223
あとがき …… 224
松田家の関連した事が記載されている書物と著者 …… 225

松田家の歴史

松田家系図（1）

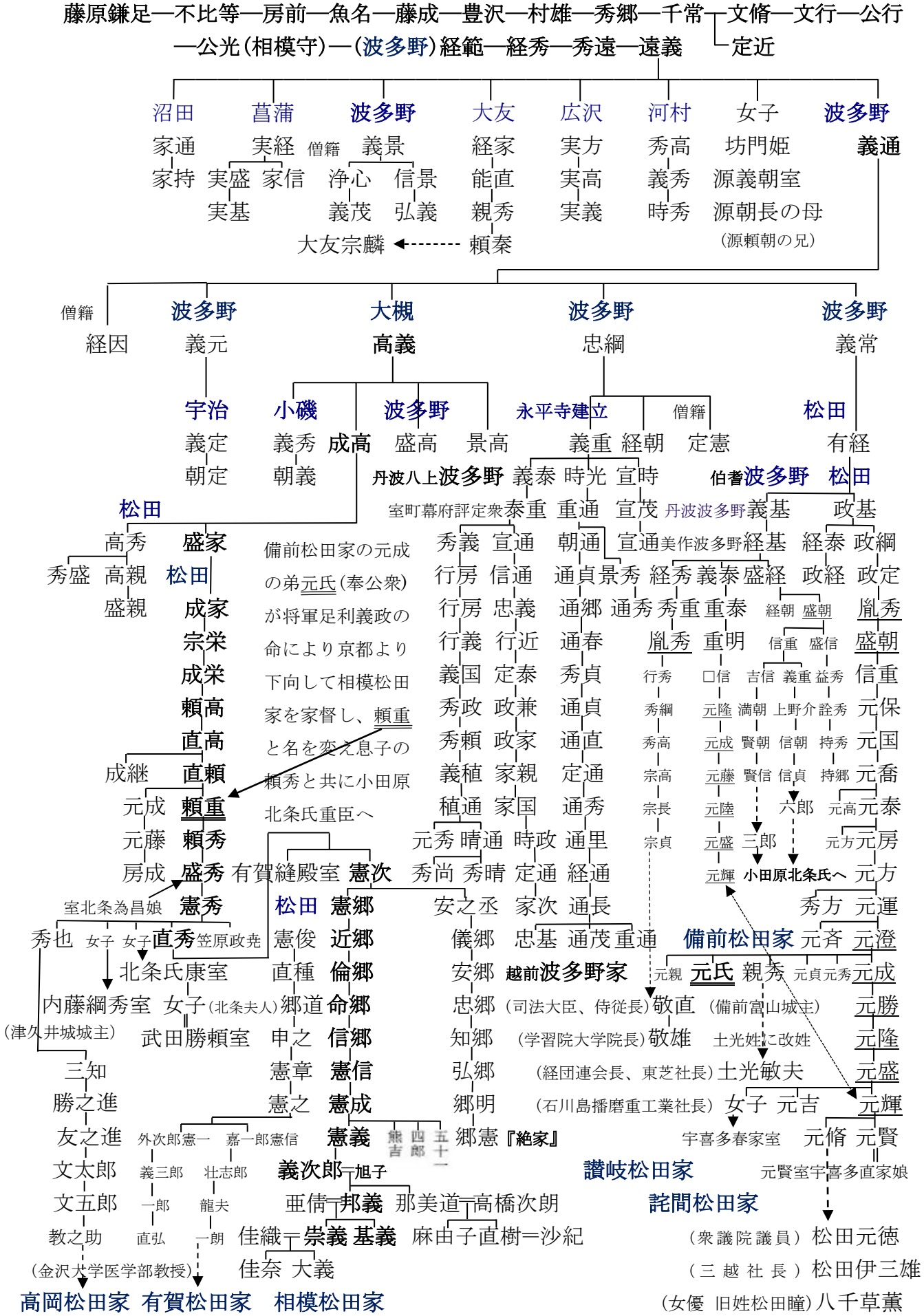
松田邦義作成



松田家の歴史

松田家と一族（2）

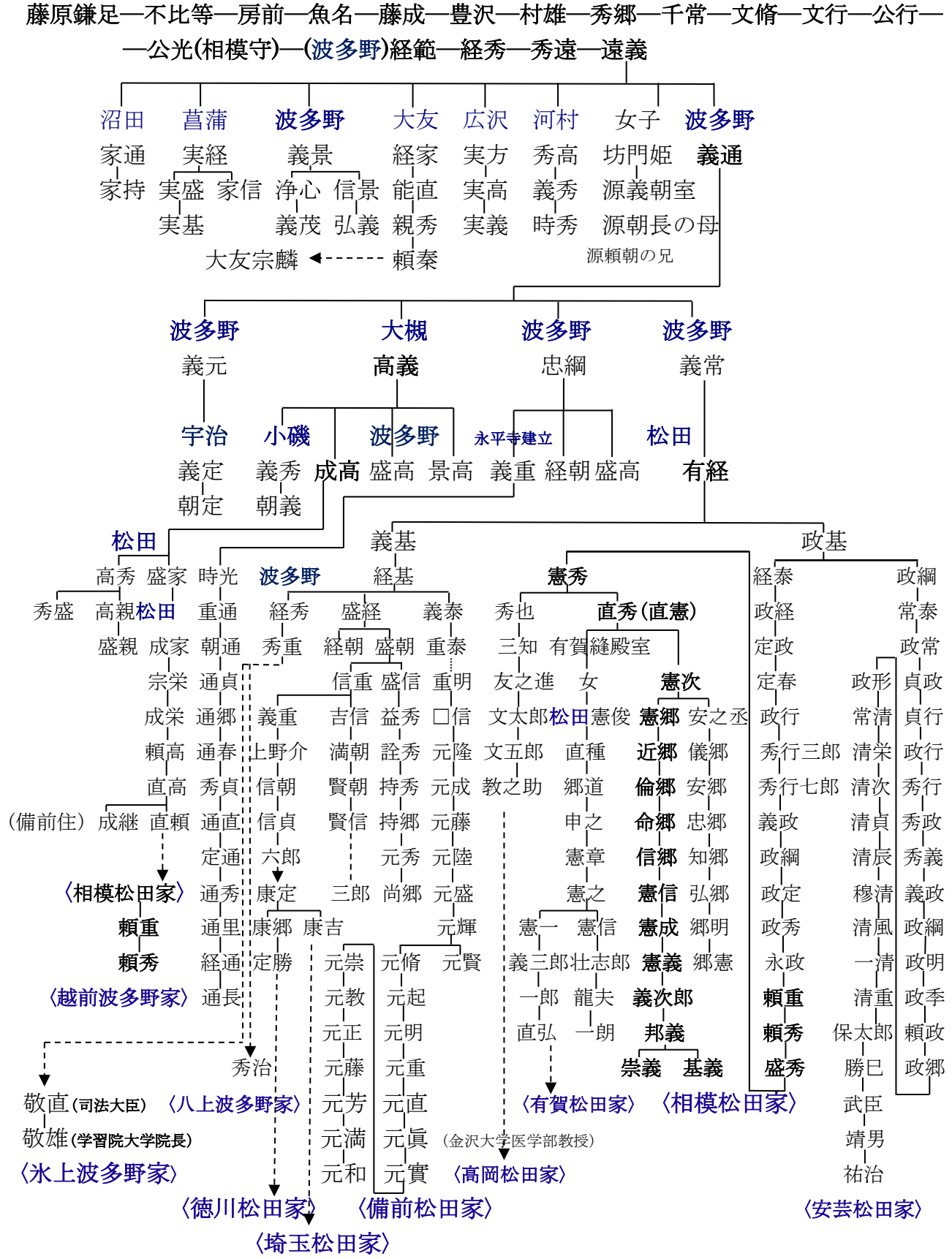
松田邦義作成



松田家の歴史

松田家と一族（3）

松田邦義作成



※ 相模松田家系図は「続群書類従第六輯下 系図部 佐野松田系図」その他、
憲秀以降は松田家「先祖由緒并一類附帳」を参考。

松田家の歴史

備前松田家と分家系図（4）

備前松田家系図

藤原秀郷―千常―定近―景近―景治―元治―元家―元久―元武―元昭―
【松田】元高―元貞―元達―元朝―元信―元遠―元運―元保―
元国(備前松田家初代/富山城主)―元喬(金川城初代)―元泰―元房―元方―元運
―元隆―元成―元勝―元隆―元盛―元輝―元堅(金川城落城)
元秀(西谷城主)　　(経団連会長)　　元脩(讃岐松田氏祖/可真村に逃れる)
親秀(富山城主)――――土光敏夫　　元重(鳥取県八頭郡波多野氏に逃れる)
元堅(徳倉城主)
元氏(伊勢新九郎(北条早雲)と武者修行に出る、奉公衆、)
‖
頼重(頼成)、相模松田家を家督、小田原北条氏重臣----------
---------- 憲信―憲成―憲義―義次郎―邦義

※　応仁の乱(1467~1477)以降、足利将軍の権力は弱体化し、備前松田家は細川氏との関係が次第に強くなっていった。備前松田家の名前に「元」がつくのは、細川勝元(室町幕府管領)の一字を賜ったものである。

細川勝元(1430~1473)と同時代の先祖は８代元成、(1416～1484)、９代元勝(元藤)(1452～1510)の頃である。

元重(1555~1587)：元輝の三男、因幡松田家の祖、元重の４代元左衛門は庄屋となる。
元明の子とは別人。

讃岐松田家系図(当初、山城に改姓、その後松田に戻す)

【松田】元脩(盛明/山城源四郎)―元起(平次郎)―元明(甚右衛門)―
伝内(高松香西)----孫三郎(五か村の大庄屋)
―松田元重----------充弘(玉松会会長)
------(丸亀)---------- 松蔵―勝徳
―山城元清―松田半七----------賢二
松田元固----元徳(衆議院議員)----
------伊三雄(三越社長)
―友良(県会議員)―幸一(詫間町長)
松田元次―(町長)----------

郡家西谷住

【松田】(八頭郡にて帰農)元重―元尚―元左衛門―元左衛門(庄屋)―元左衛門(庄屋)
―勘兵衛(庄屋)―秋西(庄屋)―浅郎―告左衛門―勘四郎―養五郎―養左衛
―周三郎―所平―雄次郎―辰蔵―良三―健次

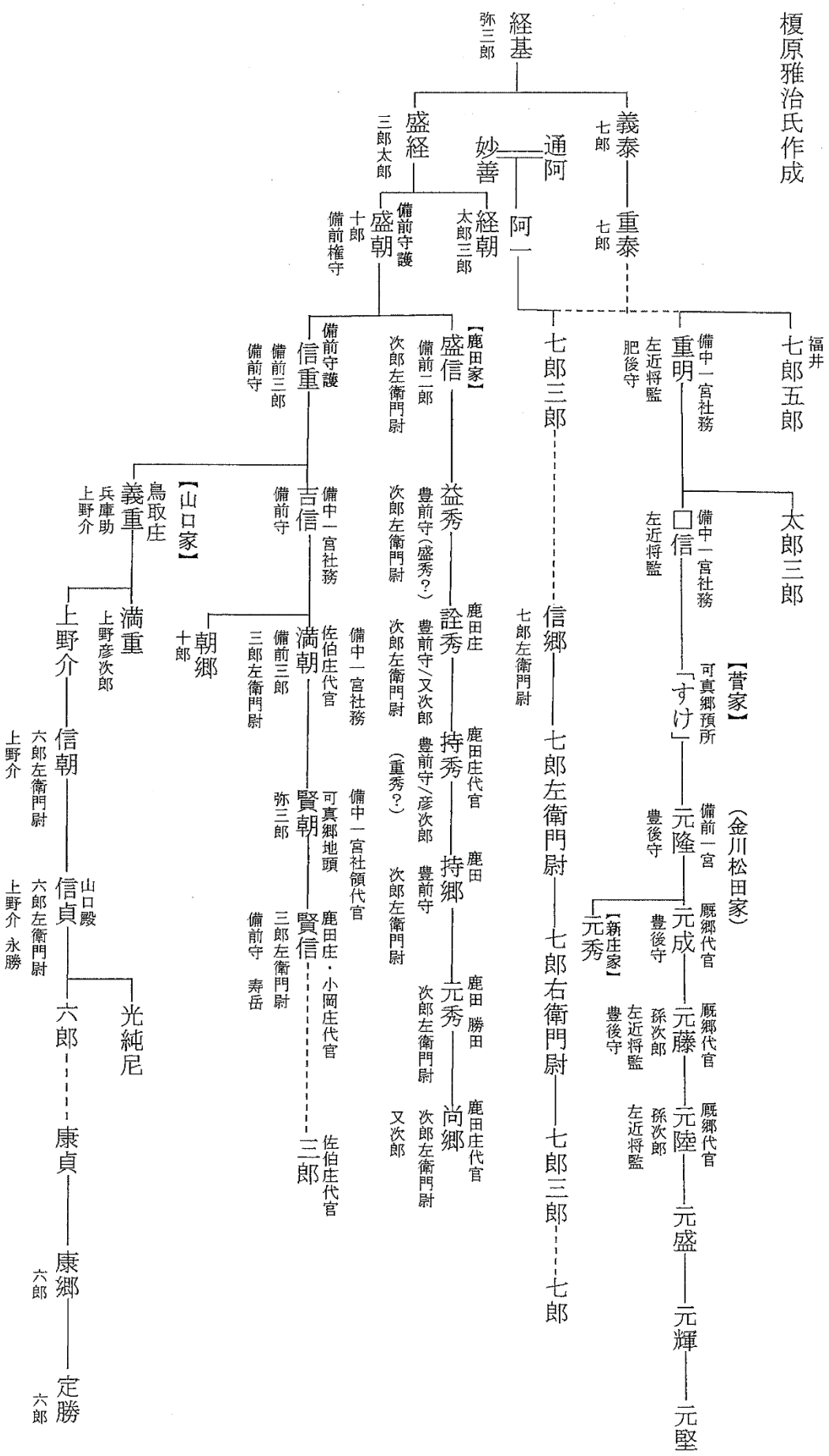
船岡町郡家 松田家系図

【松田】―和平―瀬平―峰治郎―一郎―和昭

松田家の歴史

備前松田家系図（5）

東京大学史料編纂所教授



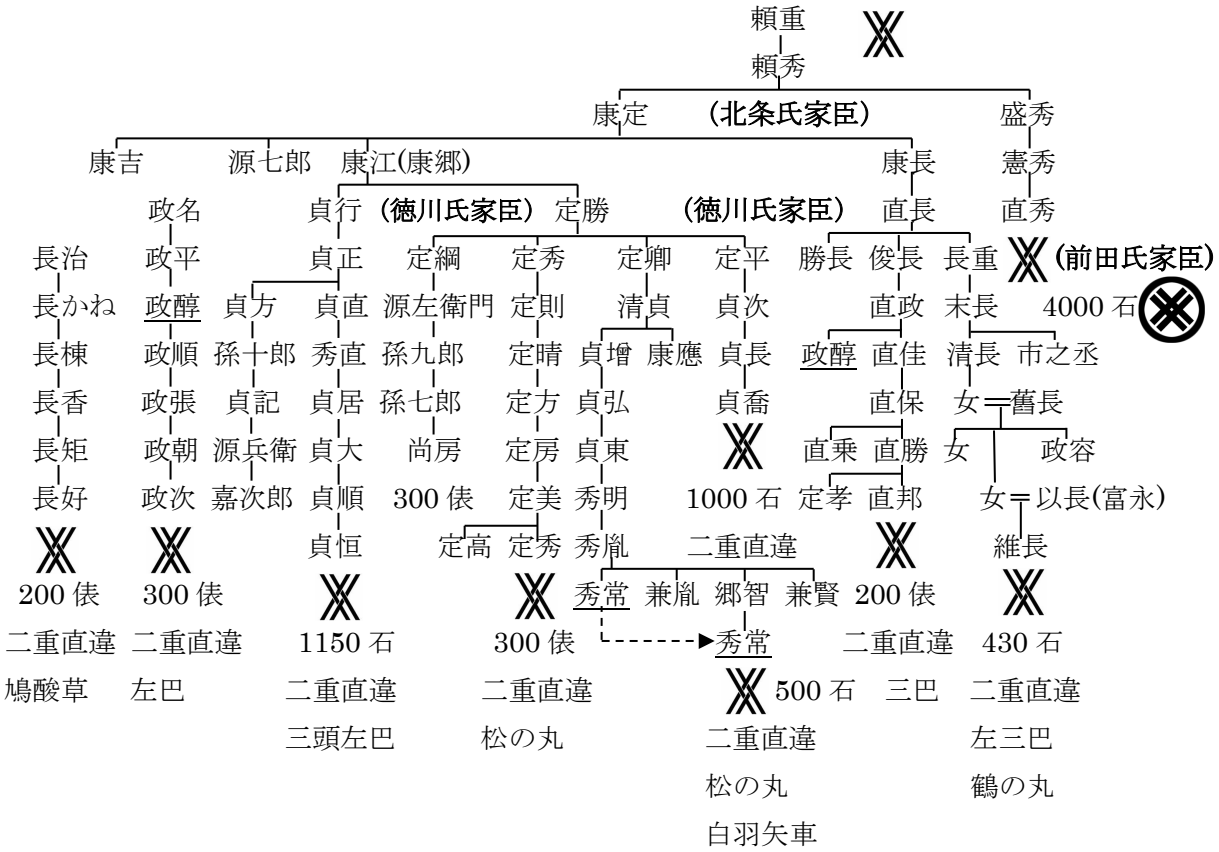
松田家の歴史

徳川氏家臣松田家

徳川氏に召抱えられた松田家は御書院番・御使番・三河国矢作橋普請監察・御先鋒砲頭等に就いた。菩提寺は牛込の天徳院である

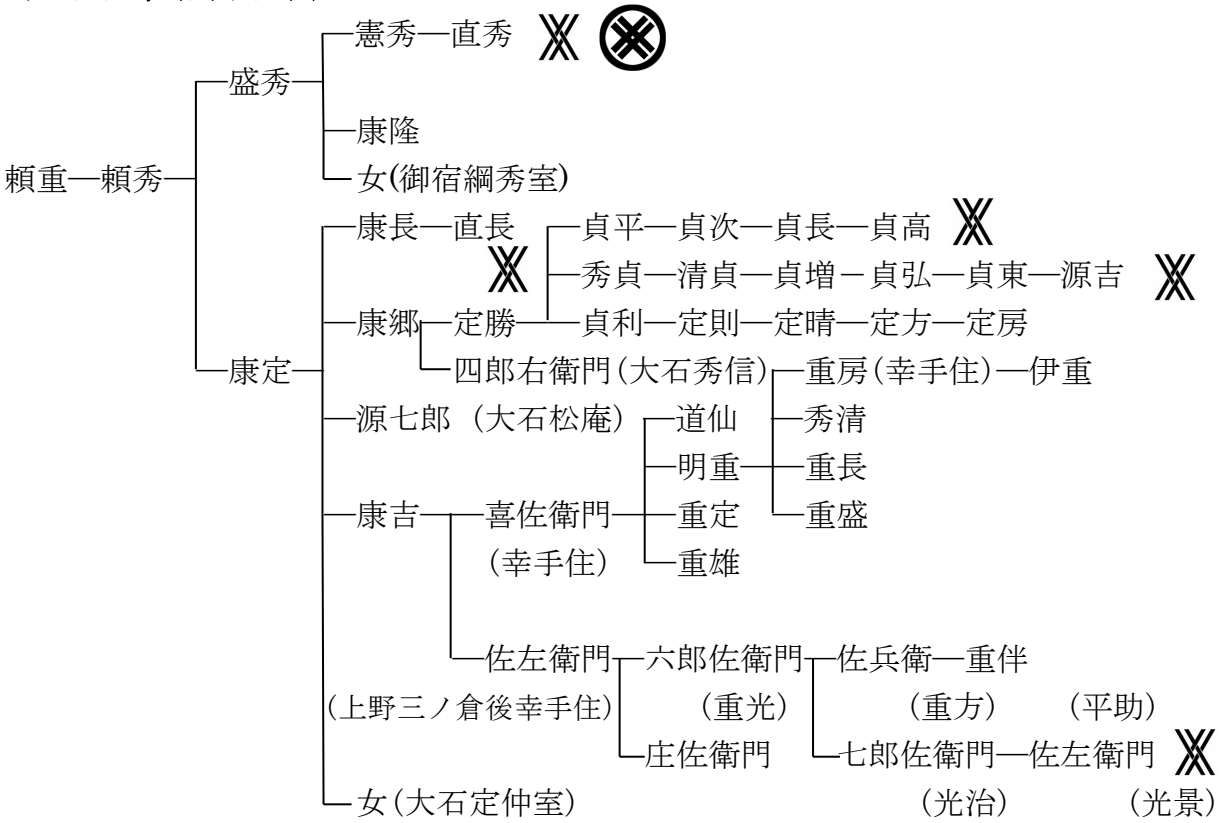
徳川氏家臣松田家系図（6）

松田邦義作成



埼玉松田家略系図（7）

松田一夫氏作成



松田家の歴史

松田家関係略年表

550年頃　常盤大連(ときわのおおむらじ)、29代欽明天皇より中臣の姓を賜る。
645 中臣常盤大連より4代目の中臣鎌足、中大兄皇子と共に乙巳の変を起こし、
　蘇我蝦夷、蘇我入鹿を討った。
669 中臣鎌足、38代天智天皇より藤原の姓を賜る。
940 藤原鎌足より7代目藤原秀郷は平将門を討ち、平将門の乱を鎮圧した。
藤原鎌足より13代目**公光は相模守**となり、相模国秦野に土着して武門と
　なり、代々一帯を開拓した。
14代目藤原経範は波多野に改姓し、波多野家の始祖となる。
1180 石橋山の合戦。源頼朝と大庭景親ら平氏方との間で行われた戦い。
波多野義常は源頼朝の挙兵に応じず、追手を受け松田郷で自刃。子の**有常**は
　大庭景義の助けにより難を逃れる。　(吾妻鏡)
1185 源頼朝、鎌倉幕府を開く。
1188 源頼朝より文治4年4月3日に鎌倉鶴岡八幡宮の流鏑馬により亡父所領の松田郷を与え
　られ、初めて**松田有経**を名乗り鎌倉殿御家人となった。　(吾妻鏡)
1205 **松田有経**は畠山重忠の乱で北条義時に従って戦い、鎌倉幕府の有力な
　御家人の一人となった。
1210 丸子河(酒匂川)で、松田・河村の一族と土肥・小早川の輩が喧嘩。　(吾妻鏡)
1213 和田義盛の乱起こる。鎌倉幕府内で起こった有力御家人和田義盛の反乱。
和田義盛の乱では、義景の子の盛通が義盛側につき、義常の弟の忠綱が幕府方で先陣
　を切って戦った。盛通が討死。
和田方に松田三郎・小次郎・四郎・六郎・七郎の名がある。　(吾妻鏡)
1221 承久の乱。後鳥羽上皇が鎌倉幕府に対して討幕の兵を挙げて敗れた兵乱。
承久の乱で松田小次郎・九郎それぞれ二人を討つ。松田小次郎・三郎・
　五郎・平三郎・右衛門太郎は宇治橋の合戦で負傷した。　(吾妻鏡)
1222 7月8日、**松田九郎有忠**、承久の乱の功で出雲国安来荘地頭職を拝領。　(吾妻鏡)
　経範より8代目の**成家**は松田を称した。
1243 波多野義重永平寺を開基。
1246 松田弥三郎常基、幕府台所に入った泥棒を逮捕。　(吾妻鏡)
1246 松田六左衛門元遠、武州加奈川を加領される。　(備前松田家系図)
1281 松田左近将監元運、弘安の役で九州に下る。　(備前松田家系図)
1283 松田保秀、出雲国安来荘地頭職などを安堵される。　(出雲小野文書)
1285 霜月騒動に、松田元連父子が北条貞時方にて活躍し、備前国伊福郷を加領される。
(備前松田家系図)
1304 松田三郎太郎盛経・渋谷定頼らが八塔寺境界相論の現地調査を命じられ、
　盛経は病気を理由に子の朝経を派遣した。　(八塔寺文書)
1305 **松田頼直**、北条時範の使いとして京より長門へ赴く。　(倉栖兼雄書状)
松田頼直、六波羅より使者として長門・鎮西へ向う。　(武家年代記裏書)
1330 備前国御家人松田小五郎、摂津国猪名荘の下司職に狼藉を加える。　(岡山県史)
1333 相模松田家一族は新田義貞軍に加わり、鎌倉幕府を討つ。　(太平記)
松田弥四郎、和気郡日笠荘に濫妨。　(壬生文書)
京都攻撃の宮方の軍勢に松田の名が有る。　(太平記)
1334 **松田盛朝**、備前国守護職になる。　(太平記・大徳寺文書ほか)
1335 12月28日、**松田盛朝**らが和気の宿の合戦で足利方に味方する。
官軍遂に戦ひ負て備前国に引退、三石の城に楯篭る処に、当国の守護**松田十郎盛朝**・
　大田判官全職・高津入道浄源当国に下著して、已御方に加る間、又三石より国中へ
　引返、和気の宿に於て、合戦を致す刻、**松田十郎**敵に属する間、官軍数十人討れて、

熊山の城に引篭る。（太平記）

新田義貞らの征討軍の東下に対し、足利直義旗下に松田・河村ら入って鎌倉を立つ。（太平記）

1335 松田元国、備前国伊福郷津島郷が加領され加奈川から国替えする。（備前松田家系図）

1336 足利尊氏、足利幕府を開く。

吉備津彦神社に松田権守在判の下知上あり。この頃松田豊後元隆・松田備前守盛元・松田豊後守盛元などの名が見える。（吉備津彦神社文書）

松田家、備前国・甲斐河・三石二か所に陣を構える。（太平記）

1338 足利尊氏、征夷大将軍となり足利幕府を開く。

1339 幕府執事高師直施行状の宛処に、松田備前権守の名あり。

1342 石見国侍所松田左近将監五郎吉重の名見える。（益田文書）

松田備前二郎左衛門盛信の名見える。（天龍寺造営記録）

松田備前権守宛、幕府引付頭人高重茂奉書に松田家家人が京都祇園社可真社本免田の押領したと記載あり。（八坂神社文書）

京都妙顕寺の僧大覚が、暦応年間を中心に十年間、備前・備中・備後の地に日蓮宗を布教する。

1344 幕府五番引付衆に、松田七郎・松田右近入道の名あり。

1345 松田左近将監重朝・重明の名見える。（東備郡村誌）

大覚大僧正筆の法華題目石に松田元喬の百ケ日忌の謚名あり。（曹源寺大光院）

1347 高師直軍の交名中に松田備前三郎。松田次郎左衛門見える。（太平記）

1348 楠木正行との四条畷の戦いの小旗一揆の高師直軍に松田左近将監重明・舎弟七郎五郎・子息太郎三郎・松田備前二郎・松田小次郎の名が見える。（太平記）

松田次郎左衛門尉らが額安寺領金岡荘に討ち入る。（額安寺文書）

松田備前三郎らが石清水八幡宮に着陣。（太平記）

1349 松田次郎左衛門、楠木正行との四条畷の戦いで討死。（櫻雲記）

1351 足利尊氏、直義兄弟争う。

観応の擾乱中の兵庫小清水合戦に高師直軍に松田左近将監見える。（太平記）

1352 松田左近将監らが、鹿田庄に対し違乱、押妨。（興福寺文書）

足利義詮御判御教書の宛先に、松田備前守とあり。祇園社領可真社本免田の濫妨の停止を沙汰。その請文に、松田備前守信重の名が見える。（八坂神社文書）

松田、河村の勧めで、新田義興・義治ら六千余騎は河村城に籠城する。（太平記）

1353 新田義興・義治ら河村城を落ちる。松田七郎行秀・松田新九郎・河村秀国など討死。（梅風記）

山名時氏・楠木正儀たちが京都を攻め，義詮は美濃に逃れた。赤松則祐は，備前守護松田盛朝らとともに上洛し，将軍尊氏も鎌倉から戻ってきたので，山名時氏は本国伯耆へ撤退した。

1355 赤松則裕、播磨・備前・美作の三国守護職となる。

1356 松田備前守信重の注進により、神南合戦の功で大森弥七に足利義詮の感状が与えられる。（一宮文書）

1357 吉備津宮南門客神社棟上に社務松田肥後守重明の名見える。（吉備津神社文書）

1358 金川泰光が、備前宇甘郷総社の神主職について、守護所へ状況を述べる。（県博物館古文書）

武蔵矢口渡しで新田義興ら自害討死し、松田・河村氏首実検させられる。（太平記）

1359 松田弾正小弼、少弐氏の陣に参じる。（太平記）

1362 備中吉備津宮随身門上棟に社務松田左近将監藤原□信の記載あり。（吉備津神社文書）

山名義理の備前侵攻に対し、備前守護松田信重一族をはじめ福林寺氏らの国人衆、城に籠って出陣せず。（太平記）

1364 備前金岡東荘での河村入道の濫妨を訴える文書中に松田備前守が見える。（額安寺文書）

松田家の歴史

1367 備中吉備津宮雑掌が、吉備津宮再建のため、松田将監入道、野口帥房、
福井七郎五郎の横領を停止し、全知行を造営に充てる事を訴える。（吉備津神社文書）
1374 石清水八幡宮領備中中国水内北庄雑掌より、押妨とう申入れに松田左近将監入道宛
見える。（石清水文書）
1375 足利義満の石清水参詣警護に松田備前守(信重)・松田彦次郎(詮秀)見える。
（花営三代記）
1378 幕府的始に松田兵庫介(義重)、松田又次郎(詮秀)が射手として見える。（御的日記）
1379 足利義満右大将拝賀に松田備前権守（吉信）帯刀、松田次郎左衛門尉（詮秀）
衛府侍見える。（花営三代記）
1380 足利義満直衣始に松田次郎左衛門尉（詮秀）衛府侍と見える。
足利義満着陣並びに一位拝賀に松田次郎左衛門尉（詮秀）・松田丹後四郎
衛府と見える。（花営三代記）
幕府的始に松田兵庫介（義重）、射手として見える。（御的日記）
1381 足利義満白馬節会外弁参仕に松田備前守（吉信） 帯刀・松田次郎左衛門尉
（詮秀）衛府と見える。（花営三代記）
幕府的始に松田上野介（義重）、射手として見える。（御的日記）
1382~84 幕府的始に松田上野介（義重）、射手として見える。（御的日記）
1385 幕府が安芸国国衙を東寺に沙汰付ける事を松田備前守に命じる。（東寺百合文書）
1386 幕府が安芸国大朝本庄枝村などを松田備前守相共に藤原氏女に沙汰付ける
事を命ず。（東寺百合文書）
松田備前守備前国散在の幕府遵行使として藤原益秀御判あり。（建内文書）
1387 幕府が長福寺領備中国薗東荘に守護被官の押妨停止文書に松田備前守見える。
（長福寺文書）
1390 吉備津宮正殿上葺棟札写しに、社務松田備前守吉信見える。（吉備津神社文書）
岩清水八幡宮宛の幕府命令書に松田備前守が見える。（離宮八幡宮文書）
石清水八幡宮大山崎神人等申状中に松田備前守吉信見える。（離宮八幡宮文書）
1392 相国寺供養に、松田上野彦次郎藤原満重・松田三郎藤原満朝・松田次郎左
衛門尉藤原詮秀見える。（相国寺供養記）
細川頼之相国寺供養に松田彦次郎重秀見える。（相国寺供養記）
南北朝統一。
1394 足利義満、岩清水放生会上卿参仕に松田次郎左衛門尉（詮秀）衛府、松田彦次
郎（重秀）衛府と見える。（兼治宿称記）
1395 備前国定林寺事、松田豊前守藤原明秀、道号高山、戒名道秀。（長寿改組雑実録）
1396 幕府的始に松田彦次郎（重秀）射手見える。（御的日記）
1397 幕府的始に松田次郎左衛門尉詮忠（秀？）射手見える。（御的日記）
1398 幕府的始に松田次郎左衛門尉詮秀射手見える。（御的日記）
1399 幕府的始に松田次郎左衛門尉（詮秀）射手見える。（御的日記）
1403 足利義持、岩清水参詣に松田三郎左衛門尉満朝見える。（八幡社参記）
1405 吉備津神社仮葺御遷宮に、社務松田三郎左衛門尉満朝見える。（吉備津神社文書）
出雲杵築大社造営に、松田掃部入道宛文書あり。
1411 大覚大僧正筆法華題目石に妙善(松田元運妻)名あり。（曹源寺大光院）
1412 足利義持、岩清水放生会上卿参仕に、松田七郎左衛門尉信郷衛府見える。
（京都御所東山御文庫記録）
1419 鹿田庄代官職請負事、松田藤原持秀見える。（九条家日記）
松田直頼、武蔵国赤塚郷の工米免除の奉書下す。（室町幕府奉公人連署奉書案）
1421 足利義持の伊勢代参に、**松田上野介**見える。（花営三代記）
吉備津神社仮殿御遷宮に、社務**松田十郎藤原朝郷**見える。（吉備津神社文書）
1422 備前国可真本免年貢、日てるによてかいそんもう申了、預所**松田**のすけとのより、
このよし大村上洛して申入れ云々。（建内文書）

松田家の歴史

1426 **松田但馬守**の名見える。（備中国総社宮造営帳写）

1430 足利義教右大将拝賀に、**松田六郎左衛門尉信朝**帯刀・**松田豊前次郎左衛門尉持郷**衛府侍が見える。（建内文書）

松田鹿田次郎左衛門尉(持郷) 帯刀・**松田六郎左衛門尉(信朝)**衛府侍が見える。（普光院殿御元服記）

1433 備中国吉備津宮社領代官職**松田三郎**云々あり。（足利将軍御内書並奉書留）

1435 鎌倉公方足利持氏幕下に、**松田**が見える。（長倉追罰記）

1437 後花園天皇室町殿行幸に、**松田次郎左衛門尉持郷**布衣侍が見える。（室町殿行幸記）

1438 足利義教、岩清水放生会上卿参仕に、**松田六郎左衛門尉信朝**帯刀・**松田次郎左衛門尉持郷**衛府侍と見える。（八幡社参記）

松田六郎左衛門尉(信朝)帯刀、**松田七郎**衛府侍と見える。（広橋家記録）

1440 足利義教石清水参詣に**松田六郎左衛門尉信朝**布衣侍見える。（八幡社参記）

1441 赤松勢を、備前・美作の国人攻める中に**松田、鹿田**は各官軍方なりと見える。（建内文書）

可真郷代官預り**松田弥三郎賢朝**(小番衆なり)が、万里小路家領可真郷の代官となる。（建内文書）

松田氏秀、足利義勝の将軍継嗣に対する万里小路時房の祝言を聞く。（建内文書）

1442 宇垣郷が、吉備津宮神領となる。（東寺百合文書）

1444～1448 幕府文安年中番帳の一番衆**松田上野介(信朝)・松田次郎左衛門尉(持郷)・松田孫三郎(賢朝)・松田七郎左衛門尉**が見える。二番衆に**松田修理亮**が見える。（蜷川家文書）

1446 **松田家**が祇園社領可真本免田の年貢を納入した受取証が残る。（八坂神社文書）

1449 足利義政参内始めに**松田三郎左衛門尉賢信**帯刀・**松田上野介信朝**帯刀が見える。（経覚私要鈔）

1450 足利義政直衣始に**松田上野介信朝**衛府侍と見える。（康富記）

1451～1454 幕府永享以来番帳に、一番衆**松田上野介(信朝)・松田三郎左衛門尉(賢信)・松田豊前守(持郷)・松田次郎左衛門尉(元秀)**・御台相伴**松田六郎左衛門(信貞)**が見える。（蜷川家文書）

1455 鎌倉公方足利成氏、鎌倉撤退時に、松田筑後・河村山城討死。（北条五代記）

松田左衛門、武州の合戦で御所方の侍として戦う。（永享後記）

1456 足利義政右大将拝賀に、**松田上野介信朝**（帯刀）・**松田次郎左衛門尉元秀**(衛府侍)と見える。（二階堂文書）

造内裏段銭京済に、**松田次郎左衛門尉(元秀)**が見える。（造内裏段銭並国役引付）

松田次郎左衛門元氏、29歳の時、伊勢新九郎(北条早雲)に伴い武者修行に出る。（岡山県史）

1457 足利義政北野社参に、**松田六郎左衛門(信貞)**が見える。（北野天満宮史料）

鹿田庄年貢の事に、**松田豊前守(持郷)**云々。（大乗院寺社雑事記）

1458 足利義政任内大臣参内に、**松田次郎左衛門尉元秀**(衛府) が見える。（報恩院文書）

足利義政上御所作事始見物に、**松田上野介信朝**(御伴衆)が見える。（大膳大夫在盛記）

1459 備前国新田庄の事で、**松田次郎左衛門尉(元秀)**云々あり。（蔭涼軒目録）

1462 足利政知、**松田頼秀**の跡地東大友半分を鶴岡八幡宮へ寄進する。（鶴岡八幡宮文書）

雲頂院領備前国上道郷に、備前守護山名相模守(教之)、**松田**並菅方云々あり。（蔭涼軒目録）

1463 足利幕府が、備前守護山名教之の徳雲院領備前宇垣庄を押領するを停める。（蔭涼軒目録）

1464 **松田備前守**は京極氏領美保関の代官を務め、大西筑後守、下河原周防守と共に後花園天皇の譲位に伴う段銭の催促に当たっていた。（朝山文書）

1465 日野富子出産に、産所番頭に**松田上野介信朝・松田次左(元秀)**が見える。（親元日記）

足利義政石清水放生会上卿参仕に、**松田六郎左衛門信貞**が見える。（斎藤親基日記）

松田家の歴史

足利義政南都下向に、**松田三郎左衛門尉(賢信)**見える。（斎藤親基日記）
11月、足利義政、**松田左衛門尉**跡を足利政知の家臣木戸実範に兵糧料所として預け置いた。**松田頼秀**は伊豆国の堀越公方に敵対し所領を没収された。

1466 足利義政伊勢参宮に、御台相伴に**松田上野介(信朝)**見える。（斎藤親基日記）

1467 応仁の乱。細川勝元と山名持豊（宗全）を大将として、諸国の大・小名が東西両軍に分属し、京都を主戦場として戦った大乱。
浦上則宗ら**松田遠江入道(藤栄)**宛連署奉書あり。（西大寺文書）
春福岡城攻撃、鹿田・菅の一族・**松田元隆**・難波行豊など参加。（備前軍記）
応仁の乱に備前の**松田次郎左衛門尉**、足利義政に最後の盃を頂戴し洛中合戦にて討死。（応仁別記）
足利義政夫妻の住む三条殿から応仁の乱の戦闘の中に、備前の**勝田(松田)次郎左衛門尉**討死。（応仁記）
出雲州美保関処**松田備前**大守藤原朝臣公順の名が見える。（海東諸国紀）

1468 赤松政則・浦上則宗が、山名の守護代小嶋大和守を追い、浦上則宗を守護代、西方四郡を**松田元隆**の管轄とする。**松田元隆**は富山城・金川城に拠る。（備前軍記）
赤松政則在判の浦上六郎左衛門・**松田遠江入道**宛の難波十郎兵衛(行豊)に与える書状あり。（難波文書）
応仁文明の乱で守護代尼子氏との戦いに、**松田備前守**の名見える。（佐々木文書）

1470 備前一宮太守殿宛の**松田権守元隆**任判下知状文書あり。（一宮文書）
出雲国美保郷内の件で、**松田三河守**の名見える。（京極持清書状）

1471 **松田頼秀**、龍泉寺(相模原市緑区青野原)を開基。

1473 足利義尚参内始に、**松田彦太郎**(帯刀)見える。（畠山家譜）
松田三河守に出雲国法吉郷を安堵している。（小野文書）

1474 **松田彦次郎元貞**、幕府から小早川元平の備後高山城救援を命じられる。

1475 **松田豊後守元成**、三野新庄公文職を伊勢氏から購入。（政所部賦銘引付/室町幕府引付史料集成上）

1476 社務理性院、菅方へ約束して備前に下る。（吉備津神社文書）
備中国吉備津宮神主職事に、御室理称院相語り**松田**菅(細川京兆被官)云々。（雅久宿祢紀）
松田三河守が、出雲国舎人保を押領する。（京極政高書状）
出雲国人**松田備前守**の安来庄・安来津・十神山城も尼子氏の統治下におかれた。
松田家はその後尼子氏の支配下に入り、尼子晴久の頃には一番重要な城（尼子十旗第一の城）である白鹿城の城主を勤めていた。

1477 応仁の乱終る。

1478 足利義政一家細川政元亭御成、**松田六郎左衛門尉(信貞)・鹿田庄代官松田豊前賢信**が見える。（伊勢家譜）

1479 日野富子伊勢参宮**松田**御伴、内裏作事奉行に**松田賢信**が見える（長興宿祢記）
鹿田庄代官**松田豊前賢信**が見える。（東寺百合文書）
鹿田庄代官事、**松田豊前賢信**が関白近衛政家邸を訪ねる。（後法興院記）

1480 日野富子北野社参籠に、**松田勝田(尚郷)**御伴見える。（蜷川家文書）
松田元成、居城を金川城に移し、金川惣町中年貢永代免除す。
11月28日、太田道灌書状に**松田左衛門尉(頼秀)**が見える。（太田道灌書状）

1481 興福寺備前国小岡庄、鹿田庄請人の沙汰文書の中に、松田惣領又次郎年貢未進取次ぎに松田備前守の名が見える。（大乗院寺社雑記）
松田元成、金川に日向山妙国寺建立し、花光院日精こと弟元満を住職とする。（備前松田家系図）

1482 備前国鹿田庄代官松田某、細川氏の威をかりて赤松方押領に対する記事の中に備前国松田は公方近習也と見える。（大乗院寺社雑記）

松田家の歴史

1483 福岡合戦が起こり、備前国に於ける戦国時代へ突入の契機となる。
松田元成、備後守護山名俊豊に援兵を乞い、約三千騎備前に進発し、福岡城を囲む。（備前軍記）
足利将軍が蜷川氏に発注を指示した複数通の文書に、松田又次郎と松田左近将監が結託して、守護赤松氏に反抗している様子が記載あり。（蜷川家文書）
足利義政、銀閣寺建立。

1484 福岡合戦に、松田一党に左近将監元成・子息次郎元勝・元成の舎弟惣右衛門元親・舎弟花光院元満・家臣に宮内備中守・藤田(鹿田)備前守・同掃部亮・子息次郎・同姓大炊助・同駿河守・その子息民部大輔・同修理亮・同孫四郎・同参河守・同越中守・同又三郎・伊賀修理亮・佐藤式部・大村弥五郎などが見える。（備前軍記）（中国兵乱記）
福岡合戦で、弓の名手松田元親が、奮戦ののち討死。（備前軍記）
福岡城陥落。松田元成は、一気に三石城攻めに深追いした為、浦上勢の逆襲に会い山の池で自害。大村出雲盛恒は、雲州尼子氏より帰国し元成の自害を知り、其の地で殉死した。（備前軍記）
京都妙覚寺十二世日寮が、松田孫次郎元藤（元勝）に曼荼羅授与あり。（岡山松田理一氏所蔵）
松田新庄殿（伊勢参拝）、松田又次郎・松田隠州（隠岐守、泉州大鳥庄処務）、松田宮内殿などの名が見える。（蔗軒目録）

1485 福岡合戦で松田一門死者過半、菅一門被官十四人云々とあり。（蔗軒目録）
日野富子伊勢参宮に、松田鹿田又次郎(尚郷)御伴衆に見える。（親元日記）

1486 上杉定正、相模国糟谷で家臣の太田道灌を謀殺する。
足利義政夫妻東山殿御成に松田上野介(信貞)御伴に見える。（蔭涼軒目録）
足利義尚右大将拝賀に、松田上野前司信貞(帯刀)・松田次郎左衛門尉尚郷(衛府)見える。（親長日記・長興宿弥記ほか）
松田上野守信貞（上州、山口殿、号悦岩、永忻居士）・松田次郎左衛門尉(尚郷、左金吾)・松田備前守(賢信、長松居士、号壽岳)・松田不遠軒・松田左馬助などの名が見える。（蔗軒目録）

1487 善応寺住持職並末寺の事で、松田元藤の折紙あり。（一宮文書）
足利義尚直衣始に、松田上野前司信貞(帯刀)見える。（蔭涼軒目録）
足利義尚近江出陣に、松田上野介(信貞)・松田次郎左衛門尉(尚郷)・松田七郎三郎・松田七郎右衛門尉・松田六郎以上一番衆に、松田甲斐守二番衆に見える。（常徳院殿動座当時在陣着到）

1488 赤松政則・山名俊豊を破り、再び播磨・備前・美作を回復した。

1490 京都妙覚寺檀那備前松田並び勝田などが見える。（晴富宿祢記）
足利義材幕下に松田頼重見える。

1491 北条早雲、足利政知の子茶々丸を攻め殺し、伊豆韮崎に入る。
備前の松田菅者は、備中の庄四郎次郎と結んで、備中守護細川氏と対立。宮内の倉に討ち入る。（蔭涼軒目録）

1492 備中守護細川勝久、備前浦上軍と庄元資合戦し、庄氏は城を捨て、松田の菅城もすぐ落ちるとあり。（蔭涼軒目録）

1493 備前国居都庄代官の記事中に、松田能登守殿宛の文書あり。

1494 **松田頼秀**、扇谷上杉定正・大森藤頼と対立し、窮地に陥る。
幕府番帳に、松田上野介・松田六郎・松田又次郎・松田備前守の名が見える。（東山殿時代大名外様附け久下文書）
武州津久井龍泉寺に、**松田頼秀**書状あり。（津久井龍泉寺所蔵）
大森久一丸、小田原城を出て、**松田新九郎康元**はこれを最乗寺に隠し、更に箱根山へ匿う。（室伏氏系図）

松田家の歴史

1495 北条早雲、大森藤頼の小田原城を奪取し、相模へ進出する。
　松田左衛門頼重一番に馳せ参じる。（北条五代記）
松田新九郎等大森久一丸を小田原に返す。（室伏氏系図）
松田左近将監、八朔の祝を幕府に進上。
1497 備前守護代浦上宗助一千騎をもって、松田元勝の富山城を囲む。（備前軍記）
1502 松田元勝が大村・横井・伊賀らの諸将を派遣し、宇喜多能家と矢津(穴甘)で戦う。（備前軍記）
松田元勝、宇喜多能家と牧石河原で戦う。（備前軍記）
1504 立河原(武州立川)の戦いに、**松田左衛門頼重**五十余騎を率いて戦う。（北条五代記）
松田豊後守、八朔の祝を幕府に進上。
1507 備前国守護松田、身延参詣の時、海長寺に立ち寄る。（日海記）
1509 三条西実隆より、松田(金川)城名に麗水・玉松の二書を賜る。（実隆公記）
松田加賀守宗繁、浜河(上州高崎)で連歌師宗長を出迎える。（宗長紀行）
1510 足利幕府、備前国馬屋郷の年賀督促状に、松田豊後守親元（元藤）馬屋郷代官の書状あり。（御状引付）
1511 足利義稙御内書に、松田豊後守元藤が見える。（大日本史料）
1516 北条早雲、三浦義同・義意の籠城する新井城を攻め、三浦氏を滅ぼす。
1519 蜷川新右衛門尉御宿所の件で、松田元陸が見える。（蜷川家文書）
松田元陸、八朔の祝を幕府に進上。
1521 御料所馬矢郷公用未進の件で、松田孫三郎元陸が見える。（蜷川家文書）
浦上の乱に、**松田尾張守・筑前守兄弟**二人、相州の**松田左衛門尉**を訪ね下る。（異本小田原記）
松田元陸、「当城」の堅固で各地で戦勝のことを幕府より賞される。
1522 松田元陸が将軍足利義晴の命に従い、妙覚寺俗別当に就く。（備前松田家系図）
厩郷儀について、年貢徴取運上の件で、橋本備中守・橋本越中守・横井才四郎の名が見える。（蜷川家文書）
1524 北条氏綱、上杉朝興の江戸城を攻略する。
京都妙覚寺十六世日賞が、王城高辻宮法花堂妙覚寺俗別当松田左近将監藤原元隆法名蓮孝に曼荼羅授与。（野々口大村氏所蔵）
1525 僧日現(池上本門寺十一世)筆記に備前国金河妙国寺厳宿院に在宿の頃、松田左近将監元隆帰依云々あり。（身延文庫手鑑）
吉備津神社領花尻前坪付注文の請人に、橋本彦四郎が見える。（吉備津神社文書）
1526 連歌師宗牧、宗長とともに東国下向の折、松田弥四郎・松田弥次郎の名が見える。（東国紀行）
1529 前管領細川高国、尼子経久と共に備前松田城に入る。（実隆公記）
1531 松田元隆(元陸)、浦上村宗と共に天王寺合戦にて討死。（身延文庫）
1536 京都妙覚寺十七世日兆上人、墓碑銘に松田左近将監息天文法華の乱で討死、十九歳と記す。（妙覚寺墓碑銘）
1538 北条氏、国府台にて足利義明・里見義堯軍を破る。足利義明は戦死。
1540 松田三郎が、御料所佐伯庄を知行する。
可真郷の公用進納に関与する松田家被官の横井氏明が見える。（八坂神社文書）
出雲州衆に、松田越前守(経通)の名が見える。（竹生島奉加帳）
松田康郷誕生。
1543 **松田六郎左衛門尉**、六所神社、高麗寺別当坊云々。（相州大磯町史高麗所蔵）
1月、相模国嵯峨郷（小田原市）宗我都比古神社を再建し、大工に平中明王太郎、小田原城の普請奉行に**松田六郎左衛門（康定?）**・中村小四郎が見える。（宗我神社由来記）
9月、**松田六郎左衛門尉**・中村小四郎が相模国山下郷寺山(平塚市高根）検地分

の田畠一反余を六所神社の寺山清三郎に寄進する。（相州文書）

10月18日、北条氏康が相模国板間郷（平塚市）高麗寺分に、検地を施行し田分銭五十六貫余を打出し、山下郷高根分十貫文の合計六十六貫文余を定納、諸役は以前の如くと定め、高麗寺別当坊に検地書出を渡す。連署した検地奉行は中村小四郎・関時長・関戸宗悦・岡田宗遁・**松田六郎左衛門尉**。（皇国地誌高麗村）

種子島に鉄砲伝来。

1544 閏11月23日、相模国江ノ島江島神社別当岩本坊に、遷宮式のため玉縄城北条綱成や小田原城の**松田盛秀**などの家臣多数が、奉加・寄進する。

相州江ノ島岩本院文書に、**松田（盛秀）殿御内儀**云々あり。（岩本院文書）

1545 1月18日、連歌師宗牧が東国に旅立ち、この頃に駿豆国境に到着し、今川義元と北条氏康との抗争で交通が不通になるが、北条方の駿河国吉原城（富士市）城主の狩野介・**松田弥次郎**の差配で通行し、伊豆国三島大社に参詣し熱海温泉に向かう。

1546 北条氏康、北条綱成らの守る河越城の救援に向かい、敵将の上杉朝定を討つ。

1549 8月18日、相模国岩瀬（鎌倉市）大長寺に、福島九郎正室の朝倉氏が寿像を納め、自分の子には北条綱成、同弟綱房、息女に**松田盛秀室**がおり、老年になり逆修として寿像を作成し、仏師は上総法眼宗琢とある。（鎌倉大乗寺所蔵）

北条為昌（玉縄城主）の娘、**松田盛秀室**と見える。（鎌倉大乗寺所蔵）

1552 北条氏康、関東管領の上杉憲政を上野平井城に攻め、越後に追う。

1553 河村郷三宮寺が建立され、棟札に**松田新次郎藤原康隆**の名が記される（相模風土記）

備前法華門徒の「比企・池上・身延三山参詣」日記に、日典上人・大村氏・富山氏等が見える。（野々口大村氏所蔵）

1554 北条・武田・今川の三国同盟結ばれる。

毛利元就が、金川松田氏の富山城を攻める。（閥閲録）

松田尾張守七千余騎で、古賀公方足利春氏を攻める。（北条五代記）

11月、武田信玄の娘黄海院殿が北条氏政に嫁ぎ、甲斐国上野原で北条方に引取られ、遠山綱景・桑原盛正・**松田盛秀**が警護奉行を務める。

1555 **松田盛秀**、有山源右衛門尉に関戸宿の問屋を申し付ける。（武州関戸文書）

1月11日、**松田盛秀**、有山源右衛門尉に関戸宿の商人問屋役を命じて伝馬役以下の宿役を務めさせ、商人道者問屋の経営も任せる。（武州関戸文書）

2月23日、北条氏康が伊豆国の舞々千代太夫に、陰陽者から直接の役銭徴収を厳しく規定し、陰陽者への役銭催促を停止させる。同日、相州の天十郎にも同様に命じる。奉行は**松田盛秀**など。（相州文書）

8月7日、北条氏康が相模国狩野庄最乗寺に、紅燭を贈呈された謝礼を述べ、輪番僧侶の在寺の間は何事も護る事、**松田盛秀**を取次役と決める。（武州文書御府内）

1556 松田元盛が、日蓮宗改宗を迫り、金山寺や吉備津宮を焼き払う。

1558 4月8日、足利義氏が鎌倉由比浜を訪れ、十日に鶴岡八幡宮に参詣する。北条氏政以下の**松田憲秀**・笠原綱信・遠山隼人佐・石巻家貞・岩本貞次が式に参加。（鶴岡八幡宮社参記）

4月28日、足利義氏が小田原城の北条氏康邸に入り、その神殿での宴会に臨み、酒宴の第一献で荷用は北条氏尭、手長は**松田憲秀**、二献で荷用は伊勢貞就、手長は遠山隼人佐、三献で荷用は北条三郎、手長は笠原綱信、他に北条氏信・清水康英・伊勢貞辰・**松田盛秀**・石巻家貞等が列席する。（鶴岡八幡宮社参記）

1559 2月12日、「北条氏所領役帳」が作成される。**松田筑前守**編纂に名が見える。

1560 今川義元、上洛途中の桶狭間にて織田信長に討たれる。

1561 上杉謙信、小田原城へ攻め寄せる。

上杉謙信、武田信玄と川中島で合戦を行う。

松田家の歴史

宇喜多直家、備前松田家の要衝龍の口城を陥れる。（備前軍記）

1562 浦上宗景の下知にて、宇喜多直家の娘を松田元賢に嫁がせ、備前松田家の天神山城出仕を任じる。（備前軍記）

毛利氏の「出雲乱入」に対し山中鹿之助らが白鹿城城主の松田誠保の救援に駆け付けた。

1564 国府台第一次合戦に、松田康吉は里見忠弘の息弘次を討ち出家する。（北条五代記）

下総臼井城の戦いで、上杉謙信と戦い**松田孫太郎**が大活躍し、北条氏政公より感状を給う。（北条五代記）

松田彦次郎宛、作州玉鉾構他の働きで浦上宗景の感状三通あり。（備前松田家文書）

4月12日、5月23日の下総臼井城（佐倉市）の戦いで、上杉謙信と戦い**松田孫太郎康郷**が大活躍し、北条氏政公より感状を給う。（北条五代記）

北条氏康の娘**桂林院殿**（後の武田勝頼の室/**松田憲秀**の孫）が誕生する。

1566 上野国金山城の由良成繁父子、北条氏に属す。

1567 北条氏、里見義弘と三船山に戦う。北条方の太田氏資が戦死する。

松田家重臣宇垣一郎兵衛を、毛利氏の人質として送る。（中国兵乱記）

9月1日、北条氏政が上総国真理谷（木更津市）妙泉寺に、同国久留里陣との往復の使僧を務めた忠節を褒める。奉者は**松田憲秀。**（上総国古文書）

1568 苅野庄谷ケ村の白旗大明神が再建され「**地頭左馬助**殿」と記される。

北条・武田・今川の三国同盟決裂する。

備前松田家、約235年続いたが金川城、伊賀久隆と謀った宇喜多直家に攻められ落城。**備前松田家滅ぶ。**

松田元輝は鉄砲で撃たれ討死。**松田元賢**は城を脱出するが、発見され討死。

元賢の弟**盛明**は備中に落ち延びる。（備前軍記）（中国兵乱記）

織田信長、入京し、足利義昭将軍になる

1569 1月25日、北条氏康・氏政4万5千、**松田氏秀**・北条常陸介・大導寺政繁を先陣に三島心経寺を出陣。

武田信玄、北条綱成・**松田憲秀**らの守る駿東郡深沢城へ攻め寄せる。

武田信玄、小田原城へ攻め寄せる。**松田憲秀邸**武田信玄に焼かれる。

松田憲秀、山口郷左衛門尉を私領横手村の代官に任じる。

北条氏康、上杉謙信同盟を結ぶ。

7月11日、北条氏政が**松田康長**に判物を出す。当文書は断簡で内容は未詳。（茂原市立郷土資料館所蔵文書）

隠岐為清らが美保関で反乱を起こした際（美保関の合戦）、山中鹿之助幸盛らは窮地に追い込まれる。松田誠保等が救援に駆け付け戦いに勝利した。

11月21日、北条家奉行人の**併**和氏続・山角康定・**松田康長**・伊東助十郎が連署して伊豆国三島護摩堂に、寺領の藪の竹木伐採を禁止させる。（小出文書）

11月23日、**松田憲秀**、山口郷左衛門尉を私領横手村の代官職に任じ村人を不入とした事を心得て百姓の退転が無い様に申しつけ、人馬の御用には憲秀の印判状で申し付けると伝える。（大江氏文書）

1570 北条氏康の子三郎、上杉謙信の養子となり、景虎と名乗る。

8月13日、北条氏政が小田原城に来た上杉の使者との交渉の中に、**松田憲秀**の名が見える。

1571 北条綱成・**松田憲秀**らの籠城する深沢城が武田信玄に明け渡される。

6月22日、北条氏政が清水新七郎に、駿河国葛山郷（裾野市）除沢は武田領では無いが、新規築城の同国平山城（裾野市千福）の城下に入り、武田領に近い為に田畠の手作が不可能で、**松田憲秀**も託言を申している。（高崎市清水文書）

10 月 21 日、北条氏康が没する。
北条氏、上杉謙信との同盟を破棄し、再び武田信玄と結ぶ。

1573 武田信玄が没する。
織田信長、越前の朝倉義景と近江の浅井長政を滅ぼす。
足利義昭、織田信長に京より追放され、足利幕府滅びる。

1574 2 月 21 日、**松田憲秀**が下総衆の原胤栄に、上総国大坪城(市原市)を里見方の正木時忠が再興したと聞いたが、同城は北条方であるが武田勝頼の指示でこの様になったのは致し方ないと諦め、上杉謙信が上野国厩橋城(前橋市)近くに越山し、北条勢は急いで出馬した。 (西山本門寺文書)

5 月 10 日、北条氏政が遠山政景に、武蔵国に上杉謙信・佐竹義重が出馬した為、政景に出陣して急ぎ着陣すべしと命じ、詳しくは**松田憲秀**から副状させる。 (早雲寺文書)

1575 2 月 21 日、**松田憲秀**が相模国塚原(南足柄市)犬峠の長泉院に、同院周辺の木草刈取りの通行路を本道のみと定め、寺山での松木伐採禁止の制札を下す。 (相州文書)

3 月 2 日、北条氏政,松田新六郎に笠原氏の陣代と豆州郡代を命じる。

5 月 21 日、織田信長・徳川家康の連合軍、長篠の戦で武田勝頼を破る。

8 月 23 日、北条氏政が桑原嘉高に、里見義弘に攻められている上総国一宮城正木種茂への救援に、兵糧米三俵を二十六日に**松田憲秀**の代官に渡し種茂へ届けさせる。 (相州文書)

1576 6 月 20 日、北条氏政が酒井康治に、康治からの計策状に満足し、忠節を認めて秘蔵の脇差を贈呈し、詳しくは**松田憲秀**から副状させる。(記録御用所本古文書)

9 月 23 日、**松田憲秀**が有山源衛門に、従来通りに武蔵国関戸関(多摩市) の関銭徴収を安堵する。 (武州文書)

1577 北条氏、房総の里見氏と同盟を結ぶ。

4 月 26 日、北条氏照が下野国小山祇園城(小山市)諸蝕口中に、新規随伴の小甫方(おぼかた)備前守は他国衆の為、手作地については努めて違乱の無い様申しつける。奉者は**大石照基**(**松田惣四郎**)。 (矢島文書)

9 月 4 日、穴山信君が佐野奏光に、小田原衆が甲府に在府して多忙と述べる。今年正月に武田勝頼が北条氏政妹の桂林院殿を正室に迎えたためである。 (楓軒文書)

1578 上杉謙信が没する。上杉景勝と上杉景虎との「御館の乱」が起こる。

1 月 18 日、北条氏政が足利義氏に、年頭挨拶の使者に**松田四郎右衛門尉(松田康郷の子)** を遣わし、太刀・五明を進上する。(喜連川文書案・古河市史史料中世編)

3 月 17 日北条氏政が武蔵国金沢(横浜市金沢区)伊東新左衛門に、四板船四隻で里見方への使者等を今回だけ上総国富津・中島(富津市)の間に送り届けさせる。奉者は**松田憲秀**。 (鈴木文書)

11 月 3 日、武蔵国虎秀(飯能市)吾野神社を造営し、大旦那に**大石秀信(松田四郎右衛門)** 、奉行に宮本周直、大工に容後新左衛門、鍛冶大工に中沢十郎左衛門、執り持ちに当社の朝日藤右衛門が見える。 (吾野神社所蔵棟札)

武蔵国南村(飯能市)妙見社を建立し、**大石秀信(松田四郎右衛門)**が見える。 (新編武蔵・武風)

松田家の歴史

1578 上杉謙信が没する。上杉景勝と上杉景虎との「御館の乱」が起こる。

1579 3月3日、**松田憲秀**が山口郷左衛門重明に、知行として武蔵国白子村(飯能市)内で大石隼人所務分20貫文を宛行い、松田家朱印状は後日に出すと伝える。(大江文書)

3月4日、**松田憲秀**が相模国塚原(南足柄市)長泉院へ板屋ケ窪で寺領1貫500文を永禄九年(1566)に寄進してあり、新規の林は寺家に預けて木の伐採は禁止したが、他所の者で伐採する者がいると聞き、伐採の時は松田家朱印状を出すと伝える。**憲秀**朱印状の初見。(長泉院文書)

3月24日、北条氏政が**松田憲秀**に、武蔵国岩槻城(さいたま市岩槻区)普請について、特に土塁の工事は間数を人頭割りの分割で施工するため、境目の崩壊に注意させる。(清水市海長寺文書)

3月24日、「御館の乱」で敗れた上杉景虎自害する。26歳。上杉景勝を支援した武田勝頼と北条氏の関係は急速に悪化する。

北条氏、武田勝頼の伊豆・相模侵攻を警戒し足柄城の普請を強化する。

波多野秀治(八上城主)、織田信長に滅ぼされる。

1580 2月19日、北条氏照の家臣で下野国小山城城将の**大石照基(松田惣四郎)**が生井郷に、百姓等の望みに任せて郷中を預け置き、先の証文類を悉く集めて郷内の諸事の事を任せる。(小山市立博物館所蔵大橋文書)

里見義頼、武田氏に対する北条氏への援兵派遣の意向を**松田憲秀**に伝える。

北条氏政,家督を子氏直に譲る。

7月5日、里見義頼が**松田憲秀**に、先月晦日に下総国小多喜城(大多喜町)正木憲時が謀判を起こし、直ちに興津城(勝浦市)に攻撃を仕掛けた。

北条氏と武田勝頼との事が不安で、もし軍勢が必要ならば加勢すると伝える。

すでに義頼は武田勝頼を見限り北条氏政を支援。(妙本寺文書、稲子文書)

7月18日、里見義頼が某(**松田憲秀?**)に、正木憲時の謀判を報せ、五日に出馬して数ヶ所も憲時方の城を乗っ取り平定したと伝え、武田豊信・土岐義成も様々に懇望していると述べる。(豊川市竹本文書)

1581 1月27日、**松田憲秀**が常陸衆の土岐治綱に、年頭の祝儀に便面(扇)・菱喰・鰊を贈呈され謝礼し、返礼に弓と扇・王明を贈呈し、今後も懇意を依頼する。(秋田藩家蔵文書)

5月3日、北条氏照が木住野善二郎・同十郎兵衛に、檜原衆が甲斐国譲原(上野原市)に侵攻して武田勢と合戦に及び、敵を討ち取る忠節を認め、北条氏直に感状を申請すると約束する。奉者は**松田四郎右衛門尉**。(武州文書)

6月19日、北条氏直が相模国浜居場城(南足柄市)番衆中・**松田憲秀代**の須藤源二郎・村野安芸守・小沢孫七郎に五ヶ条の城内掟を出し、

一、城の西方への出入りを禁止し草木伐採は東方で行い、**松田憲秀**の代官に管理させる事。

一、人馬の汚物は城外の遠くに捨てる事。

一、当番衆が城外に出る事は一切禁止の事。

一、昼夜共に櫓に人を配置し武田方へ逃亡する者を警戒する事。

一、夜間の警備を厳重にする事と申し渡す。(相州文庫足柄上郡)

6月25日、**松田憲秀**が常陸衆の土岐治綱に、夏季在陣の苦労に感謝し、23日に弟の土岐胤倫が着陣した事に北条氏直が嘉悦したと伝える。

（秋田藩家蔵文書）

10 月 29 日、武田勝頼が駿河国沼津三枚橋城（沼津市）曾根河内守に、北条方の同国徳倉城（清水町）松田新六郎（笠原新六郎）が武田氏に寝返った事を歓喜し、北条方の獅子浜城（沼津市）自落の実否を問合せる等の対応策を支持する。（山梨市平山文書）

11 月 8 日、**松田憲秀**が下総衆の相馬治胤に、書状により佐竹筋の事を知った謝礼を述べ、武田勢が伊豆表に侵攻したため出馬するが、詳しくは陣中より報告すると伝える。（秋田藩家蔵文書）

1582　1 月 12 日、**松田憲秀**が相馬胤永に、三陽の祝儀に雁と鯉を贈呈され謝礼を述べ、答礼に練絹と下緒を贈呈する。（広瀬文庫）

2 月 19 日、武田勝頼室の**桂林院殿**（北条氏政の妹/**松田憲秀の孫**）が甲斐国神山（韮崎市）武田八幡宮に、夫勝頼の戦勝を祈願する。但し、当文書は疑問点がある。（矢崎家文書）

3 月 11 日、武田勝頼、織田信長の軍勢に甲斐国を攻められ、北条夫人・信勝と共に天目山近くの田野（甲州市）で自害した。武田氏滅亡。

6 月 2 日、織田信長本能寺で明智光秀に討たれる。49 歳亡。

6 月 19 日、信長の家臣滝川一益、上野国神流川で北条氏と戦い敗走する。

7 月 13 日、**松田憲秀**、諏訪氏の重臣千野左兵衛尉（昌房）に書状を送り、信濃統治について協力を求める。（市原市千野文書）

北条氏直と徳川家康、甲斐・信濃両国の領有をめぐり、御坂峠周辺で戦う。

11 月 8 日、**松田憲秀**が里見氏家臣上野筑後守（貞国）に、甲斐御坂城（河口湖町）での苦労を察して慰労し、徳川家康との和睦が締結されたので今日は武蔵国に馬を収め、三日の内に帰宅出来ると知らせる。（高橋文書）

1583　**松田憲秀**、この頃**直秀**に家督相続。

3 月 26 日、北条氏直が原胤栄に書状を出し、**松田憲秀**が取り次ぐ。当文書は断簡。（尾張文書通覧）

4 月 20 日、北条氏直が分国役所中に、下総国臼井（佐倉市）から紀伊國高野山の僧侶 22 人、荷物二駄、馬一疋が分国中の関所を通行するのを許可する。奉者は**松田憲秀**。（西門院文書）

4 月 21 日、北条氏直が酒井康治に、下総国万喜城（いすみ市）への兵糧を速やかに調え搬入させ、委細は**松田憲秀**から副状させる。（静嘉堂本集古文書）

7 月 13 日、北条氏規が紀伊高野山高室院に、妹で武田勝頼室の**桂林院殿**の供養塔を建てる日牌料として 63 貫文、先渡し分として黄金 3 両を納める。奉者は南条昌治。（高室院文書）

12 月 1 日、北条氏直が伊豆国河津（河津町）代官・百姓中に、鉛師と**松田康長代官**の申す如く鉛砂二駄を採集させる。奉者は秩父左近。（武州文書）

1584　4 月 26 日、北条氏照家臣の**大石秀信（松田四郎右衛門）**が天野景抜貫に、22 日の佐竹勢との下野国小山表での合戦で忠節を尽くした事を激賞する。

（東京大学史料編纂所所蔵天野文書）

9 月吉日、某が某に、徳川家配下の三河・遠江両国の軍勢が駿河国に侵攻したが程無く退去し、これについて北条氏も駿河国への出馬準備をし、**松田憲秀**の書状に答えて三河・遠江の羽柴秀吉との抗争への対応と記すと伝える。

松田家の歴史

（秋田藩採集文書）

10 月 6 日、北条氏直が**松田康郷**に、武蔵国駒林之村（横浜市港北区日吉本町）での旧来からの諸役は務め、北条家朱印状以外の新規の役の賦課を禁止する。奉者は海保長玄。（武州文書）

3 月~11 月、豊臣秀吉、小牧長久手にて徳川家康と戦い敗れる。

松田憲秀、霊山寺に竹木伐採禁止の朱印状を下す。

12 月 11 日、北条氏直が橋本外記に、山角定勝・**松田憲秀代**の預かる過銭から十二貫文を与え、軍役を務めさせる。奉者は宗悦。（六所文書）

1585 2 月 27 日、北条氏直が**松田康長**と相模国萩野宿（厚木市）に市場法度を定め、月六日の楽市と規定して押買狼藉、借銭借米、喧嘩口論を禁止とし、市日での郡代触口の干渉を排除させる。奉者は間宮宗甫。（厚木市難波文書）

3 月 24 日、**松田憲秀**が関戸の有山源右衛門に対して武蔵国関戸郷（多摩市）中河原の正戒塚に源右衛門が新宿を立て、近辺の荒地の開拓をさせるため 7 年間は無税とする。奉者は岡谷将監。（杉田氏所蔵有山文書）

8 月 3 日、北条氏直が相模国箱根山中の宮城野温泉管理の**松田憲秀代**に、氏直の留守中は入湯を禁止しているが、石井某が京都への御用を命じられたため彼ら 5 人の保養として 4 日から 8 日まで湯治を許可させる。奉者は幸田某。（奥脇文書）

10 月 16 日、北条氏直が某寺に寺域内の横合いを禁止させ、前々の如く寺域での居住を安堵する。奉者は**松田康長**。（前橋八幡宮文書）

11 月 3 日、北条氏直が伊豆国修善寺に、先代の証文に任せ寺領・門前・末寺共に安堵する。奉者は**松田康長**。（修善寺文書）

11 月 10 日、里見義康が**松田憲秀**に、自身の元服の祝儀として**松田康長**から返書を受けて謝礼し、殊に**憲秀**から太刀・銭三貫文・刀・三種・三荷の贈呈に感謝し、詳しくは井上憲安から口上で伝えさせる。（手力雄神社文書）

11 月 20 日、北条氏直が下総国宮野木（千葉市稲毛区）市野々（長南町）に掟書を下し、北条勢の竹木伐採・狼藉を禁止させる。奉者は**松田憲秀**・遠山直景。（塩山市網野文書）

1586 3 月 12 日、**松田憲秀**が武蔵国関戸有山源右衛門等 6 人の百姓に、郷内給人の配分を書き立て、森岡氏が非分を起こし、百姓が欠落したが成敗したので 6 人の百姓に関戸の郷中の管理を任せる。奉者は御宿綱秀・長尾内膳正・岡谷将監。（武州文書）

4 月 5 日、北条氏直が武蔵国松山本郷（東松山市）町人衆中に掟書を下し、北条方の軍勢や甲乙人の出入りと、特に同国甲山（熊谷市）在陣の間は陣衆の出入りを禁止させ、陣中への在所からの荷物の運送や小荷駄・傳馬次は許可する。奉者は**松田某**。（武州文書）

豊臣秀吉、徳川家康と和睦する。秀吉の妹朝日姫、家康に嫁す。

7 月 18 日、北条氏直が北条氏照に、佐竹義重が下野国壬生城・鹿沼城（栃・鹿沼市）に侵攻し、壬生義雄への加勢として水海衆五十人を送らせ、同国小山城（栃・小山市）**大石照基（松田惣四郎）**の注進次第で小山に移らせ、小山衆は壬生に移らせる事と命じ、水海衆に知らせて氏照にも出陣の準備をさせる。（楓軒文書纂）

この頃、豊臣秀吉の関東・奥両国惣無事令（私戦停止令）が出される。

松田家の歴史

1587　5月8日、**松田憲秀**、山口若狭守重明へ知行として武蔵国関戸内勝河村(多摩市)の内より25貫文を宛行い、前々からの同国横手(日高市)の知行は山口弥太郎に譲って小田原城に詰めさせ、軍役等を着到の如く務めさせる。奉者は発仙。　(大江氏所蔵山口文書)

この月、豊臣秀吉が九州の島津氏を平定して国分け仕置を終わり、本格的に関東平定に眼を向ける。

北条氏、相模・武蔵両国の郷村に農兵召集のための名簿を作成させる。

北条氏、**松田康長**が管理する山中城の普請を桑原百姓中に命じる。

北条氏、豊臣秀吉の来攻に備え領国の将兵を小田原城に召集する。

6月21日、土岐頼基が下総衆の神崎氏に、豊臣秀吉と北条氏が対立し北条氏直から参陣を依頼され、**松田憲秀**からも要請された事等を伝える。　(神崎文書)

9月7日、北条氏直が小田原から下総国布川(利根町)迄の宿中に、**松田憲秀**の使者に傳馬一疋の使役を許可し、無賃傳馬とする。奉者は幸田定治。　(桜井家文書)

11月8日、北条氏直が伊豆国桑原(函南町)百姓中に、同国山中城(三島市)の普請人足一人を賃雇いし、12日から10日間の普請工事に従事させ、賃金60文を永楽銭で**松田康長**から支払う。　(森文書)

1588　4月5日、北条氏直が下総国相馬郷下山(取手市)に禁制を掲げ、北条勢と甲乙人の乱暴狼藉を禁止させる。奉者は**松田憲秀**。　(板橋文書)

豊臣秀吉、聚楽第に後陽成天皇の行幸を仰ぎ諸大名に忠誠を誓わせる。

北条氏規、豊臣秀吉に謁見する。

松田憲秀、関戸の有山源右衛門従前通り関銭徴収の権利を認める。

10月11日、北条氏政が豊島貞継に、蠟燭・鷹の贈呈に謝礼し、**松田憲秀**から副状を出させる。　(里見氏所蔵手鑑)

11月15日、**松田憲秀・同直秀**が肥田越中守に、鎌倉山内(鎌倉市)の蔭山屋敷について北条氏直の証文と憲秀判物を副えて売却した事を確認する。　(雲長庵文書)

12月11日、**松田憲秀**が原邦長・同邦房に、下総国窪田城(袖ヶ浦市)の当番普請役は2500人と決めたのに、1000人で許して欲しいとの依頼であるが、北条氏直が許可せず2500人での普請を命じる。　(松田氏所蔵原文書)

1589　4月3日、**大石秀信(松田四郎右衛門)**が武蔵国北野(所沢市)天神社に、社殿等の破損無く修築する事や神宝等の紛失のも注意させる。　(北野天神社文書)

5月16日、**松田憲秀**、家督を子の**直秀**に譲り、**松田直秀**が相模国加山(小田原市)小沢二郎左衛門尉に、父**憲秀**が当村を隠居分として宛行われ、今後の諸公事や御用は父から引き継いだ**直秀**朱印状で申し付けると伝える。　(小沢文書)

5月16日、**松田直秀**が武蔵国横手(日高市)山口重明に、前項同様に伝える。　(大江氏所蔵山口文書)

6月22日、**松田憲秀・松田直秀**が土岐義成に覚書を送り、北条氏政を京都に上洛させるため上洛の軍勢と費用を分国中の者に賦課すると申し渡す。　(安得虎子)

8月22日、**松田憲秀が**山口重明ら3名に、知行の武蔵国横手村(日高市)二十貫文の給田配分を定め、山口重久と同重勝には7貫500文ずつ、同重保は5貫文とする。　(大江氏所蔵山口文書)

松田家の歴史

10月3日、**松田憲秀**が山口重明に、知行として武蔵国関戸(多摩市)乞田村で夫銭共に25貫文を宛行い軍役を務めさせる。奉者は発仙。（大江氏所蔵山口文書）

上総の万喜城主土岐為頼に北条氏政の上洛を伝える。

豊臣秀吉、北条氏が真田昌幸の名胡桃城を奪取した為、北条氏討伐の軍令を諸将に発する。

北条氏、小田原・千津島・荻野等の鋳物師に大筒の鋳造を命じる。

1590 1月26日、**松田直秀**、相模国塚原(南足柄市)長泉院へ禁制を掲げ、寺中での殺生を禁止し、寺山での木草伐採には本道を往復させ、脇道に入り伐採する者は処罰する事。寺領として塚原内の板屋ヶ窪で1貫500文を安堵し、諸役を免許する。（長泉院文書）

2月14日、北条氏直が上田掃部助に、武蔵国戸森之郷(埼・川島町)百姓の深谷兵庫が年貢未納で欠落し、同国一本木の宿(川島町?)に居るとの申告で帰村させる。奉者は**松田憲秀**。（名古屋市大口文書）

豊臣秀吉、京都を発し、北条氏討伐の軍を関東に進める。

3月19日、**松田康長**が相模国箱根権現に、伊豆国山中城の防備堅固で羽柴勢は兵糧に不足し、弱敵で安心して欲しいと述べ、箱根山は羽柴勢を防ぐには不向きで、箱根路は山中城、片浦口は韮山城、川村口は相模国足柄城で防ぐ事が肝要と伝える。（箱根神社文書）

3月20日、**松田直秀**、相模国塚原(南足柄市)長泉院に寺領として中沼之郷(南足柄市)内5貫文を寄進し、代官の池田出雲守に断り、田畠を受け取らせる。（相州文書）

3月21日、**松田康長**が相模国箱根権現に、徳川家康の東海道方面の動向を報せ、駿豆相境に布陣した豊臣勢は兵糧に欠乏して野芋を掘り食べている状況で、兵糧は一升で百文の高値で雑炊は一杯十文と聞いており、長陣は不可能と甘い事を報告する。（箱根神社文書）

3月21日、**松田清秀**が鵜沢一右衛門・上代源太に自身は劣勢で大敵を相手に戦うため勝利は覚束ないから、落城の時に一命を惜しんだ等と子孫に伝えさせないで欲しいと依頼する。（鵜沢文書）

3月29日伊豆国山中城が羽柴秀次等の大軍に攻撃され、午後には落城、城主の**松田康長**(54歳)、玉縄衆の間宮康俊(73歳)等が戦死する。加勢として籠城した北条氏勝は城を脱出して相模国玉縄城(鎌倉市)に帰城した。

4月3日、豊臣軍小田原城を包囲。

4月17日、北条氏直が**松田直長**に、父**康長**が伊豆国山中城で討死した忠節を賞し、家督と知行・同心・被官等を相続させる。（記録御用所本古文書）

6月17日、北条氏直、**松田直秀**の忠節を賞す。北条氏直感状。

北条氏直、豊臣秀吉に降伏する。

7月5日、豊臣秀吉が北条氏直に、滝川雄利・黒田長政から降伏して氏直は切腹するが家臣等の命は助けて欲しいとの懇願を聞いて氏直を助命するとし、北条氏政・北条氏照・大道寺政繁・**松田憲秀**は切腹させると通告する。（小早川家文書）

7月11日、豊臣秀吉が菊亭晴季・勧修寺晴豊・中山親綱に、今日は北条氏政・北条氏照を切腹させ首を京都に送ると伝える。（豊国神社文書）

7月11日、**松田憲秀**が切腹する。法名は**竹庵道悟禅定門**。（相州日牌帳）

松田家の歴史

7 月 12 日、北条氏直を紀伊國高野山に追放すると決定する。　（家忠日記）

7 月 18 日、**松田直憲が**紀伊國高野山高室院に、小田原開城で北条氏家臣等は窮乏している等を伝える。　（高室院文書）

7 月 21 日、北条氏直が北条氏規・北条氏忠・北条氏房・北条氏勝・北条直重・北条直定等の一族衆と**松田直憲**・大道寺直繁等の家臣 30 人と随兵 300 人と共に小田原から紀伊國高野山に向かう。　（家忠日記）

8 月 12 日、北条氏直が高野山に到着し、高室院に入る。　（多聞院日記）

1591 5 月 11 日、**「松田直憲書状」高野山高室院文書**

松田直秀(直憲)、高野山高室院に、北条氏直の大阪転居を知らせる。

1591 7月18日、**「松田直憲書状」高野山高室院文書**

松田直秀(直憲)、高野山高室院に北条氏直からの指示がないことを伝える。

1595 7 月 15 日、豊臣秀次、切腹。

1597 **松田直秀**、四郎左衛門憲貞と名を変え加賀前田利家に 4000 石で召抱えられる。

1599 **松田憲貞**、御普請奉行として高山右近の配下にて金沢城の惣構を造る。

前田家家臣一万石大峪城主片山延高を徳川家康に内通したので油断しないようにとの前田利家遺言により、利長の命で、石川左源太と共に大阪で上意討ちする。

1995 **松田邦義**「松田家の歴史」を纏めはじめる。

2015 11 月 14 日、**松田邦義**、松田町教育委員会の要請にて町民大学で講演、演題「松田家の歴史」。

2016 **松田邦義**、松田町教育委員会の要請にて「松田家の歴史」5月に3回講演。

2017 2月25日、「全国松田サミット」松田町町民文化センターにて開催、

松田邦義、松田町教育委員会の要請にて講演「小田原北条氏重臣松田憲秀について」。

2 月 26 日、サミット参加者、松田山・松田城・寒田神社・小田原城訪問。

松田家関係略年表

「日本中世地域社会の構造」（榎原雅治氏著）

「京山物語」（高原忠敏氏）

「玉松」（玉松城命名 500 年記念）

「戦国時代年表 後北条氏編」（下山治久氏）上記書籍・他を参考資料と致しました。

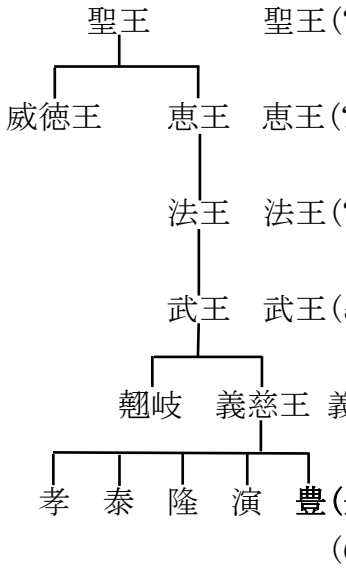
松田家の歴史

松田家の起こり

松田家の高祖は中臣鎌足である。中臣家は、古来より神道を司る家系で、鎌足も元々は神祇伯に任命されていたが、任官を辞退し、古来よりの家業を捨て、官僚の道を選択した。中臣家の系図は「古事記」によれば八百万神（やおよろずのかみ）に先駆け、最初に高天原（たかまがはら）に現れる神である天御中主尊（あめのみなかぬしのみこと）から始まる。天御中主尊―天八下尊―天三下尊―天合尊―天八百日尊―天八十万日尊―津速魂尊―市千魂命―居々登魂命―天児屋根命―天押雲命―天多祢伎祢命―宇佐津臣命―大御食津臣命―伊賀津臣命―梨迹臣命―神聞勝命―久志宇賀主命―国摩大鹿嶋命―巨陜山命―跨耳命―大小橋命―阿麻毗舎卿―音穂臣―阿毗古連―真人大連―賀麻大夫―黒田大連―（中臣）常盤大連―可多能祐連―御食子―鎌足（藤原）と流れ、中臣と称するのは欽明天皇より中臣の姓を賜った中臣常盤大連(なかとみときわのおおむらじ)からで、中臣家の始祖となっている。

今迄、定説となっていた上記の様な中臣家の歴史や645年に起きた乙巳の変は「中臣鎌足は中大兄皇子(後の天智天皇)と共に、それまで天皇家を蔑ろにし、政治を我が物にしていた蘇我蝦夷、蘇我入鹿を討ち、政治の中心を天皇家に戻した。これが乙巳の変であり、この政変から始まる一連の政治改革である大化の改新となるのである。」と云う事であったが、乙巳の変は行われたが、大化の改新などは全くの捏造である。

百済王族「三国史記」



聖王(? - 554年)、百済の第26代の王（在位523年~554年）。

恵王(? - 599年)、百済第28代の王（在位598年~599年）

法王(?～600年)、百済第29代の王（在位599年~600年）

武王(580年?～641年)、百済第30代の王（在位600年~641年）

義慈王(599年~660年)、百済第31代の王（在位641年~660年）

中大兄皇子は武王の子、翹岐(ぎょうぎ)別名豊璋である(626年~672年)、(天智天皇、天皇在位668年~672年)、

実際は、中臣鎌足は百済では大佐平智積(ちしゃく/砂宅智積)と云った。大佐平とは百済の最高官位で、現代の日本では総理大臣である。また、中大兄皇子は百済王の義慈王の子翹岐(ぎょうぎ)別名 豊璋であるともいわれている。智積はすでに中大兄皇子、百済名翹岐とは百済に居た時からの旧知の間柄であったが、日本書紀では蹴鞠の席で知り合った事になっている。

日本書紀には645年6月13日に、蘇我蝦夷等は殺されるとみて悉く天皇記・国記・珍宝を焼いたと書かれている。と云う事は蘇我家に天皇記・国記等の重要書類や珍宝が保管されていたと云う事であり、この事で蘇我家は単なる大臣でなく大王家と同格であったことを証明している。この乙巳の変で大和朝廷は百済からの渡来人に取って代わられたのである。

松田家の歴史

百済は 660 年、唐・新羅の連合軍に滅ぼされ、百済を復活させようとした王子の中大兄皇子が、倭国(日本)から水軍を派遣し、百済軍との連合で、唐・新羅の連合軍に立ち向かったが、663 年白村江の戦いで大敗し百済は滅亡し、逃れた百済人ら多数が日本に逃避して来た。

物部氏は出雲族であり朝鮮半島から渡来してきた古代イスラエル人の系統であり、蘇我氏は高句麗から渡来した。

天皇家の系図では 38 代天智天皇(中大兄)と 40 代天武天皇(大海人)が兄弟であり、天智天皇が兄で天武天皇が弟であるという事になっているが、実は天武天皇が 4 歳年上で、大海人皇子は百済の渡来人を監視に来た新羅の役人とか王族の金多遂(きんたすい)であるとか云われている。と云う事は藤原鎌足と天智天皇は百済系であり、大海人皇子(天武天皇)は新羅系になる。その後、672 年 壬申の乱が起こり天智天皇の子大友皇子に天智天皇の弟(?)大海人皇子が勝利し、40 代天武天皇が誕生する。この事は百済系に新羅系が勝利したと云う事である。天武天皇の死後、跡目を強引に継いだ妻の持統天皇(天智天皇の娘)は、鎌足の次男藤原不比等(持統天皇の弟)を昇進させ、政権を欲しいままにした。

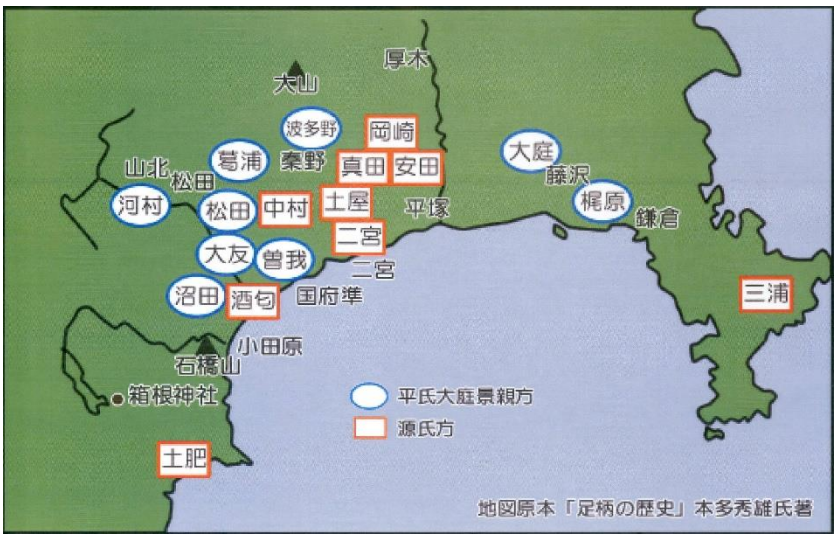
力を持った藤原不比等は日本書紀を書き換えさせ、それまで他の家にあった系図・歴史書などを破棄させた。その後、天皇は 49 代光仁天皇から天智天皇(百済系)の男系子孫が返り咲き、現在に至っている。

日本の歴史は今年(2018)で皇紀 2678 年、「万世一系の天皇制」であると云う事になっているが、実際は以上の様な歴史である。従って、天皇家は百済の翹岐(ぎょうぎ) の子孫、我が松田家も百済の大佐平智積(ちしゃく)の子孫と云うことになる。

後に智積は天智天皇(翹岐)より藤原の名を賜り、藤原鎌足と称し、藤原家の始祖となる。その子不比等は太政大臣となり、正一位を賜った。不比等の子房前（ふささき）は太政大臣となり、藤原北家の祖となった。

鎌足の 7 代目藤原秀郷は 940 年平将門を下総国幸島で討ち、平将門の乱を鎮圧した。藤原秀郷は俵藤太（田原藤太藤原秀郷）とも呼ばれ、近江三上山のムカデを退治した話が残っている。秀郷は鎮守府将軍、下野押領使として東国に下ったが、鎌足の 13 代目公光の時に相模守となり、相模国秦野に土着して武門となり一帯を開拓した。14 代経範は波多野に改姓し、波多野家の始祖となっている。19 代義常(義経)は松田郷に住んでおり、その子有常(有経)は松田次郎と名乗り、初めて松田を称し、松田家の始祖となる。

この頃兄弟、叔父甥の間で、河村氏、沼田氏、大友氏、渋沢氏、大槻氏、広沢氏、菖蒲氏、等に各々分かれて独立の家を起し、秦野盆地を中心として、その周辺の大住郡、足柄上郡、足柄下郡、餘綾郡、の四郡に亘って分立し、一族相結んで繁栄した。



松田家の歴史

波多野義通の妹と源義朝との間に生まれたのが源朝長(源頼朝の兄)である。波多野義通は京都に上って源義朝に仕えていた。保元の乱の後で、勝者後白河天皇側で戦った義朝は敗者の崇徳上皇側で戦った父の為義と 5 人の弟、頼賢・頼仲・為宗・為成・為仲を勅命により舟岡山辺で斬首した。「東国へ逃がす」と偽って為義を連れ出し斬ろうとした鎌田正清(義朝の郎党)に対して「騙すのは良くない」と抗議し、最期には事情を話して正清の郎党が為義を斬った。義通は主命と私情との板挟みになって苦しみ、保元 2 年 2 月に相模に帰って来た。2 年後の平治の乱には養育していた甥の源朝長がこの乱に加わっていた為、義朝の許に加わった。また、他には頼朝の母は熱田神宮大宮司藤原季範(従四位下)の三女の由良御前であり、正室で父の身分も高かった為に義朝が朝長よりも頼朝を重視した為に相模に帰って来たとも云う。源義朝の次男、源朝長は母の実家で養育されたが、その邸を**松田亭と云い、**萱(かや)ぶきで従者たちがつめる部屋は柱間 25 ほどの大きさで、壮大な広さの館を構えていた。**(p430 参照)** 柱間 25 の広さとは従者が 400 名程待機出来る広さである。

源朝長(16 歳)は「平治の乱」の時に父源義朝に従い平清盛・重盛らと戦って敗れ、父と共に尾張の国を目指して逃げる途中、美濃国青墓(岐阜県大垣市青墓町)で傷が重く歩けなくなった為に父源義朝に殺された。波多野・松田一族は、当初源氏方であったが、源為義の事もあり、源氏の没落と共に平家方についた。当時の武士、土豪達は源氏か平氏かというよりも自分達の土地をどう守るかという事が重要であった。従って形勢の良い方につく事が普通であった。その後、源頼朝の挙兵当時には波多野義常は平氏方大庭景親方であった。大庭景親も最初は源氏方であったが、平治の乱で源義朝が敗死し、景親は戦いに敗れ斬られるところを平清盛が桓武平氏の名門がここで滅びるのを惜しみ助命したため処刑を免れた。大庭景親は、これに大恩を感じて平氏の家人として仕えていた。一方、景親の兄大庭景義は頼朝の挙兵に早くから参じており、頼朝の側近として仕えていた。義常は 1180 年石橋山の合戦では大庭景親と共に頼朝軍を破り、頼朝の鎌倉入りの際にも一族と共に松田城に籠もり抗戦した。その後、義常は頼朝に追われ自害した。

義常の嫡男松田有常はこの時、大庭景義の懐島の屋敷にいて難を免れた。源頼朝の腹違いの兄（源朝長）の母は長男松田有常の伯母でもあり、又、大庭景義は頼朝の父義朝の重臣で、鎌倉幕府の長老であった。松田有常と河村義秀は大庭景義の外甥でもあったので、景義は義常誅伐の事件の起る事を事前に察知していて、秘かに保護を加えたものである。大庭景義は松田家存続の大恩人である。松田有常は一時松田郷を没収され、身柄を大庭景義に預けられたが、それより 7 年後の**文治 4 年(1188)4 月 3 日**松田有常と河村義秀は鶴岡八幡宮で催された流鏑馬で抜群の技量を示し、頼朝を感心させ、後に大庭景義は義常の子有常を伴って頼朝の元に参上して厚免を請願し許され、旧領の一部を戻されて、鎌倉御家人の列に加えられ、松田次郎を名乗って、ここに**松田家が正式の発足**を見たのである。松田家はこのようにして将軍頼朝の御家人の列に加わり松田郷の地頭職にもなったが、右馬充義常自害を中心とする石橋山合戦の前後は松田家の存亡の危機であって、大庭景義の援護もあって、幸いにもよくこれを乗り越えたものの、義常自害等の事が松田家に与えた精神的影響は大きく、永く払拭することが出来ずに、源家や鎌倉幕府に対する不信の念が根強く残ったのである。松田家の同族である河村氏も鎌倉幕府に対して不満を持った家柄である。松田家一族から数名の者が承久の乱（1221）の戦功に依り第四代鎌倉将軍藤原頼経、執権北条義時の時代に備前・出雲に領地を賜った。

三浦一族の和田義盛は関東武士を統率する侍所別当であり、鎌倉幕府の四天王と言わ

れたが、源頼朝の死後、北条義時との間に確執を生じ、1213 年一族の中で 3 人が幕府に検挙されるという事件が勃発。この事件で面目を潰された義盛は決起し、突如幕府を襲った。戦局は義盛に有利であったが、義盛の本家三浦氏が幕府方に寝返り敗れた。

これが「和田義盛の乱」であり、「吾妻鑑」によるとこの時に和田方に付いた御家人の中に松田小四郎、松田四郎(実盛)、松田六郎(実経?)、松田七郎、波多野三郎(義定/秀高？)、波多野太郎、波多野彌次郎(朝定？)の名が見える。

「松田一族の本貫地と守護・地頭 等」

波多野経範、相模波多野荘を領有する。

波多野経秀、経範の子、1086 年「後三年の役」で勲功 相模波多野荘を領有する。
美作波多野氏。

波多野義通、次郎、相模国波多野荘。
波多野本庄北方保延三(1137)年父遠義から義通へ。

河村秀高、三郎、河村三郎秀高(山城権守)、足柄郡河村郷(足柄上郡・南足柄市) 。

大友経家、四郎、相模国足柄上郡大友郷。大友能直、1196 年に豊後国(大分県)の守護職、後に大友宗麟は豊後・豊前・筑後・筑前と北九州 6 カ国の守護大名となった。

波多野義景、五郎、波多野義景、波多野荘、波多野本庄北方(嘉応元(1169)年六月義通から義景へ)。

菖蒲実経、六郎、菖蒲実経、（沼田六郎）。

沼田家通、七郎、沼田家通は遠義の 6 男?。

河村秀清、岩手郡・斯波郡の北上川東岸一帯・茂庭の地・摩耶郡の地頭。

大槻高義、波多野庄内大槻郷住、相模松田家の先祖。大槻氏和泉国の地頭。

松田有経、1188 年、松田郷(松田町と開成町)、出雲国の地頭。

松田家一族は御家人であったが、承久の乱(1221 年)の戦功に依って第 4 代鎌倉将軍藤原頼経、執権北条義時の時代に備前・出雲その他に領地を賜った。

松田有忠、九郎、1222 年、出雲国大野荘・安来荘地頭職。

松田義基、三郎、1222 年、伯耆国(島根県の中部~西部)、鳥取・船岡――伯州松田家。

松田盛朝、十郎、1222 年、備前国伊福郷地頭職十郎、備前国守護、(「太平記」十四)。

菖蒲実盛、四郎、1222 年、石見国美濃地・黒谷郷地頭職(益田市上黒谷町・黒周町)

波多野盛高、1222 年、和泉国軽部郡(泉大津市・和泉市・忠岡町にかかる地域)。

松田保秀、有忠の 4 代目 1283 年、安来荘地頭職を安堵。

廣澤實高、広沢郷、承久の乱の功で新たに備後国三谷郡西方を賜り、その支配権が三谷郡全域に及んだ。広沢実方は源平合戦での活躍によって備後国三谷郡十二郷の地頭職を得、その後承久の乱の戦功で三谷郡全域を支配(嫡男家は江田氏、次男は和智氏)。実方は備後国三谷郡十二郷の地頭。

松田盛朝、1353~1362 備前国守護、足利尊氏が、軍を整えて建武三年(1336)東上したが、そのとき、備前国一宮神社を造営寄進し、守護松田盛朝が寄進状を持参したと『一宮文書』にみえる。また、同年六月、一宮政所宛の松田権守盛朝花押の下知状があるから、盛朝が守護の地位にあったことは間違いない。

波多野義重…越前国地頭。越前国比志庄、永平寺を開基(曹洞宗)。

波多野経基――丹波波多野氏。

波多野秀長、1467 年応仁の乱で東軍細川勝元に属し、各地を転戦し、その戦功により丹波多紀郡を賜った。

松田家の歴史

伊勢神宮禰宜と松田家の一族

波多野遠義、伊勢初斎宮御契に蔵人所衆として従事する。

波多野義通、

義通は伊勢にも領地を持っていた関係で妻の一人が伊勢守光定の女だった。伊勢守光定の女が波多野義職の母であり、その子孫が伊勢神宮禰宜の荒木田・大中臣の両氏と結びついている。

```
                ┌【中島】義康┬通定─【荒木田】定秀─朝村─【荒木へ】
                │秀能─能成   └朝職┬朝修【中島氏】
 ─義職──┬義定                    └典藤【中島氏】
                └ 朝定
```

波多野次郎朝定、義定の子(弟？)、弥次郎、中嶋太郎義泰の兄弟、

朝定は祠官の外孫、母は伊勢神宮外宮の神宮荒木田盛長の娘

廣澤實高、廣澤左衛門尉實高、伊勢神宮の広沢御厨で兵庫県相生市。伊勢波多野氏。

（吾妻鑑）

「雑学」☆☆☆

松田家の歴史

鎌倉時代・室町時代・戦国時代の松田家一族と云われている五輪塔群

松田町松田惣領 965　平安時代・鎌倉時代・戦国時代と見られる五輪塔が 70 基・宝篋印塔 2 基が新松田駅南方面近隣文久橋手前「元立花愛児園」に保存している。

大蔵院　松田町松田庶子 880-1　　大蔵院住職 松島明夫氏、松田町元町長 島村俊介氏

第二次世界大戦中(1945 年頃)食料増産の為、大蔵院西側の藪を開拓した時に五輪塔群 20 数基が発見され、地下から 3 口の骨の入った古壷が出土した。古壷は瀬戸焼の鎌倉時代前期 「四耳壷 四ツ耳付 円錐形」・鎌倉時代 「三耳壷 三ツ耳付 円錐形」・鎌倉時代後期 「梅瓶壷 長味の壺 古常滑」であった。当時、高級な施釉陶器であった四耳壷に納骨された人物は、当地域に関わる有力者であり、この時代は**松田元信**が居住した時代に一致し、又、その相応しい人物と思われる。　　(現在古壷は神奈川県立博物館に貸出中)

松田家の歴史

「大蔵院今昔」大蔵院住職松島明夫氏「大蔵院今昔」から抜粋

『現在の大蔵院は京都の聖護院を本山とする本山修験宗の寺院で、「新編相模風土記稿」によると大永 7 年(1527)に起立して、それ迄は文殊山安養寺として松田山の最明寺跡の東南側下部にあったとあり、又小田原玉瀧坊の配下とある。

玉瀧坊とは松原神社の別当で、旧宮前町にあり本山派の寺院であり北条氏綱が尊崇した。

玉瀧坊は相模・伊豆・武蔵の山伏を統括し、大蔵院もその配下にあった。

玉瀧坊の中興の順愛が紀州(堺説も有り)で入手した鉄砲を北条氏綱に献上し北条氏と密接になり、その様な関係から伊達や上杉の元へ使者として行ったという。大蔵院もその様な仕事をしていた可能性も否定出来ない。

江戸期迄は大蔵院は寒田神社の別当寺として祭礼などを執り行っていた。

明治初期の神仏分離令に続き修験道廃止令で天台宗の寺院となった。

第二次世界大戦後に聖護院を本山とする本山修験宗に戻った。修験道廃止令が出される明治 5 年迄は院主は松田満正、以後松島泰栄、昌順、名順、明真と続き現在の松島顕明(明夫)で 19 代目となる。

墓地内には昔寺子屋があった証の 2 基の筆塚があり松田満正と松島泰栄の名が刻んである。寺子屋で使ったと思える生徒用の机数個と師匠用の机も残っている。また大蔵院所蔵の古文書が 35 点あり、特に松田町指定文化財になっている古文書の多くの内容は法印や権大僧都を名乗っても良いとの聖護院からの免許状が多い。

さらに松田町指定文化財になっていて、現在県立博物館に貸し出している 3 つの古壷がある。「四耳壷」「三耳壷」「梅瓶壷(めいびんこ)」で、これらは国道 246 号線バイパス工事中(戦時中食料増産の為開拓時説もある)に西側の藪を整地した際、五輪塔の下より出土した。これらの古壷は中世(平安末期から鎌倉時代)に作られた施釉された瀬戸焼で中には人骨が入っていた。誰の骨かはわからないが、位の高い人だった可能性がある。現在大蔵院の墓地にそれらの人骨が他の壷に入れられ供養塚が建てられている。尚、大蔵院の本尊は大山不動を模し岩座に座っている姿の、一本作りの不動明王で江戸中期の作である。』

「雑学」☆☆☆

松田家の歴史

寒田神社と松田家　　寒田神社「御創建千七百年記念誌」より

寒田神社の「郷社由緒」に「神職の沿革・往古は松田蔵人あるいは松田相模守蔵人と称し世襲の神職奉仕をしていたが、承応 3 年(1654)大洪水の為全てを流亡し、家名が断絶してしまった。そこで松田家と姻族なる間柄の大蔵院主が世襲で神社の別当職を務めてきたが、明治維新の神仏両部が禁止され大蔵院主が復職し、松田満正と称し詞掌を務める」とある。

以上より推察すると、建保 4 年(1216)松田元国が松田に館を建て居住したのは現在の大蔵院の所ではなかったか。大蔵院の所から五輪塔群と鎌倉時代の古壷(現在神奈川県立博物館に貸出)が出土しており、それ相応の人が住んでいたと考えられる。

そして代々相模松田家の拠点となっていたと推察される。又、由緒ある延喜式内寒田神社の管理もしていたと考えられる。また、小田原北条氏の時代、大永 7 年(1528)後に大蔵院となる安養寺が覚俊という僧によって松田山山中に開山されるが、この時代隆盛を誇っていた松田家が別当寺として開基したと思われる。又、永禄 2 年(1559)「小田原衆所領役帳」で、松田庶子分は北条幻庵、松田西分は松田康隆が所領、この松田西分は松田城付近の事だが、現在の大蔵院の場所や松田山中の安養寺の場所も含まれていたと考える。

更に、江戸から明治に移る時の神仏両部が出来なくなり、法名から松田満正と称した事は松田姓が脈々と続いていたと考えられる。現在松田満正の子孫は松田町には居住していない。しかし、鎌倉時代、備前国を始め全国に分流していった松田家は今も各地で活躍している。

「雑学」☆☆☆

松田家の歴史

大庭景義と松田家　大庭景義　出羽権守、懐島権守

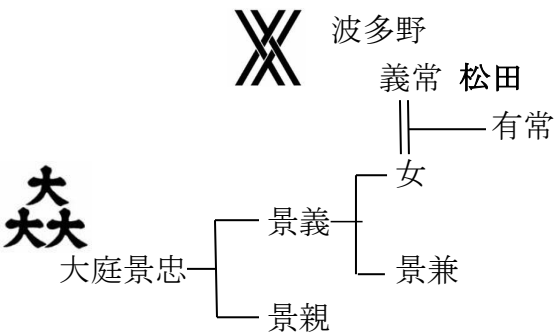
大庭景義は平安時代後期から鎌倉時代初期の武将。若くして源義朝に忠誠を誓った。相模国大庭御厨（神奈川県藤沢市）の中の懐島郷（神奈川県茅ヶ崎市）を本拠地とした。保元元年（1156 年）の保元の乱においては弟景親とともに源義朝に従軍して出陣したが、敵方の源為朝の矢に当たり負傷。これ以降歩行困難となった。強弓の源為朝の矢に当たって生還したのは景義だけだそうだ。そして源義朝の父為義を攻めることを嫌い、家督を弟の景親に任せ、第一線を退いて懐島郷に隠棲した。為義攻撃の事で波多野義通も相模に帰った。治承 4 年（1180 年）に源頼朝が挙兵すると、弟の景親と袂を分かち頼朝の麾下に参加、景義と景親には、源平の合戦でどちらが勝つにしても「大庭の家を残す」という思惑があったのかもしれない。

一方、松田家（この時はまだ波多野）は景親と共に平家に味方した波多野義常が頼朝に攻められ、自刃した時に義常の嫡男松田有常（大庭景義の娘は松田有常の母）を景義は懐島の屋敷に匿い助けた。この事で松田家が存続したのである。その後も草創期の鎌倉幕府において、長老格として重きをなした。文治５年（1189）の奥州征伐奥州藤原泰衡を征伐する際、頼朝は後白河法皇の院宣を得られず苦慮していた。

しかし景義が、奥州藤原氏は源氏の家人であるので誅罰に勅許は不要なこと、戦陣では現地の将軍の命令が朝廷の意向より優先されることを主張。その意見が採用された。景義は、頼朝の御家人として、北条政子の鎌倉入りの出迎えや、鶴岡八幡宮の造営、頼朝の館の造営などを仕切った。

建久4年（1193）5月28日曽我兄弟仇討ち事件が起こった。この事件は単なる仇討ち事件では無く、「北条時政による源頼朝暗殺計画説」とか「大庭景義・岡崎義実を中心とする相模国御家人の反北条のクーデター」とか云われている。

それは①仇討ちの際の死傷者の多さ（祐経以外に10人の御家人）②事件後、頼朝の弟範頼が失脚・殺害されたこと、③有力御家人の大庭景義・岡崎義実が失脚・出家したこと、④常陸国武士団の粛正、などの出来事が仇討ちに絡んで起きたからである。これらの事実を根拠にして、仇討ち事件の背後に隠された政治的陰謀事件後に大庭景義・岡崎義実が出家し、大庭景義が鎌倉を追放されたのは、彼らがクーデターの首謀者であったと云われている。だが、クーデターは失敗する。そこで、両者は妥協して事件は単なる兄弟の仇討ち事件にすぎないとして真相を隠そうとした。建久4年（1193）に出家し、鎌倉より一時追放されたが、建久6年（1195）には許されて頼朝の上洛に供奉。承元4年（1210）相模の懐嶋で没した。嫡男の景兼が跡を継いだが、1213年和田合戦が起きると大庭景兼は連座し、滅亡した。



松田家の歴史

松田一族と戦役

平将門の乱（935~940）

平将門が平安時代中期に関東で起こした反乱。平将門は桓武平氏の一族で、下総国豊田郡（茨城県結城郡）に本拠をもった豪族だったが、935 年一族と内輪争いを起こし、叔父の平国香を殺害。939 年には常陸（茨城県）・下野（栃木県）・上野（群馬県）の国府を攻め落とし、自らを新皇と称した。一時は関東地方の殆んどを従えたが、翌年、**藤原秀郷**・平貞盛ら地方豪族に滅ぼされた。松田家はこの**藤原秀郷**を遠祖としている。

平忠常の乱

1028 年（万寿 5 年）6 月 21 日～1031 年（長元 4 年）4 月 28 日

在地領主たる平忠常は自らの権益を確立する為国司と対立。国司軍よりは強力であったが、朝廷軍に敗れた。松田家の先祖、**藤原常治**が源頼信に従い、奥州に赴き、戦功をたてて、播磨国佐用郡（兵庫県北部、赤松則村の領地）2500 貫を賜っている。

前九年の役

1051～1062 年平安時代後期の東北地方を舞台とした戦役である。この戦いの結果、安倍氏が滅び、清原氏が東北の覇者となった

陸奥国の土着の有力な豪族安倍氏は、陸奥国の奥六郡（岩手県北上川流域）に柵（城砦）を築き、半独立的な勢力を形成していた。しかるに、11 世紀の半ば朝廷への貢租を怠る状態になり、1051 年陸奥の国司藤原登任が数千の兵を出して懲罰せんとし、戦闘が勃発する。結果は安倍氏の圧勝であり、藤原登任は敗れ都へ帰った。そこで朝廷は翌 1052 年に源頼義を陸奥守とし、事態の収拾を図る。ところが同じ年、後冷泉天皇生母の病気快癒祈願の為に大赦を行い、安倍氏も朝廷に逆らった罪を赦されることとなった。また 1053 年には源頼義は鎮守府将軍となっている。源氏が東国に勢力を築く契機となった。前九年の役の功で清原武則（出羽国の豪族）は鎮守府将軍に任じられ、出羽・陸奥にまたがる大領土を実現した。備前松田家の先祖、**藤原元家**が源頼義に従い、奥州に赴き、康平 5 年(1062)8 月 17 日阿部頼時・貞任らを衣川で 200 余騎を討った功により、丹後国多紀天田（京都府福知山市付近？）のうち、3000 貫を賜った。

鳥海（とのみ）の戦い（前九年の役）

「陸奥話記」によると前九年の役に参加した**波多野経範**とその家来たちが、鳥海の戦いで源頼義らと共に敵に囲まれてしまった。**波多野経範**らは自力で突破したが、敵中で苦戦していた源頼義を救うため再び敵中にもどり、頼義を救ったものの、自らは戦死したと書かれている。**波多野経範**は松田家の先祖になる。

後三年の役

1083～1087年平安時代後期の陸奥・出羽（東北地方）を舞台とした戦役である。前九年の役の後、東北地方に覇を唱えていた清原氏が消滅し、奥州藤原氏が登場するきっかけとなった戦いである。役は結局、義家・清衡対武衡・家衡との戦いになり、清原一族の内乱は一転して源氏対清原氏の武門の棟梁権をめぐる戦いになった。義家の弟義光も来援し、寛治元年（1087）十一月、遂に金沢柵を落とし、義家側の勝利となった。この戦いは朝廷から私闘と見なされ、義家に対して恩賞が与えられなかったため、義家は自腹で配下に恩賞を与えた。義家のこの態度が東国武士団との主従関係を強め、源氏の信望が東国に高まり武家の棟梁の地位を確立するに至った。

松田家の先祖、 **藤原元久**が源義家に従い、奥州に赴き、戦功をたてて、寛治元（1087）

松田家の歴史

12 月 26 日武蔵国波多野(武蔵国に波多野という地名は無いので相模国波多野と推定)に3000 貫を加領された。

保元の乱(ほうげんのらん)

平安時代末期の保元元年 7 月(1156)に地位をめぐる確執から兄の崇徳上皇と弟後白河天皇の対立は深まり、双方の武力衝突に至った政変である。両派はそれぞれ武士を集め、後白河天皇方には源義朝、平清盛、源頼政、源義康（足利義康）らが味方する。一方、これに対して崇徳上皇は源為義、平忠正, 平長盛, 平忠綱, 平正綱、平家弘, 平康弘, 平盛弘, 平光弘, 平安弘、源頼賢, 源頼仲, 源為成, 源為宗, 源為仲が味方した。政治的な勝利を目指していた崇徳上皇と藤原頼長及びその護衛の将兵達を後白河天皇・信西らが本格的な軍隊の投入で一気に排除したものであった。長く続いた平安の世は終りを告げ、武家の政治へと時代は動いていく。**経範**の 4 代目**波多野義通**は源義朝の重臣として後白河天皇方につき、大活躍をした。崇徳上皇・源為義らと戦い勝利を収めたが、**波多野義通**は源義朝の父為義の処罰を見たり、為義の幼い子 5 人も処罰しなければならない立場に立たされ、嫌気がさして相模に戻った。源義朝は父為義を処刑して左馬頭になった。

平治の乱

平安時代末期の平治元年 12 月 9 日（1159 年）より発生した。源義朝は保元の乱の時に、父・為義、弟・為朝を敵に回して戦い、二人を殺害したにもかかわらず、一緒に戦った平清盛の出世に比べて、冷たく扱われているのに不満を持っていた。源義朝は後白河上皇と二条天皇を閉じ込め、信西を殺害した。これが平治の乱の始まりであった。源氏は平治の乱でほとんど壊滅状態に陥った。具体的には武家同士の争いが主となった点で保元の乱との大きな相違を感じさせる。源頼朝 13 歳の時平治の乱に敗れて捕らえられたが、平清盛の母池の禅尼の命乞いによって助けられ、後に天下を治めた。鎌倉を目指して落ち延びようとした義朝と長男・義平は捕らえられ殺害され、頼朝は伊豆蛭が小島へ流され、義経は京の鞍馬寺へ預けられた。頼朝 13 才、義経は 1 才であった。源氏の主な人達も次々と殺され、平治の乱以降は武士の世界は平氏の世の中になっていき、また武士が政治の流れを決める時代になっていった。備前松田家の先祖、**藤原元高**が源義朝に従い参戦し、平治元年(1159)12 月 26 日京都六条河原で、平清盛の軍勢と戦って討死にした。

宇治橋の合戦

1180 年 75 才の老齢にして一念発起した源頼政は、後白河法皇の第 2 子以仁王(もちひとおう)を擁立し、全盛の平家に戦いを挑んだが事前に発覚、宇治平等院で、敢えなく敗れてしまった。しかし、この戦いが全国の源氏を結集させる基となった。平知盛と源頼政の橋合戦を宇治橋の合戦と云うが、宇治橋では幾度となく合戦があった。**波多野経朝**は宇治橋の合戦・入京の合戦で活躍した。

松田一族も宇治橋の合戦で多く負傷したが、**松田十次郎・松田九郎**は京方の軍兵を討ち取っている。この**松田九郎は有常（経）の子有忠**である。

早く**松田九郎有忠**をして出雲国安来庄地頭職となさしむべき事

右の人、勲功の賞として彼の職になさしむべし。依って得分已下の事は、兵衛尉資朝の例に任せ、沙汰いたさしむべきの状、仰せにより下知、件のごとし。

貞応元年(1222)七月八日　　(北条義時)

陸奥守平（花押）

のち**有基**は亡父**有忠**の譲状によって同国大野庄地頭職を幕府から安堵され、さらに子**保秀**へ安来庄地頭職を譲っている。『系図纂要』に**有忠**を「安木」としているのは、こ

の安来庄のことである。民謡「安来節」で知られる安来庄は有忠が承久の乱での勲功の賞として与えられたものである。

系図では菖蒲実経の子実盛を長野三郎とし、「承久の乱、大井戸の渡しで疵つく」とあり、子実基が石見国長野庄に住んだとある。**松田有忠**が安来庄地頭職に補任された二箇月後、石見国守護所にあててつぎの北条泰時、時房連署状が発せられた。

石見国美乃地・黒谷地頭職の事

菖蒲五郎真（実）盛が関東より預り給うところなり。ただし未知福原地頭職は御下文に載せられるといえども、先度他人にこれを給い畢（おわ）んぬ。その旨を存じせしむべきの状、件の如し。

貞応元年九月十八日　　（北条泰時）
武蔵守平（花押）
（北条時房）
相模守平（花押）
守護所

のち**実盛**は嫡子**実基**の承知をえて同国長野庄美能地内の所領を佐藤五実時に譲った。

宇治橋の合戦で京方の軍兵一人を手討ちにした**波多野盛高**は、父**高義**が「**大槻**」を名のったとあるので波多野庄内大槻郷を本領とした。河村義秀の三男河村秀基とともに**盛高**は「強弓・強力」をもって知られ、両人は義兄弟の間柄であった。その**盛高**は和泉国軽部郷の新地頭であった。同国に関東御家人が承久の乱の勲功により補任された新補地頭が多く、**盛高**もその一人である。

承久の乱

承久 3 年（1221 年）に、後鳥羽上皇が鎌倉幕府に対して討幕の兵を挙げて敗れた兵乱である。鎌倉を本拠に源頼朝を棟梁として東国武士を中心に樹立された鎌倉幕府では、東国を中心に諸国に守護・地頭を設置し、警察権を掌握していたが、西国は支配しきっておらず依然として朝廷の力は強く、幕府と朝廷の二頭政治の状態にあった。

承久元年（1219）7 月源実朝の後継者として九条道家の子三寅頼経が京都から迎えられ、**波多野朝定**らはその下向にあたり警固を勤めた。同 3 年 4 月**波多野朝定**は伊勢神宮へ「祠官の外孫」として北条政子の使者となって参詣した。

5 月 15 日後鳥羽上皇は北条義時追討の宣旨を下し、幕府の京都守護、伊賀光季を討った。光季の使者からその報らせを受けた北条政子は、集まった鎌倉御家人に呼びかけ、この檄（げき）によって、幕府は軍勢を上洛させることを決した。

22 日北条泰時はわずか 18 騎の武士を従えて先発した。ついで　三方面から上洛する軍勢が決定し, 十九万騎の幕府軍が上洛した。鎌倉で捕えた上皇の使者押松丸を京都へ帰すときに、義時は時房・泰時・朝時らに十九万騎の軍勢を添えて上洛させるが、「なお、これにても飽き奉らずんば、三郎重時、四郎政村らを先として、二十万騎を相具して、義時も参らんずるにて侯」との書状を持たせた。 京方ではこの幕府軍を迎撃することになったが、東山道の幕府軍が到着し大井戸を突破した。敗れた京勢は動揺し、一部は退却をはじめた。正面の泰時の率いる東海道の幕府勢は摩免戸の渡しに一斉に渡河を開始し、同時に時房の軍勢が洲俣の渡しを越えて京方の退路を断った。逃れた山田重忠・三浦胤義らが幕府軍の追撃を阻止しようとしたほかは、京都を目指して退却した。

松田家の歴史

波多野経朝は北条時氏・有時に従い、6 月 6 日の暁方に摩免戸の渡しを渡河し、ここを守る京方の山田重忠の軍勢と筵田で激戦となった。このとき**波多野義重**は「矢石（しせき）」が右の眼に当ったが、なお「答（とう）の矢」を射返した。『承久記』は杭瀬川（揖斐川）での山田重忠との戦いで、**波多野五郎**が「尻もなき矢にて、其も真甲の余を射させて引退」いたとある。（『承久記問答抄』には「やじりなき矢なり」とある）。

激戦は勢多・宇治での戦いで、13・14 両日の宇治橋の戦いでは多くの死傷者が出た。前夜来の雨で増水し、69 騎が水没し、八百余騎が奔流にのみ込まれる有様であった。13 日**松田小次郎・松田三郎・松田五郎・松田平三郎・松田右衛門太郎、沼田小太郎、沼田佐藤太、波多野経朝・波多野義重が、**翌 14 日**河村藤四郎、波多野朝定**が負傷した。

『承久記』は 13 日宇治河の合戦で、五番手として進んだ**波多野五郎**が、「相模国の住人、**波多野五郎信政**」と名のって、敵の矢が雨のごとくに射こまれるなかに橋桁を渡ろうとして、向う岸をよく見ようとふり仰いだところを右の眼に矢がささり、川に落ちそうになったが、橋桁に取りつき、心を落ちつかせ、さらに向う岸を見ようとするが見えない。戻るは敵に後ろを見せるので、くやしいと思い、「後（うし）ろ様（ざま）」に退き、橋板のうえに登って、取って返すところへ、郎等の則久がかけつけて肩にひっかけて引き返し、川端の芝のうえに寝かせ、二人が左右から寄って、膝をあてて**波多野信政**の眼にささった矢を引き抜いた。眼からおびただしい血が流れ、鐙は紅に染まったとある。同書はこの描写のなかで**波多野信政**が杭瀬川の戦いで「尻もなき矢にて額を射られ」とあるので、彼は先の合戦で額を射られたことがわかる。『承久軍物語』は矢尻（鏃〈やじり〉）のない矢で額を射られた**波多野信政**は「うすだか」（堆）に腫れあがっていたので、宇治橋の戦いでは向う岸の様子がよく見えず、立ち上って見ようとしたら敵の矢が右眼にあたったとある。『承久兵乱記』は、右眼を射抜かれた**波多野義重**が矢を立てながら大将北条泰時の前に来て軍忠を申し立てたとき、杭瀬川で負傷したうえでの行為を賞し、これは「鎌倉権五郎（景正）の再誕」とのべ、勲功については泰時自らが証人となるとまで保証したとある。『承久記』などは**波多野信政**とする。系図類は**波多野義重**ははじめ**宣俊**と名のったとある。

この戦いで両軍の勝敗は決し、入京した泰時に後鳥羽上皇は今度のことは一部の謀臣が行ったことだと院宣をもって伝えた。7 月後鳥羽上皇が隠岐へ、順徳上皇が佐渡へ配流され、8 月京方の公卿・殿上人・武士の所領三千箇所が没収され、それら所領へ東国の御家人が新補地頭として配置された。この月幕府は合戦の勝利について伊勢神宮へ社領を寄進した。その寄進状を送る使者を**波多野朝定**が勤めた。

承久の乱（1221 年）後は、**波多野忠綱**の子**義重**が軍功により越前（福井県）志比庄の地頭職を与えられ、後に曹洞宗の開祖道元を招いて永平寺を開創した。この越前へ移った波多野氏は代々、出雲守、評定衆を継承することとなり、北条氏の執権政治の要職にあり、次の時代へと勢力を保ち続けた。**松田有忠**は翌貞応元年（1222 年）七月八日承久の乱の勲功の賞として出雲国安来庄地頭職となった。

安貞元年（1227 年）三月、**義重**の弟**波多野経朝**は鎌倉前浜の民家で承久の乱での京方の残党を捕え、美作国で一箇村を与えられた。

松田家の歴史

石橋山の戦い　（1180 年）

8 月 20 日、頼朝は僅かな兵で伊豆を出て、土肥実平の所領の相模国土肥郷（神奈川県湯河原町）まで進出、これに対して、平家方の大庭景親が俣野景久、渋谷重国、海老名季員、熊谷直実ら 3000 余騎を率いて迎撃に向かった。

23 日、頼朝は 300 騎をもって石橋山に陣を構え、以仁王(もちひとおう)の令旨を御旗に高く掲げさせた。谷ひとつ隔てて大庭景親の軍も布陣。さらに伊豆国の豪族伊東祐親も 300 騎を率いて石橋山の後山まで進出して頼朝の背後を塞いだ。この日は大雨となった。そのため、増援の三浦軍は酒匂川の増水によって足止めされ、頼朝軍への合流が出来なかった。

前日に三浦一族は頼朝と合流すべく進発しており、途中の大庭景親の党類の館に火を放った。これを遠望した大庭景親は三浦勢が到着する前に雌雄を決すべしとし、夜戦を仕掛けることにした。闇夜の暴風雨の中を大庭軍は頼朝の陣に襲いかかる。大庭軍は勢いに乗って追撃し、頼朝に心を寄せる大庭軍の飯田家義の手引きによって頼朝らは辛くも土肥の椙山に逃げ込んだ。

翌 24 日、大庭軍は追撃の手を緩めず、逃げ回る頼朝軍の残党は山中で激しく抵抗した。ちりぢりになった頼朝軍の武士たちはおいおい頼朝の元に集まり、頼朝は臥木の上に立ってこれを悦んだ。土肥実平は、人数が多くてはとても逃れられない、ここは自分の領地であり、頼朝一人ならば命をかけて隠し通すので、皆はここで別れて雪辱の機会を期すよう進言し、皆これに従って涙を流して別れた。

大庭軍は山中をくまなく捜索した。大庭軍の梶原景時は、頼朝の居場所を知るが情をもってこれを隠し、この山に人跡なく、向こうの山が怪しいと大庭景親らを導き、頼朝の命を救った。このことが縁で後に景時は頼朝から重用されることになる。土肥の椙山の「しとどの窟」がこのエピソードにまつわる伝説の地として伝わっている。

石橋山の戦いの後　頼朝、実平一行は箱根権現社別当行実に匿われた後に箱根山から真鶴半島へ逃れ、船を仕立てて真鶴岬から出航。時政らも引き返して船を仕立て、海上で三浦一族と合流し、安房国を目指して落ち延びた。

9 月、安房の国に逃れた頼朝は再挙し、安西氏、千葉氏、上総氏などに迎えられて房総半島を進軍して武蔵国へ入った。東国武士が続々と参集して、短期間で数万騎の大軍に膨れ上がり、大庭景親ら平家方はもはや抗することが叶わなくなった。

10 月 6 日に頼朝は鎌倉に入り、10 月 20 日に富士川の戦いにて、京から派遣された平維盛の軍勢を撃破。これにより、頼朝は関東を制することになる。石橋山の戦いで頼朝を破った大庭景親と伊東祐親は平家方に合流しようとするが失敗し、大庭景親は降参するが許されずに斬られ、伊東祐親は捕えられ自害した。

『源平盛衰記』

源頼朝の誘いに対して**波多野義常**は返答を渋った。大庭景義（大庭景親の兄）は快諾した。山内首藤経俊「佐殿（頼朝）が平家を討とうなぞ、富士山と丈比べをし、鼠が猫をとるようなものだ」と嘲笑した。老齢の三浦義明は涙を流して喜んだ。

千葉常胤は承諾。上総広常も承諾。

松田家の歴史

応仁の乱

応仁元年（1467 年）～文明 9 年（1477 年）

応仁の乱は、室町時代の 8 代将軍・足利義政のときに家督相続争いが絡んで起こった内乱。元々は、守護大名・畠山氏内部の家督争いへの将軍家の調停失敗に端を発している。室町幕府管領の細川勝元と山名持豊（宗全）らの有力守護大名が争い、九州など一部の地方を除く全国に拡大し、戦国時代に突入するきっかけとなった。応仁元年（1467 年）に起きたことから応仁の乱と呼ばれるが、終息したのが文明 9 年（1477 年）のため応仁・文明の乱とも呼ばれる。

この戦は東西の決着が着かないまま 10 年間も続いた為、京の都は荒れ果ててしまった。**波多野秀長**は 1467 年応仁の乱で東軍細川勝元に属し、各地を転戦し、その戦功により丹波多紀郡を与えられた。

「雑学」☆☆☆

松田家の歴史

松田家は源氏？平氏？

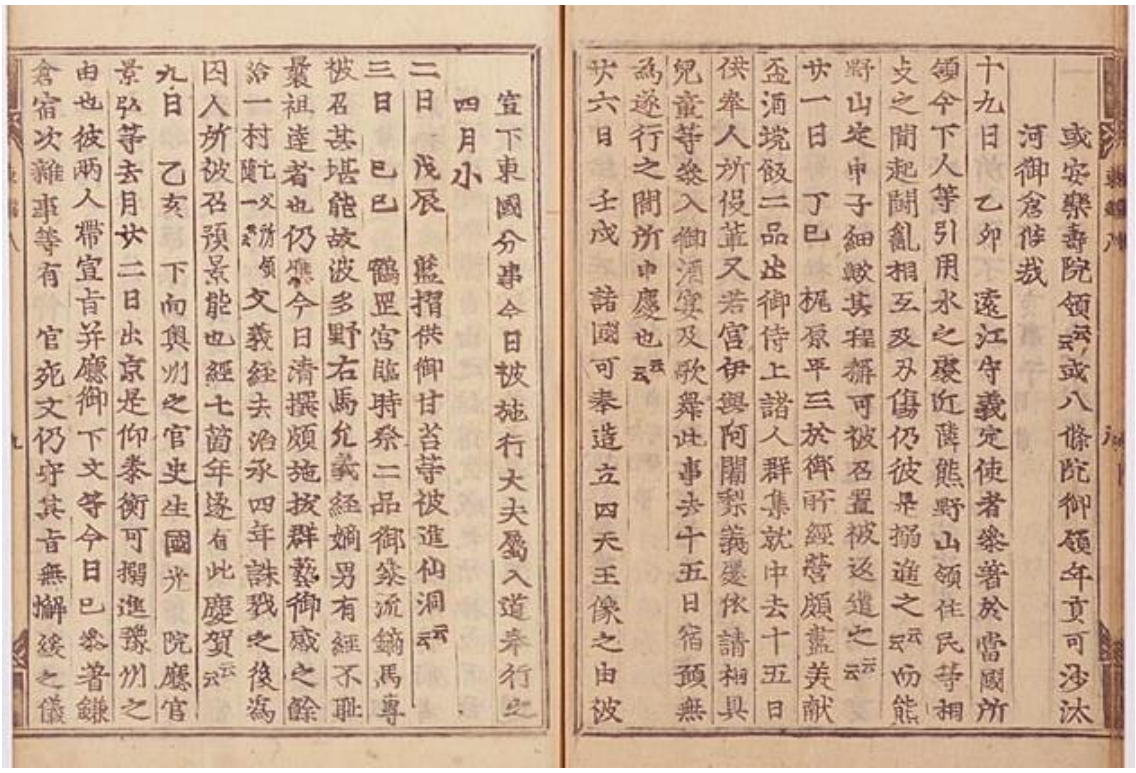
平安時代の末期松田家がまだ波多野を称していたころ波多野義通は京都にいて源氏の棟梁源義朝の重臣であったが、保元の乱(1156)の際に敵方となった主人の父為義と幼い5人の弟達、頼賢・頼仲・為宗・為成・為仲を討たなければならなかった事に無常を感じ、奉公を嫌い保元2年2月に相模に戻った。しかし2年後の平治の乱には養育していた甥の源朝長がこの乱に加わっていた為、義朝の許に加わった。

また、義朝が朝長よりも頼朝を重視した為に相模に戻ったとも云う。その後源氏は衰退してしまい平氏の天下になっていった。

大庭景親も最初は源氏方であったが、平治の乱(1160)で源義朝が敗死し、景親も戦いに敗れ斬られるところを平清盛が桓武平氏の名門がここで滅びるのを惜しみ助命したため処刑を免れた。大庭景親は、これに大恩を感じて平家の家人として仕えていた。
一方、景親の兄大庭景義は頼朝の挙兵に早くから参加しており、頼朝の重臣として仕えていた。義常は1180年石橋山の合戦では大庭景親と共に頼朝軍を破り、頼朝の鎌倉入りの際にも一族と共に松田城に籠もり抗戦した。

その後、義常は頼朝に追われ自害した。義常の嫡男松田有常(有経)はこの時、大庭景義の懐島の屋敷にいて難を免れた。源頼朝の腹違いの兄（源朝長）の母は長男松田有常の伯母でもあり、又、大庭景義は頼朝の父義朝の重臣で、鎌倉幕府の長老であった。有常(有経)は大庭景義の外甥でもあったので、景義は義常誅伐の事件の起る事を事前に察知していて、秘かに保護を加えたものである。松田有常(有経)は一時松田郷を没収され、身柄を大庭景義に預けられたが、有常は鶴岡八幡宮で催された流鏑馬で抜群の技量を示し、頼朝を感心させた。後に大庭景義は義常の子有常(有経)を伴って頼朝の元に参上して厚免を請願し許され、旧領の一部を戻されて、鎌倉御家人の列に加えられ、松田次郎を名乗って、ここに松田家が正式の発足を見たのである。
松田家はこのようにして将軍頼朝の御家人の列に加わり松田郷の地頭職にもなった。

文治四年(1188)四月小三日己巳「吾妻鑑」



宜下東國分事今日被施行大夫屬入道奉行之

四月小

二日　戊辰　鑑摺供御甘苔等被進仙洞云云

三日　己巳　鶴岡宮臨時祭二品御參流鏑馬專

被召甚堪能故波多野右馬允義經嫡男有經不恥

曩祖達者也仍爲今日清撰頗施拔群藝御感之餘

給一村亡父所領一云云　文義經去治承四年誅戮之後爲

囚人所被召預景能也經七箇年遂有此慶賀云云

九日　乙亥　下向與州之官史生國光　院廳官

景弘等去月廿二日出京是仰參衛可擬進豫州之

由也彼兩人帶宣旨并廳御下文等今日已參著鎌

倉宿次雜事等有　官死文仍守其旨無擬後之儀

或安樂壽院領云云或八條院御領年貢可沙汰

河御倉修裁

十九日　乙卯　遠江守義定使者參著於當國所

領令下人等引用水之慶近隣熊野山領住民等相

支之間起鬪亂相互及刃傷仍彼是搦進之云云而熊

野山定申子細歟其程擬可被召置被返進之云云

廿一日　丁巳　梶原平三於御所經營頗盡美献

盃酒饌飯二品出御侍上諸人群集就中去十五日

供奉人所役葦又若宮伊與向關梨義憲依請相具

兒童等參入御酒宴及歌舞此事去十五日宿預無

爲遂行之間所申慶也云云

廿六日　壬戌　諸國可奉造立四天王像之由被

松田家の歴史

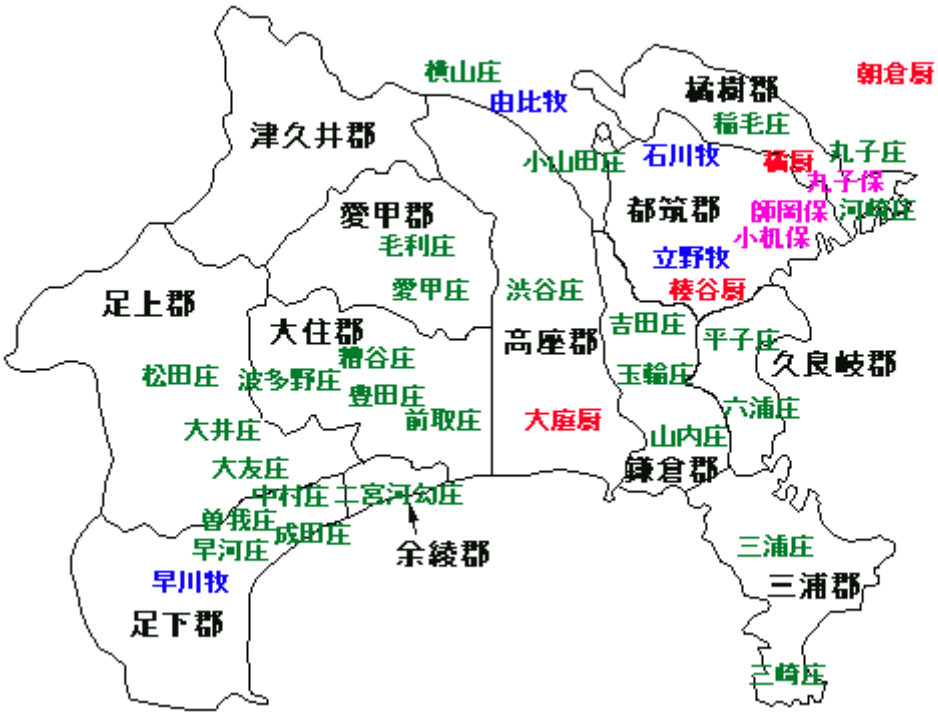
鎌倉幕府の滅亡と松田家

1333 年新田義貞は鎌倉幕府を討つ為に武蔵の国に入ったが、その途中分倍河原で鎌倉北条軍に敗れ、困窮していたが、相模の国の同志軍、松田・三浦・河村・土肥・土屋・本間等 6000 余騎の大勢で義貞の陣へ馳せ参じたので、俄かに勢いを得て、関戸の戦いなど連勝を続け、鎌倉に攻め入った。これにより鎌倉幕府は滅亡したのである。

南北朝において松田家は河村氏と共に南朝方の後醍醐天皇に味方をして活躍したが、終始新田氏に組して半世紀に亘る苦戦の歴史を続けた。楠木正成、新田義貞、北畠親房などが相次いで没後南朝方は一時全く勢いを失ったが、1351 年北朝方で足利尊氏、直義の兄弟が争って内紛を起したので、この機会に南朝方の勢力を回復しようとして、新田義貞の子義興、義宗、脇屋義治などの新田一党が関東の同志を糾合して、足利方と武蔵国小手指原、入間河原、高麗原などで壮烈なる戦いを行った。この時、松田、河村党は新田氏に属し、これらの地に奮戦して殊功をたてるが、新田方は大打撃を受けて鎌倉に退いた。義興、義治の新田軍は鎌倉を出て総勢約 6000 騎が松田城、河村城や西丹沢の諸城に移った。新田義興、義治二将の松田、河村入りは、足利方には重大問題となり、足利尊氏自ら大軍を率いて鎌倉を出て攻め込んで来たので、足柄の地はしばらく一大戦場と化すのである。松田・河村党の奮戦によって城の守りが堅く足利方は攻めあぐんでいた。しかし、足利方は、畠山国清の 5000 余騎を新たに加えて猛攻したので、新田義興、脇屋義治は城を落ちて越後に下り、新田義宗と共に越後半国を領地にして時運を待つことになる。この１年半の戦い、籠城戦によって河村氏は、一家の精魂尽きたものか、以後振るわなくなり、室町時代新興大森氏に屈してその属配となった。しかし、松田家はなお健在で、大森氏に対しても拮抗を続けていったが、徐々に衰退した。

このころの松田一族は各地に分散し、相模松田家は南朝方であったが、備前松田家は足利幕府の北朝方に属し、備前松田家は尊氏から足利氏の家紋「丸に二引き」の使用を許されるほどであった。

相模の荘園･御厨･牧･保の位置　　多賀歴史研究所 多賀譲治氏



松田家の歴史

松田家の先祖、松田家と一族共通の先祖

藤原鎌足、(614-669)　官位：大織冠内大臣、

父：神宮祭官 中臣御食子、妻：車持国子女

中大兄皇子と中臣鎌足(藤原鎌足)は、645 年乙巳の変を起こし、蘇我氏を滅ぼした後、日本を、天皇家を中心とした中央集権国家に作り変えた。

天智天皇は、中臣鎌足の死の直前、大織冠、内大臣の地位と「藤原」の姓を授けた。大織冠は、647 年に定められた冠位十三階（後に十九階、二十六階となる）の制度において、最高の冠位である。日本史上、臣下として大織冠の地位を賜ったのは、藤原鎌足ただ一人である。

藤原不比等、(659-720)　官位：正二位右大臣、贈正一位太政大臣

父：藤原鎌足（一書に天智天皇の皇子と記される）、母：与志古娘、妻：蘇我娼子

不比等の送った遣唐使が次々と中国の文化・情報を日本に持ち帰った。

702 年不比等はそれまで「倭」と呼ばれていた我が国の名称を日の登る本と云う意味の「日本」と初めて中国の則天武后に認めさせた。平城京は、唐の都である長安をモデルにしてつくられ、和銅 3 年(710)に遷都した。平城京は藤原氏の為の都と云っても過言では無い。政治の実権を握る藤原氏の政治手法は、不比等より始まった。

藤原房前、(681-737)　官位：正三位、参議、贈正一位、太政大臣。

参議中務卿兼中衛大将、正三位東海東山道節度使、贈左大臣正一位

父：藤原不比等、　母：蘇我娼子（蘇我連子の娘）、藤原 4 家の一つ北家の始祖。

藤原魚名、養老 5 年(721 年) ～ 延暦 2 年 7 月 25 日(783 年 8 月 27 日)享年 63 歳

官位：大宰帥正二位。父：藤原房前、母：片野朝臣の娘、妻：藤原宇合の娘、

藤原北家の祖、　藤原房前の五男。

天平二十年(748)に叙爵し、神護景雲二年(768)に参議、その後、光仁天皇の信任を得て順調に出世し、天応元年（781）には左大臣、延暦元年(782)、氷上川継の乱が勃発、事件に連座して左大臣を罷免され、大宰府に流され、延暦二年、入京を許されるが、帰郷することなく摂津国で薨じた。享年 63 歳。魚名の死後間もなく、桓武天皇は左大臣の官職を贈り、左大臣免官に関する詔勅や官符等を焼却させ、その名誉を回復させた。神護景雲(768 年）には参議に任ぜられている。またこの間、宮内卿・大蔵卿と京官や、備中守・上総守と地方官を歴任している。参議から一挙に大納言に昇進した。

正二位・781 年桓武天皇の時の左大臣。

藤原藤成、宝亀 7 年（776 年）－ 弘仁 13 年 5 月 4 日（822 年 5 月 27 日）47 歳

官位： 従四位下、伊勢守、父：藤原魚名、母：津守氏、妻：鳥取業俊の娘

下野介に任官すると坂東に下向した。藤成は、下野国の在地豪族、鳥取業俊の娘婿となって、藤原氏の坂東における基盤を構築した。藤成は、任期が終了して京に戻ると、その後、播磨介・播磨守に相次いで任官している。

811 年播磨介に任ぜられ、弘仁 4 年(813）移配させた夷俘に対する教化や、夷俘からの要請に対応するための専当官を兼ねる。のち、播磨守・伊勢守と嵯峨朝においては主に地方官を務めた。この間の、弘仁 6 年(815）正五位下、弘仁 8 年(817）従四位下と昇進した。藤成は、822 年、伊勢守の在任中に、三十七歳の若さで没した。

佐野城は(栃木県佐野市若松町)、別名「春日岡城」とも言われ、藤原藤成が延歴元年(782)この丘に館を設け、春日明神を祭ったことに由来すると伝えられている。その後、

松田家の歴史

安佐地方を領地とした藤原秀郷が、春日山と呼ばれたこの丘陵に寺院を創建し、天慶 8 年(945)に、春日岡山惣宗寺が完成したと伝えられている。

藤原豊沢、（776～822）官位：従 五 位 上 、 従四位上、下 野 守 、 備前守、

下野押領使。下野大掾家、父：藤原藤成、母：下野史生鳥取業俊女。

坂東で育った豊沢は、父と異なり、中央での栄達を望まずに、下野国の在庁官人として、下野少掾に任官している。藤原豊沢・村雄の父子は、下野国における押領使に任官して、国内の群盗蜂起の鎮圧で 功績を挙げた。押領使は、地方警察として国内の治安維持を任務とし、国司や郡司の中で 、武芸に長じた者が任命される。

押領使には、在地豪族が任官する。下野権守として下野国に留住した。留住と言うのは、土着とは違い、完全に都と縁が切れておらず、京都ともその後関係を続ける形である。

藤原村雄、（不詳）官位：従 五 位 下 、 下野守、下野押領使、下野大掾家、下 野 大 掾 。

河 内 守 。 父：藤原豊沢、母：鹿島氏の娘婿（下野史生・鳥取氏の娘とも）。

下野大掾の他従五位上河内守、**父と同様に中央での栄達を志向せず、下野国に土着した。**村雄は、在地豪族の鹿島氏の娘婿となっている。下野大掾としての官位を背景に、在地豪族を組織化すると、領民に、積極的に開墾・耕作を行わせて、広大な私営田を経営した。

豊沢・村雄の父子は、下野国における押領使に任官して、国内の群盗蜂起の鎮圧で功績を挙げた。押領使は、地方警察として国内の治安維持を任務とし、国司や郡司の中で、武芸に長じた者が任命される。常備軍を持たない朝廷は、在地豪族の私的な軍事力によって、群盗蜂起に対抗していた。

藤成・豊沢・村雄の三代の間に、豊沢流藤原氏は、坂東における地盤と軍事力を確立していった。

藤原秀郷、（不詳～991?）官位：従四位下、下野守、武蔵守、鎮守府将軍。

死後、贈位を受け贈正二位。父：藤原村雄、 母：下野掾鹿島女、妻：源通の娘

下野・武蔵二ヶ国の国司、戒名「香雲現郷」

889 年(寛平元年)、物部氏永によって寛平・延喜東国の乱が勃発すると、秀郷は、下野国押領使として、叛乱の鎮圧に勲功を挙げた。その後、下野国衙の在庁官人として活躍していたが、916 年(延喜十六年)、隣国の上野国衙への叛乱に連座して、一族と共に配流が決定した。しかし、配流が実行された気配はなく、秀郷の武勇を怖れた国衙は、配流を強いることが出来ずに、放置せざるを得なかった。

927（延長 5 年）朝廷より従五位下に叙され下野国押領使に補され、唐沢山城を築き居城とする。更に、929 年(延長七年)には、下野国衙は、濫行の罪によって、秀郷追討の官符が発布している。秀郷は、唐沢山城に入って、国衙軍の追討を迎えようとしたが、国衙が軍勢を動かした気配はない。寛平・延喜東国の乱で勲功を挙げた秀郷は、優れた武将として名高く、国衙も容易に手を出せなかった。

940 年平将門を討ち、後世において、武家の棟梁として、武家藤原氏の祖として、あらゆる武将の崇拝の対象となる。秀郷流藤原氏は、源氏・平氏と並ぶ武門の棟梁として多くの家系を輩出したが、仮冒も多い。波多野氏など、数多の氏族を輩出する。室町時代に「俵藤太絵巻」が完成し、近江三上山の百足(むかで)退治の伝説で有名。俵藤太(田原藤太)とも言われ、藤太は、藤原氏の長、太郎の意味である。

秀郷は、将門討伐の最大の勲功者として、下野守・武蔵守の受領を兼任し、鎮守府将軍に任官した。将門討伐の功績によって、無官の身から、一躍、従四位下を賜る。将門討伐の勲

功とは言え、破格の厚遇であった。一人の人物が二つの国の受領を兼ねることは、当時としては例がない。秀郷は、陸奥国には下向せずに武蔵国・下野国の受領として、坂東における自己の勢力の拡大に努めた。秀郷を祭る神社：唐沢山神社(旧別格官幣社)(栃木県 佐野市)、鵜森神社(三重県四日市市）、秀郷稲荷(東京都府中市高安寺(伝藤原秀郷居館）)佐野城本丸跡(春日岡城)唐沢山神社(栃木県佐野市）秀郷について「始領相州田原。号田原藤太」とあり、この田原の地は千常の子孫として相模国に土着した波多野氏の本拠となる波多野庄内に位置し、現在も西田原・東田原の地名を残している。

藤原千常、(不詳）官位：従五位下、従四位下、鎮守府将軍、美作守、左衛門尉。

父：藤原秀郷、母：源通の娘、妻：不詳、純友の乱鎮圧

藤原千常は、加茂別雷神社に菅公像 神体を奉斎し、社領を奉納して近郷 18 箇村の総鎮守となった。全讃史に「長尾金丸城は、昔、伊予掾藤原純友この城にかくれる。藤原千常これを討つ。純友の墓猶在り。とある。千常も北坂東で国衙に叛乱したのか、信濃国から朝廷に報告されている。千常が叛乱を起した翌年の安和二年(968)源満仲らの密告による安和の変にからんで、千晴・久頼父子は検挙・禁獄され、969 年に嫡流の千晴が失脚。その後の秀郷流藤原氏の宗主は弟の千常が継ぎ、武蔵介としてさらに勢力を拡大していった。天元二年(979)下野国から前武蔵介藤原千常が源肥らと合戦におよんだと解文が出されている。

藤原文脩、(不詳）　官位：従五位下、従五位上、鎮守府将軍、下野国押領使、陸奥守。

父：藤原千常、母：源通定の娘、妻：藤原利仁の娘？

藤原兼家（道長の父）に仕えた。下野国にて軍功。988 年鎮守府将軍に任官。文脩は、摂関家の藤原兼家（道長の父）に仕え、父祖伝来の下野国に勢力を拡大した。文脩は、秀郷と並び称される、武家藤原氏の祖、藤原利仁の娘を妻にしている。秀郷流藤原氏に代表される地方軍事貴族は、京の中央政界での地位を失い、地方の所領に居住して、完全に土着化した。

「小右記」988 年 10 月 3 日条「今日、直物、少叙目あり・・、鎮守府将軍藤文脩。「選か」、くだんの文脩は摂政の賀料、皇太后宮に任料を納めらるると云々」「伝説の将軍藤原秀郷」「選か」とあることで、文脩は中央に出仕してそれなりの評価を得、実績をあげていたことが判る。

千常の息子、文脩は、摂関家の藤原兼家（道長の父）に仕え、父祖伝来の下野国に勢力を拡大した。陸奥守・鎮守府将軍に任官し、極位は従五位上に昇る。

藤原文行、(不詳）　官位：従五位下、左衛門尉、鎮守府将軍、下河辺左衛門尉、

父：藤原文脩、母：藤原利仁女

一条天皇に仕え、藤原道長に郎党として仕えた。1006 年検非違使別当。

藤原斉信(967～1035)に従い京都法住寺に参陣するが、1006 年法住寺にて、同僚・平ノ正輔と争いを起し、検非違使の追討を受けて道長邸に逃走する。

藤原道長の日記「御堂関白記」には、文行は、道長の後ろ盾を得て、事件は沙汰止みになったことが記されている。

藤原公行、(不詳～1033)　官位：従五位下、相模守、上総介・佐渡守。

父：藤原文行、母：不詳

尊卑分脈には藤原文行の子に公行、公光、修行、行禅の四人が書かれているが、その内公光の実父は系図上では兄である公行の子と注記されている。

上総介公行の没年は1033年5月1日と公行と親しかった参議源経頼の日記「左経記」にある。父の藤原文行より先に没した為、孫の公光が家督相続の為に祖父藤原文行の養子となった可能性もある。実父藤原公行は上総介としての記録は後世の尊卑分脈しか無いが、「小右記」1027年2月27日の条に「前佐渡守」として登場している。「小右記」には、公行は、近江国からの帰途、矢に射抜かれて殺害されたことが記録されている。公行の息子の公光は、父の早世によって、祖父の文行の養子になった。

藤原公光、（不詳）官位：従五位下、左衛門権少尉、検非違使、相模守。

父：藤原文行(公行)、母：兵衛佐郷文女上東門院宣旨

公光の子孫が、現在の日本一の大姓を誇る、佐藤氏でもある。「佐藤」の由来は、諸説あるが、「佐」渡守、もしくは「左」衛門権少尉の藤原氏、又は、佐野の藤原で佐藤と言われている。

佐伯経範、（波多野経範）…(997?～1057）軍監、公俊、**官位：**従五位下、左衛門尉、

兵庫助、父：佐伯経資、母：佐伯氏、妻：相模守藤原公光娘。

佐伯氏の経範が京武者藤原公光の養子になったとも、あるいは公光の四男が母方の佐伯氏を継いだとも言われている。佐伯経範は、相模国波多野郷を所領として、波多野経範を称した。父の公光は相模国に所領を有していた。

源頼義の郎党の中で、筆頭に挙げられるのは、佐伯経範であろう。経範は、波多野経範とも呼ばれ、相模国波多野に所領を有し、後世、波多野氏の祖となる。

平忠常の乱が起きた頃、経範30歳頃に源氏との主従関係が結ばれた。

三十年以上に渡って頼義に仕えた腹心、頼義の陸奥守任官と共に、陸奥国に下向したが軍監として「前九年の役」(1051~1062）に参加し安倍貞任らの軍勢と「黄海の戦い」で、波多野経範は、頼義とはぐれ、官軍が敗北すると、頼義が戦死したと思い込んだ

経範は、自身も敵陣に切り込んで、壮絶な戦死を遂げている。経範は、この時、60歳。

坂東の武家に相応しい散り華を咲かせた。

その経範は｢陸奥話記｣に次の様に記述されている。

【源頼義の忠臣佐伯経範の死】

この時官軍の中に散位佐伯経範と云う者有り。相模の国の人なり。将軍厚くこれを遇す。軍敗るゝ時、圍みすでに解け、纔（わずか）に出でて、将軍の處を知らず。散卒に問うに、散卒答て曰く、「将軍は賊の圍む所となす。従兵数騎に過ぎず、これを推しても脱れ難からん」と。経範が曰く、「我将軍と事をするに、すでに三十年を経る。老僕の年すでに耳順に及ぶ。将軍の齢また懸車に逼（せま）る。今、覆滅の時に当り、何ぞ命を同じくせざらんや。地下に相従うは、これ吾が志なり」と。還りて賊の圍の中に入る。その随兵両三騎また曰く、「公すでに将軍と命を同じうし、節に死す。吾等、豈に独り生きるを得んや。陪臣と云うと雖も、節を慕うことこれ一つなり」と。共に賊の陣に入る。戦い甚だしく賊に捷（と）し、則ち十余人を殺す。しかるに殺死は林の如く、皆賊の前に歿す。

波多野経秀、（不詳）官位：従五位下、民部丞、父：波多野経範　母：不詳

1086年「後三年の役」で勲功 相模波多野荘を領有する。

波多野秀遠、1087~1137？（1060年 秀遠誕生?）官位：従五位下、刑部丞。

父：波多野経秀　母：藤原中清の女　妻：一宮紀伊の女(遠義の母)、和歌に堪能。

鳥羽院の蔵人所衆に仕える。『千載和歌集』鳥羽院蔵人、経範の孫。

松田家の歴史

波多野遠義、（1107~1167？　1113～1163?）
官位：従五位下、秦野・筑後権守。
筑後守、父：波多野秀遠、母：一宮紀伊の女
妻：鎮守府将軍藤原師綱の女（義通の母）、
妻：横山党の小野孝兼の女（河村秀高の母）、
伊勢初斎宮御契に蔵人所衆として従事する
「波多野本庄北方」は父遠義から保延 3 年（1137）正月に義通へ譲る。

波多野義通、遠義の子、嘉承 2 年（1107 年）～嘉応元年没（116 7 年）小二郎、二郎、
官位：従五位下父：波多野遠義　母：鎮守府将軍藤原師綱の娘
妻：中河辺清兼の娘、伊勢守光定の女（義職の母）、源義朝次男朝長の母は妹。
「波多野本庄北方」は父遠義から保延 3 年（1137）正月に義通へ、源義朝に仕え妹は義朝の側室となり朝長を生んだ。源義朝に従い「保元（1156）の乱」・「平治（1159）の乱」に活躍、後相模所領引き揚げ、1169 年弟義景に波多野本荘北譲る。相模国波多野荘領主。義景に波多野本庄北方を譲る。義朝の側室であった義通の妹（源朝長の母）は中原氏と再婚して中原久経をもうけ、久経はのちに文官として頼朝に仕えている。
義通の妻の一人が伊勢守光定の女（義職の母）だった関係でその子孫が伊勢神宮禰宜の荒木田・大中臣の両氏と結びついている。
1158 年、源義朝に従い保元の乱に参加する。
保元の乱の後で、勝者後白河天皇側で戦った義朝は敗者の崇徳上皇側で戦った父の為義と 5 人の弟、頼賢・頼仲・為宗・為成・為仲を勅命により舟岡山辺で斬首した。
「東国へ逃がす」と偽って為義を連れ出し斬ろうとした鎌田正清（義朝の郎党）に対して「騙すのは良くない」と抗議し、最期には事情を話して正清の郎党が為義を斬った。
主命と私情との板挟みになって苦しみ、保元 2 年 2 月に相模に帰って来た。2 年後の平治の乱には養育していた甥の源朝長がこの乱に加わっていた為、義朝の許に加わった。

波多野義常、（義経）、治承 4 年 10 月 17 日没(1180 年 11 月 6 日没)
父：**波多野義通、**母：中河辺清兼の娘、妻：大庭景義の妹、相模国波多野荘を本領。
義常は平治元年（1159 年）の平治の乱後、京に出仕して右馬允の官職を得て、相模国の有力者となる。
1180 年、波多野義常、家臣大中臣頼隆（永江頼隆）が背き源頼朝に参陣し、頼朝に討伐命令を受けた大中臣頼隆に追われ松田郷にて自刃する。子の有経は伯父大庭景義の保護で難を逃れる。（吾妻鑑）

波多野有常、有経、父：義常（義経）、母は大庭景義の妹。二郎、**松田家の祖**。（P.237 参照）
父、義常は治承 4 年（1180 年）の源頼朝挙兵に際して頼朝と敵対し、討手を差し向けられて自害した。有常は母方の伯父である大庭景義に身柄を預けられた。元暦二年（1185）四月源義経に従い、木曽義仲を京都で討ち、朝廷より五位の馬允の任命を受ける。
文治 4 年（1188 年）4 月 3 日、鶴岡八幡宮での流鏑馬に召されて優れた技量を見せ、頼朝から賞賛を受けて父の遺領中で随一の一村（松田郷）を与えられた。波多野氏の本領である波多野荘は義景が継承している。1205 年に北条義時に従い、畠山重忠を叔父の波多野忠綱と**松田有常**とで追討。（吾妻鑑）

松田家の歴史

相模松田家の先祖、

大槻高義、（1159～1209？　1192～1242？）大槻小次郎改名長通、
父：波多野義通、義常の弟、母：不詳
波多野庄内大槻郷を本領とし、大槻を名乗った。
高義の子孫が相模松田家へと続く。

大槻成高、左衛門尉、父：大槻高義

大槻盛家、改名成高、父：大槻成高

松田成家、相模松田家初代　松田備後守成家、左京進、父：大槻盛家

松田宗栄、松田家２代　左京進、宗栄成家子左京、父：松田成家

松田成栄、松田家３代　太郎備後守成栄、　父：松田宗栄

松田頼高、松田家４代　次郎備後守頼高、備後次郎、

松田直高、松田家５代　備後守直高、備後守、備前居住、

松田頼直、左衛門尉、
1305年北条時範の使いとして京より長門へ赴く。　（倉栖兼雄書状）
1305 年六波羅より使者として長門・鎮西へ向う。　（武家年代記裏書）

松田直頼、松田家６代、左衛門尉、

松田七郎行秀、1353 年、新田義興・義治らと河村城を落ちる時に戦死。　（梅風記）

松田新九郎、1353 年、新田義興・義治らと河村城を落ちる時に戦死。　（梅風記）

実山永秀禅師（じつざんえいしゅうぜんじ）？－1487　室町時代の僧。
最乗寺13世「最乗寺開祖および二十五哲の略伝」の中に相州、松田氏子、受業春屋禅師、豆州長谷山蔵春院・相州功運寺開山、嗣法二人、太寧了忍・竺庵仙、長享元年(1487)丁未(ひのとひつじ)九月九日示寂、と記されている。
（大雄町　最乗寺所蔵文書）

曹洞宗。相模最乗寺の春屋宗能(しょうおくそうのう)の法を継ぎ,総持寺に入る。永享11年(1439)上杉憲実(のりざね)が建てた伊豆の蔵春院の開山となり,ついで相模の報恩寺,最乗寺の住職となった。相模出身。俗姓は松田。大寧了忍(だいねいりょうにん)は11歳で伊豆田方郡(静岡県)蔵春院の実山永秀に師事し,その法を継ぐ。文明18年郡内の真珠院の開山に永秀を迎え,自らは2世となる。

大雄山最乗寺　南足柄市大雄町1157

松田家の歴史

相模松田郷の松田家

室町幕府の後半になると足柄二郡の地には、大森氏という新豪族が駿河の駿東郡から起こって相模に進出して遂に小田原城を占拠して西相の諸家を征服し、松田家にもしきりに攻略の手を加えてきた。最後までこれに屈服しなかったが、当時の相模松田家は西相松田郷の地帯に孤立していて、連年扇谷上杉家と大森氏との攻勢に苦しんでいた。

ところが、この時期、8代将軍足利義政は応仁の乱以降失墜した幕府の権威を回復する為に行動する様になり、その一環として関東管領の山内上杉顕定の応援として松田頼重・頼秀親子を関東に下向させたと思われる。松田左京進頼重は京都から下向し、相模松田家の家督を相続した。なぜ京都から相模に来てすぐに相模松田家を家督相続が出来たかと云うと、その頃扇谷上杉氏の家臣の大森氏が小田原城を占拠して西相模を征服し、松田家も攻略されていた。

河村氏を始めとして近くの家々は皆攻略されてしまって西相模では松田家しか残って無い状況であった。従って、相模松田家も青息吐息で孤立しており、苦しんでいる処に京都から頼重と息子の頼秀が乗り込んで来たので、相模松田家にとっても助け船となり、頼重が相模松田家の家督を相続する事になった。そして頼秀は足利義政から松田・河村を賜った。しかし、この頃は当時の足柄地方は小田原大森氏の全盛期であり、南関東第一の豪族であった大森氏と扇谷上杉氏の攻勢が強く、松田家にとって大変困難な時代で四面楚歌であった。当初、将軍義政の命で下向したのは矛盾が有り、将軍義尚の命の間違いでは無いかと考えた。それは義政の命で下向させた頼秀の所領を義政が没収するのは可笑しいと考えたからであった。東京大学史料編纂所教授**榎原雅治氏**に連絡をした処、以下のような返事を頂き納得した。「当時、義政は、鎌倉公方足利成氏(1455年以後は下総の古河に在住、古河公方)と対立しており、これに代わる新たな鎌倉公方として、1458年、庶兄の政知を関東に送り込みます。(実際には伊豆の堀越に滞在、堀越公方)政知にはその補佐役として京都から渋川義鏡が同行しますが、他にも奉公衆から抜擢された者が関東に下向したと推測されます。頼重の下向はこの時の事ではないでしょうか。

ところが、1462年ごろ、渋川義鏡は以前からの関東の有力者扇谷上杉氏と対立して失脚します。義政としては実力者の上杉氏を無視できず、義鏡を見限ったものと考えられます。頼秀の所領が鶴岡八幡に寄進されたのはこの年にあたるので、頼重・頼秀は義鏡と一緒に失脚したのではないでしょうか。義鏡のその後のことは不明ですが、義鏡の子は応仁の乱の主役の一人斯波義簾です。」との手紙を頂いた。

文明十二年(1480)(カ)十一月二十八日　太田道灌状

「松田左衛門尉の事は、河村に合宿せしめ候と雖も、残り留り忠信、誠に所感に勝(た)えず候。」

当時、相模松田家と備前松田家、室町幕府松田家(足利将軍や日野富子の近習の他奉公衆)との間には強い脈絡があって、備前、備中方面から松田一族が次々と相模に下って来た。

1494年9月16日に、頼秀は相模国津久井の青根村の曹洞宗、紅葉山(旧広養山)龍泉寺の住職に長文の書状を送っている。この寺は頼秀が開基となっており、御住職のお話では1471年建立とのことである。当寺には、頼秀の墓と位牌、それに頼秀使用の鞍と鐙が保存されている。

松田家の歴史

松田頼秀の西野々の墓

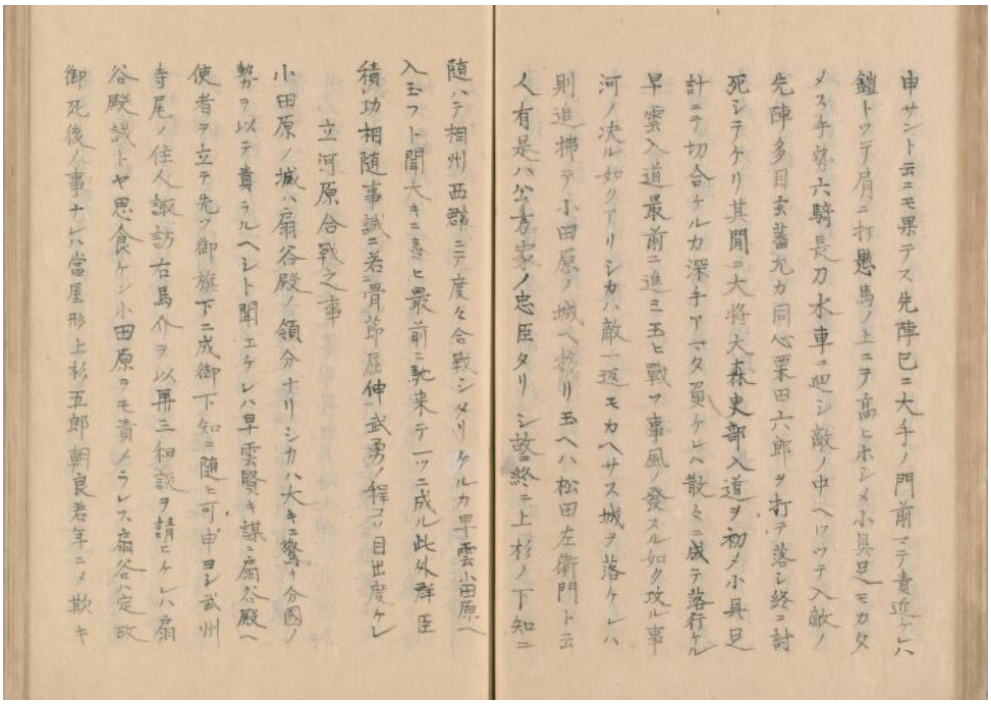
松田頼秀の鞍と鐙（龍泉寺秘蔵、約 530 年経過）

又、近くの西野々地区では毎年 9 月 17 日に 1950 年代迄「頼秀まつり」を行っていたとのことであった。「松田頼秀書状」は寺では「松田左衛門尉頼秀遺状」と称しているが、原文は寛文年中（1661～1672）の火災で失ったと言っていて、その写しを秘蔵している。また、この文は「佐野松田系図」の中にも収められている。かつて田中義成博士が東京大学での講義を刊行したものに、足柄地方に住んだ小田原城主大森氏頼と松田頼秀の学問を賞賛している。この文は、高見原合戦の始まる以前に、扇谷定正と大森氏とが、頼秀の出陣をさせぬように、討っての軍を松田城に向けて急襲したので、頼秀が退いて丹沢山中に退去したことを示すものであった。この文の内容は多年仏教の指導を受けた寺僧に向かって自分の後事を託した遺言状であって頼秀が討ち死にを覚悟するに至るまでの心情を切々と訴えている。文中に先ず関東動乱の次第を記して痛憤し、「いま正に戦役が始まろうとしているので、
多年の山内上杉殿への親忠をもって馳せ参じようと思うが、この山中に塞がれて進退極まった状況となっている。心は一騎当千の気持ちだが、事実は蟷螂の斧をもって龍車に向かうが如きもので、生命は風前の燈であるので、自殺を覚悟はしているが、扇谷殿の討手の軍が差し向けられた以上は、敵兵の貴賤を問わず討ち取って佳名を上げた上で、自らの屍を郊野にさらす心底であるから、後世の弔をお願い申し上げる」と、述べている。頼秀はその翌日 1494 年 9 月 17 日に龍泉寺のすぐ近くの西野々で敵に囲まれ自刃した。ところが、扇谷定正は対岸の敵陣に突入しようとして、誤って水中に落馬して死んでしまい、扇谷軍は敗走した。属将の英俊大森氏頼は老いて没し、定正の子朝良も人物でなく、扇谷家は傾いてしまった。このようなことで松田家は頼秀を失いはしたが、この危機を脱する事が出来た。

「雑学」☆☆☆

松田家の歴史

「小田原記」「小田原軍之事並并大森敗北之沙汰」



申サント云ニモ果テス先陣已ニ大手ノ門前マテ責近ケレ
鎧トツテ肩ニ打懸馬ノ上ニテ高ヒホシメ小具足モカタ
メス手負六騎長刀水車ニ廻シ敵ノ中ヘワツテ入敵ノ
先陣多日玄蕃允カ同心栗田六郎ヲ打テ落シ終ニ討
死シテケリ其間ニ大将大森史部入道ヲ初メ小具足
計ニテ切合ケルカ深手アマタ負ケレハ散々ニ成テ落行ケル
早雲入道最前ニ進ミ玉ヒ戰ヲ事風ノ發スル如ク攻ル事
河ノ決ル如クアリシカハ敵一返モカヘサス城ヲ落ケレハ
則追拂テ小田原ノ城ヘ移リ玉ヘハ松田左衛門ト云
人有是ハ公方家ノ忠臣タリシ故終ニ上杉ノ下知ニ
随ハテ相州西郡ニテ度々合戰シタリケルカ早雲小田原ヘ
入玉フト聞大キニ喜ヒ最前ニ馳来テ一ツニ成ル此外群臣
積功相随事誠ニ若骨節屈伸武勇ノ程コソ目出度ケレ

立河原合戰之事

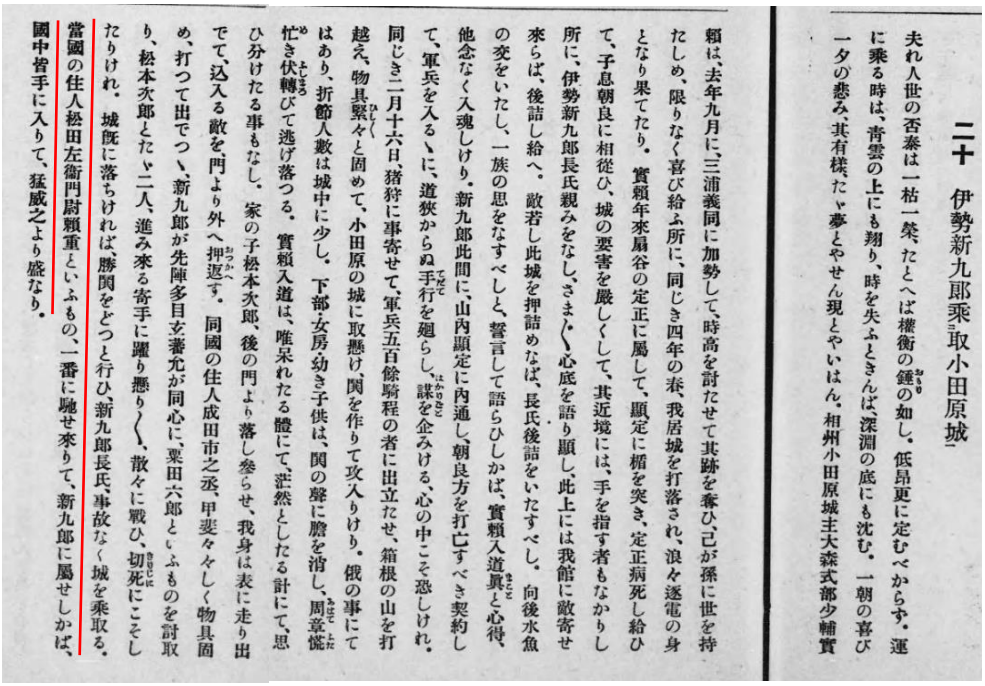
小田原ノ城ハ扇谷殿ノ領分ナリシカハ大キニ驚ク分国ノ
勢ヲ以テ責ラルヘシト聞エケレハ早雲賢キ謀ニ扇谷殿ヘ
使者ヲ立テ先ノ御旗下ニ成御下知ニ随ヒ可申ヨシ武州
寺尾ノ住人諏訪右馬介ヲ以再三和談ヲ請ヒケレハ扇
谷殿誠トヤ思食ケン小田原ヲモ責メラレス扇谷ハ定政
御死後ノ事ナレハ當屋形上杉五郎朝良若年ニメ歎キ

1495 年北条早雲公が大森藤頼を倒して小田原城に入城したとき、多年重圧を加えた大森氏の滅亡に歓喜した松田頼重は、直ちに早雲の陣営に馳せ参じて、これに属した。「小田原記」には「早雲小田原の城へ移り玉へば、松田左衛門尉と言う人あり、是は公方家の忠臣たりしゆえに、終に上杉の下知に随はで、相州西郡にて度々合戦したりけるが、早雲小田原へ入り玉うと聞き、大いに喜び、最前に馳せ来って一つになる。此外群臣功を積み、相随う事、誠に骨節屈伸のごとく、武勇の程こそ目出度けれ。」とあり、「北条五代記」「相兵亂記」「関侍伝記」「長倉追罰記」など多くの書物に記されてあるのは、北条早雲公の小田原攻略に松田家の協力が大きかったことを示すものである。この時に早雲公に属したのは頼秀と父の頼重（頼成）であった。「小田原記・相州兵亂記」には松田左衛門尉とあるが、北条早雲公の小田原城入城の前年頼秀は討ち死にしているので、「小田原記・相州兵亂記」の松田左衛門は父の頼重である。(頼重も左衛門尉)。早雲公の小田原城攻略の前に頼秀は、大森氏一族内の大物箱根権現の海実は以前より大森藤頼とはあまり仲が良くなかったのでこれを説得した。また頼秀は、最乗寺の協力者の力を借りつつ、大森氏家中その味方内、その他の足柄の有力者達に手を回して早雲公への協力を説き、更には早雲公の許へ事の次第と同心の意向を伝えた。当主大森藤頼との意見の食い違いに悩んでいた大森氏側の人々や、大森氏を嫌いながらもその実力を恐れてなかなか団結して立ち向かう事ができなかった足柄の有力者達も、人望も篤い頼重・頼秀親子からの周到な計画と力強い意志の表明に勇気付けられ、早雲公を頼って次々と味方に付いて行った。この様に松田家が北条早雲公に協力したことは、備前松田家文書によると、松田頼重が 29 歳の時に北条早雲公と共に武者修行に出ており、共に奉公衆でもあり、二人は京都の将軍足利義材の近くにおり、以前より知り合いで、早くから相談約束済みであったと思われる。

鎌倉公方九代記、 巻八成氏軍記、 二十、伊勢新九郎小田原城乗っ取る

「当国の住人松田左衛門尉頼重といふもの一番に馳せ来りて新九郎に属せしかば国中皆手に入りて猛威之より盛なり。」

松田家の歴史



二十　伊勢新九郎乘取小田原城

夫れ人世の否泰は一枯一榮、たとへば權衡の錘の如し。低昂更に定むべからず。運に乘る時は、青雲の上にも翔り、時を失ふときんば、深淵の底にも沈む。一朝の喜び一夕の悲み、其有様、たゞ夢とやせん現とやいはん。相州小田原城主大森式部少輔實頼は、去年九月に、三浦義同に加勢して、時高を討たせて其跡を奪ひ、己が孫に世を持たしめ、限りなく喜び給ふ所に、同じき四年の春、我居城を打落され、浪々逐電の身となり果てたり。實頼年來扇谷の定正に屬して、顯定に楯を突き、定正病死し給ひて、子息朝良に相從ひ、城の要害を嚴しくして、其近境には、手を指す者もなかりし所に、伊勢新九郎長氏親みをなし、さま〳〵心底を語り顯し、此上には我館に敵寄せ來らば、後詰し給へ。敵若し此城を押詰めなば、長氏後詰をいたすべし。向後水魚の交をいたし、一族の思をなすべしと、誓言して語らひしかば、實頼入道眞と心得、他念なく入魂しけり。新九郎此間に、山内顯定に内通し、朝良方を打亡すべき契約して、軍兵を入るゝに、道狹からぬ手行を廻らし、謀を企みける、心の中こそ恐しけれ。同じき二月十六日、猪狩に事寄せて、軍兵五百餘騎程の者に出立たせ、箱根の山を打越え、物具緊々と固めて、小田原の城に取懸け、関を作りて攻入りけり。俄の事にてはあり、折節人數は城中に少し。下部・女房・幼き子供は、関の聲に膽を消し、周章慌忙き伏轉びて逃げ落つる。實頼入道は、唯呆れたる體にて、茫然としたる計にて、思ひ分けたる事もなし。家の子松本次郎、後の門より落し參らせ、我身は表に走り出でて、込入る敵を、門より外へ押返す。同國の住人成田市之丞、甲斐々々しく物具固め、打つて出でつゝ、新九郎が先陣多目玄蕃允が同心に、粟田六郎といふものを討取り、松本次郎とたゞ二人、進み來る寄手に躍り懸り〳〵、散々に戰ひ、切死にこそしたりけれ。城既に落ちければ、勝関をどつと行ひ、新九郎長氏、事故なく城を乘取る。當國の住人松田左衛門尉頼重といふもの、一番に馳せ來りて、新九郎に屬せしかば、國中皆手に入りて、猛威之より盛なり。

松田頼重、(1427～1504)　**松田家７代、**頼成左京進改頼重、応永 34 年丁未 2 月 7 日生。
甲子(1504)10 月 28 日亡？、太郎左衛門頼重、室町幕府奉公衆。
旧名松田次郎左衛門元氏、安芸守、筑前守、孫三郎頼成左京左衛門筑前、
父：直頼の養子(実父は備前松田家元隆)　母：不詳
1427年、2月7日生、
1455年、武州の合戦で御所方の侍として戦う。　(永享後記)
1456年、29歳の時、**伊勢新九郎(北条早雲)に伴い武者修行に出る。**　(岡山県史)
1458 年、将軍義政は長禄 2(1458)年に、足利政知を正式な鎌倉公方として関東に送ると、頼秀父子も将軍の命で関東に下向した。
頼秀父子は、存亡の危機にあった相模松田家宗家を相続。
1467年、相国寺の戦いで御盃を賜る。
1490年、足利義材幕下に**松田頼重**見える。　(北条五代記)
1495年、**北条早雲、大森藤頼の小田原城を奪取し、相模へ進出する。**
松田左衛門頼重一番に馳せ参じる。　(北条五代記)
1504年、立河原(武州立川)の戦いに、**松田左衛門頼重**五十余騎を率いて戦う。
(北条五代記)

「応仁の乱」が始まった直後の応仁元年(1467)6 月、松田元隆に出兵の督促があり、**松田次郎左衛門元氏**が備前勢を従えて、1467 年 10 月三条殿を警護した。**次郎衛門元氏**は、以前より公方にも御目見えしているので、この度も御前(細川氏？)へ召され、合戦計画を命ぜられた。そこで次郎左衛門元氏は命をかけて防ぐことを申し受けたところ御盃を賜った。その日、相国寺の戦いで山名の精鋭部隊が出撃して来た。細川六郎も戦死したが、松田軍は猛反撃をした。松田次郎左衛門元氏 40 歳の時である。
「伊勢新九郎盛時」の名は文明 13 年(1481 年)から文書に現れる。北条早雲は文明 15 年(1483 年)に 9 代将軍足利義尚の申次衆に任命されており、長享元年(1487 年)奉公衆となる。松田頼重と北条早雲とは足利将軍の近くで同じ奉公衆であった。
北条早雲公が備前の雄：松田家の松田次郎左衛門元氏を重要視した理由は相模の豪族：松田家との関係を知っていたからであろう。武者修行遍歴の旅に出た時も相模国、伊豆などの調査もしていた可能性がある。

松田家の歴史

1495年北条早雲公が大森藤頼を倒して小田原城に入城したとき、多年重圧を加えた大森氏の滅亡に歓喜し、松田頼重始めとして備前松田家や幕臣松田家も直ちに早雲の陣営に馳せ参じて、これに属し相模松田家は北条家家臣団の御由緒家七家に列した。

「小田原記」には、「早雲入道小田原の城へ移り玉へば、松田左衛門尉と言う人あり、是は公方家の忠臣たりしゆえに、終に上杉の下知に随はで、相州西郡にて度々合戦したりけるが、早雲小田原へ入り玉うと聞き、大いに喜び、最前に馳せ来って一つになる。此外群臣功を積み、相随う事、誠に骨節屈伸のごとく、武勇の程こそ目出度けれ。」とあり、「北条五代記」「相州兵乱記」「関侍伝記」「長倉追罰記」など多くの書物に記されてあるのは、北条早雲公の小田原攻略に松田家の協力が大きかったことを示すものである。この時に早雲公に属したのは頼秀と父の頼重(頼成)であった。

「小田原記」には松田左衛門尉とあるが、北条早雲公の小田原城入城の前年頼秀は討ち死にしているので、「小田原記」の松田左衛門尉は父の頼重である。

備前松田家文書によると、松田頼重が29歳の時に北条早雲公と共に武者修行に出ており、以前より二人は知り合いで、早くから相談約束済みであったと思われる。

小田原城奪取から9年後の永正元年(1504) 山内上杉顕定と扇谷上杉朝良とが戦った時に北条早雲公は表向き扇谷上杉氏と和睦を結んでいたので、松田頼重が80騎を引き連れて扇谷上杉方に加わった(小田原北条記)。この戦いの記録は何も無いが、頼重の年齢は77歳になるので、実際に参陣したのは孫の盛秀と思われる。

『関侍伝』には松田左衛門について、公方家の忠心で上杉氏の下知のもとに相州西郡においてたびたび戦ったが、早雲の小田原入城とともにそれに従うとあり、その後に頼重・頼秀・数秀・長秀・頼亮・秀致・盛秀・晴秀と記されている。

但し、この『関侍伝』に記載されている「頼秀・数秀・長秀・頼亮・秀致・盛秀・晴秀」は備前松田家や相模松田家でも無く、丹波松田氏なので、この記述は誤りである。

この時代は同姓同名が足利幕府内に頼秀・盛秀・その他存在するので注意が必要である。

松田筑後、

1455年、鎌倉公方足利成氏、鎌倉撤退時に**松田筑後**討死。　(北条五代記)

松田頼秀、(1448頃?～1494) 松田家8代。左衛門尉頼秀、六郎左衛門尉、室町幕府奉公衆、父：頼重、母：不詳、妻：不詳、明応3年9月17日没、

1458年、将軍足利義政の命で父頼重と共に**頼秀**関東へ下向する。

1462年、足利政知、松田頼秀の跡地東大友半分を鶴岡八幡宮へ寄進する。
(鶴岡八幡宮文書)

享徳の乱を鎮める為に奉公衆から抜擢された者が足利氏一族でも家格が高い家柄の渋川義鏡と共に室町幕府から関東に派遣された。足利政知(堀越公方)の補佐役(執事)として京都より下向するも、関東の扇谷上杉氏と対立、失脚した。

頼重・頼秀も渋川義鏡と共に下向したが、義政は有力者の扇谷上杉氏を無視出来ず義鏡を見限った。その時に頼重・頼秀も義鏡と共に失脚し、足利政知によって頼秀の跡地東大友半分を鶴岡八幡宮へ寄進されてしまった。

1465年、足利義政、松田左衛門尉跡を足利政知の家臣木戸実範に兵糧料所として預け置いた。松田頼秀は伊豆国の堀越公方に敵対し所領を没収された。

1471年、龍泉寺(相模原市緑区青野原)を開基。開山は暁峯説演和尚。

1480年、太田道灌書状に松田左衛門尉(頼秀)が見える。　(太田道灌書状)

1494年、松田頼秀、扇谷上杉定正・大森藤頼と対立し、窮地に陥る。

1494年、龍泉寺に、松田頼秀書状あり。　(津久井龍泉寺所蔵)

当時の足柄地方は大森氏の全盛期で、松田家は存亡の危機の時であった。

松田家の歴史

小田原城に居城していた大森氏は扇谷上杉定正に属し、西相模に勢力を保持していた。松田頼秀は、扇谷上杉定正と対立する山内上杉顕定と結んでおり、四方に敵を受けて窮地に陥っていたが、大森氏家中や足柄地域の有力国人衆を味方に付け、父と同郷同僚であった北条早雲公への協力を説いて回った。明応 3(1494)年に、山内・扇谷上杉両家の抗争が再燃すると、扇谷上杉定正と大森氏頼は山内上杉氏方に参陣する頼秀を急襲。丹沢山中に退避したが、討死を覚悟し自ら開基した龍泉寺住職宛てに遺言状を書き残した。翌日 9 月 17 日、龍泉寺に近い西野々で敵に囲まれ自刃。龍泉寺には頼秀の墓と位牌、使用の鞍と鐙が保存されている。龍泉庵の横の林道を約 500m 行くと昔石切り場があり、その近くに湯治場があったという。頼秀はその湯治場に傷を治す為に通っているうちに龍泉庵の御坊に帰依し、1471 年龍泉寺を開基した。1950 年代まで西野々地区で毎年 9 月 17 日に「頼秀まつり」が行われていた。青野原には「頼秀松」と呼ばれた老松があったが、2004 年頃枯れた為に伐採された。その根元に「松田院頼岩義秀居士」と刻まれた自然石の墓がある。

山北町岸にある「松田新次郎頼秀の題目塔」

松田頼秀？・松田新次郎康隆？　山北町岸（武井禮恵氏畦畔）にある題目塔

2009 年 11 月 1 日山北町文化財保護委員会池谷嘉徳氏の案内で現地を訪問。

碑高　78 ㎝、碑幅　54 ㎝、碑厚　37 ㎝　年代　元治元年 12 月(1864 年)

銘文　人皇三十一代敏達天王　南無妙法蓮華経　松田新次郎頼秀

側面　元治元年(1864 年)子年十二月吉日

1864 年は蛤御門の変(長州藩士が京都御所を襲う)・下関事件(米・英等四カ国が下関を砲撃、占領)・長州征伐があった年である。この頃加賀の松田憲信 52 歳、松田憲成 21 歳である。参勤交代で文京区の湯島天神の近くに住んでいたので山北町まで行く事も可能であるが、もしこの二人が題目塔を建てるのであれば新次郎康隆では無く、頼重、頼秀又は、憲秀が自然である。この題目塔建立は憲秀の弟の子孫、徳川幕臣の松田家か？近隣の関係者？頼秀が新次郎を名乗った記録はないが、頼秀が新次郎だとすると、不可解である。

左から松田勝徳氏、松田賢二氏、池谷嘉徳氏、松田邦義（撮影松田一夫氏）

松田頼秀？新次郎康隆題目塔

松田家の歴史

松田康元、松田新九郎康元

1494年、大森久一丸、小田原城を出て、**松田新九郎康元**はこれを最乗寺に隠し、更に箱根山へ匿う。（室伏氏系図）

1495年、**松田新九郎**等大森久一丸を小田原に返す。（室伏氏系図）

松田尾張守・筑前守兄弟

1521年、浦上の乱に、**松田尾張守・筑前守兄弟**二人、相州の**松田左衛門尉**を訪ね下る。（異本小田原記）（北条五代記）

松田弥四郎

1526年、連歌師宗牧、宗長とともに東国下向の折、**松田弥四郎・松田弥次郎**の名が見える。（東国紀行）

松田弥次郎

1526年、連歌師宗牧、宗長とともに東国下向の折、**松田弥四郎・松田弥次郎**の名が見える。（東国紀行）

1538年、天文7年10月2日下総国国府台で里美義堯・足利義明と北条氏綱が第一次国府台合戦を戦い小弓御所足利義明は北条方の三浦城城代横井神助の弓に討たれ、落馬したところを松田弥次郎が首を取った。（快元僧都記）

1545年、連歌師宗杢牧が東国に旅立ち、この頃に駿豆国境に到着し、今川義元と北条氏康との抗争で交通が不通になるが、北条方の駿河国吉原城（富士市）城主の狩野介・**松田弥次郎**の差配で通行し、伊豆国三島大社に参詣し熱海温泉に向かう。

松田六郎左衛門尉、（康定?） 父：頼秀

1543年、**松田六郎左衛門尉**、六所神社へ書状。（相模松田家の初見資料）

相模国嵯峨郷（小田原市）宗我都比古神社を再建し、大工に平中明王太郎、小田原城の普請奉行に**松田六郎左衛門（康定?）**・中村小四郎が見える。（宗我神社由来記）

松田盛秀、（～1560）**相模松田家9代、**左馬助筑後守盛秀、尾張守、顕秀、左衛門顕秀、筆頭家老、父：頼秀、母：不詳、妻：北条為昌の娘、永禄3年没、

備前浦上の一乱により弟康定と共に相模に来て頼秀の養子となった。盛秀の盛は伊勢盛時（北条早雲）の偏諱。尾張守。盛秀の関戸文書の花押は後期の形で、伊勢宗瑞の花押の流れを受けた特徴が良く出ている。盛秀の室は北条為昌の娘（北条綱成の妹）である。北条家家老時代の文書「関戸文書（松田盛秀判物）」を多摩市教育委員会で所蔵している。「北条氏綱公が1524年扇谷上杉の江戸城を攻略する時松田顕秀が活躍した。」等の古文書がある。

1516年、三浦の残党が城ヶ島を拠点にゲリラ戦を展開していた。北条早雲公は松田左衛門（顕秀）を先陣として、荒木、山中、多目、荒川、在竹、大道寺を率いて三崎へ駆けつけた。

1524年、大永4年1月13日、北条氏綱公が扇谷上杉朝興の江戸城を攻撃する時、**松田**、大道寺、の軍勢が活躍し、**松田孫太郎**、佐藤、高橋、笠原、鈴木、朝倉左京らが遅れて参陣した。

1539年、武蔵国浅草浅草寺を再建し、再建工事に島津長徳軒・大道寺盛昌・**松田盛秀**が参加する。（江戸紀聞）

1544年、相模国江ノ島江島神社別当岩本坊に、遷宮式のため玉縄城北条綱成や小田原城の**松田盛秀**などの家臣多数が、奉加・寄進する。

相州江ノ島岩本院文書に、**松田（盛秀）殿御内儀**云々あり。（岩本院文書）

1549年、相模国岩瀬(鎌倉市)大長寺に、福島九郎正室の朝倉氏が寿像を納め、自分の子には北条綱成、同弟綱房、息女に**松田盛秀室**がおり、老年になり逆修として寿像を作成し、仏師は上総法眼宗琢とある。（鎌倉大乗寺所蔵）

1554年、**松田尾張守、**7000余騎で古河公方足利春氏を攻略。（北条五代記）

松田家の歴史

1554年、武田信玄の娘黄海院殿が北条氏政に嫁ぎ、甲斐国上野原で北条方に引取られ、遠山綱景・桑原盛正・**松田盛秀**が警護奉行を務め

1555年、**松田盛秀**、有山源右衛門尉に関戸宿の商人問屋役を命じて伝馬役以下の宿役を務めさせ、商人道者問屋の経営も任せる。（武州関戸文書）

1555年、北条氏康が伊豆国の舞々千代太夫に、陰陽者から直接の役銭徴収を厳しく規定し、陰陽者への役銭催促を停止させる。同日、相州の天十郎にも同様に命じる。奉行は**松田盛秀**など。（相州文書）

1555年、北条氏康が相模国狩野庄最乗寺に、紅燭を贈呈された謝礼を述べ、輪番僧侶の在寺の間は何事も護る事、**松田盛秀**を取次役と決める。（武州文書御府内）

1558年、足利義氏が小田原城の北条氏康邸に入り、その神殿での宴会に臨み、酒宴の第一献で荷用は北条氏尭、手長は**松田憲秀**、二献で荷用は伊勢貞就、手長は遠山隼人佐、三献で荷用は北条三郎、手長は笠原綱信、他に北条氏信・清水康英・伊勢貞辰・**松田盛秀**・石巻家貞等が列席する。（鶴岡八幡宮社参記）

「雑学」☆☆☆

松田家の歴史

二人の松田盛秀

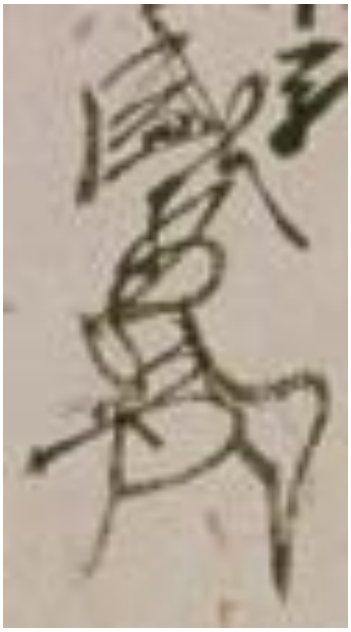
松田盛秀は室町幕府奉行人と北条氏家老としての文書が残されている。今迄同一人物とされて来たが、同一人物か否かを調査した。

室町幕府奉行人の松田盛秀の幕府官僚任期は 1528 年~1553 年であるのに対し、北条氏家老の松田盛秀は 1510 年には扇谷上杉と戦い、1516 年は北条氏の先陣として三崎で戦い、1524 年にも江戸城攻略の時に活躍した。1555 年には小田原で松田盛秀判物(関戸文書)を出している。

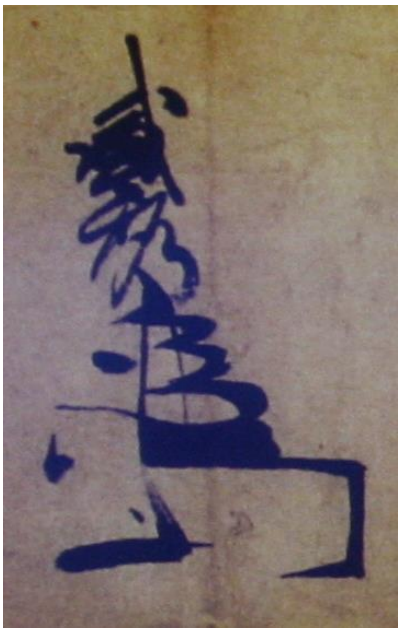
松田盛秀の花押を比較してみると、室町幕府奉行人の松田盛秀の花押は足利流の花押の特徴、北条氏家老の松田盛秀の花押は伊勢宗瑞の花押の流れを受けた特徴が出ており、全く別人と思われる。又、同じ時期に京都と小田原を行き来して、両方の仕事をする事は不可能と考えた。以上に依り、室町幕府奉行人松田盛秀と北条氏重臣松田盛秀は同時代の人物であるが、全く別人である。

室町幕府奉公人の松田盛秀と北条氏家臣の松田盛秀の文書と花押

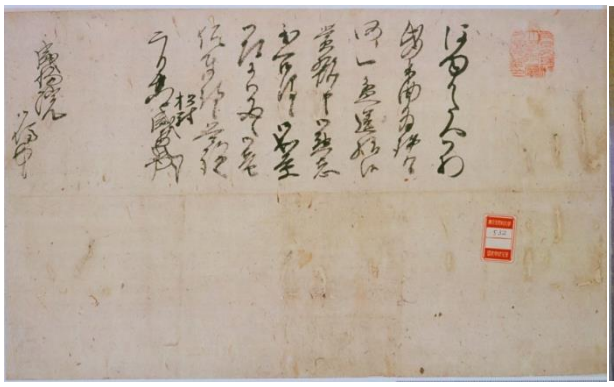
室町幕府**松田盛秀**花押



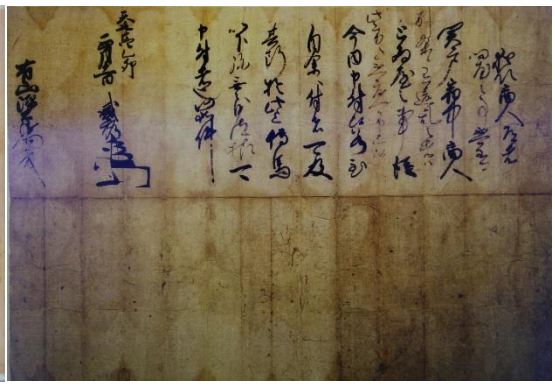
北条氏家臣**松田盛秀**花押



[年未詳]二月二十八日
松田盛秀書状　『北野神社文書』



天文二十四年(1555)一月二日
松田盛秀判物(北条氏家臣)



松田家の歴史

松田憲秀、（1530～1590）**相模松田家 10 代、**憲郷、尾張守、筆頭家老。

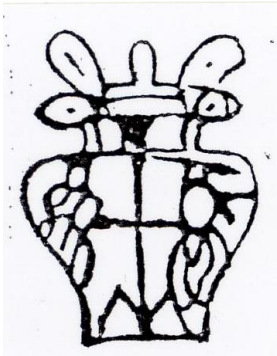
父：盛秀　母：北条為昌の娘、天正 18 年 6 月 16 日(7 月 17 日)没、

1555 年頃家督相続。小田原城下の医者田村安栖宅で切腹と伝えられている。

憲秀の母は北条為昌の娘で、北条綱成の妹である。松田憲秀は北条氏康公、氏政公、氏直公に仕えて内政面で辣腕を振るうと共に、1582年「神流川の合戦」に先陣、駿河攻め、国府台合戦等各地を転戦した。当時一国の大名ほどの格式を持ち、文書発給の際に印章を使用した。文書に判を押すのは東国の戦国大名の一特長でもあった。多摩市教育委員会では「関戸文書(松田憲秀判物)」(1585年)を所蔵している。豊臣秀吉の小田原攻めのとき憲秀は当初は徹底抗戦を主張したが、味方になると思われていた徳川家康、伊達政宗が敵方に付き、敵方22万、北条方は5万となり、抗戦は無謀と籠城を主張した。これに対して北条氏照、氏邦はあくまで徹底抗戦を主張し、論戦を戦わせた。憲秀は豊臣方の圧倒的な力を前にして北条家の存続の為に独自に前田利家、堀秀政と「北条家に相模、伊豆二カ国の安堵と全員の助命」を条件として交渉をしていたが、堀秀政の病死をきっかけに秀吉は城内の混乱を目論んだ「憲秀内応」という戦略的噂を流布した。これを信じた者が憲秀反逆説を唱えるが、これはまさしく秀吉の巧妙な城内離反策にのったものである。憲秀は氏康公からの重臣、筆頭家老でもあり、年齢も60歳、氏政公は52歳、氏直公は28歳、氏照は50歳であり、憲秀が長老として若い氏政公・氏直公・氏照を補佐しなければならないという、北条氏を存続させる為の忠義と誇りの方策であり、松田憲秀が抱えた苦衷は大きかった。その為に誤解も生むが、北条氏の安泰を念じていた憲秀は秀吉からの誘いには最後までのらず、城門を開ける事はなかった。

憲秀の無謀な戦いを避けた籠城論によって、小田原城下を火の海にすることも無く、何千、何万という死傷者を出す事も無く開城となったことは憲秀の最大の功績である。憲秀は 1590 年豊臣秀吉の命により憲秀の家臣岡部小右衛門忠正の介錯で切腹させられたが、岡部忠正は憲秀を高野山に葬った。その後、憲秀の子直秀（四郎左衛門憲貞・憲郷)は交渉をしていた前田利家公に 4000 石で召抱えられるのである。憲秀法名「極楽寺雲章喜公」・「鳳巣院竹庵宗悟居士」。

松田憲秀家印
縦 6.0cm×横 5.8cm



松田憲秀壷型印（憲秀私印)
縦 4.0cm×横 3.0cm

松田家の歴史

花押

頼秀(写)　盛秀　憲秀　直秀　六郎左衛門康郷

1558年、足利義氏が鎌倉由比浜を訪れ、十日に鶴岡八幡宮に参詣する。北条氏政以下の**松田憲秀**・笠原綱信・遠山隼人佐・石巻家貞・岩本貞次が式に参加。（鶴岡八幡宮社参記）

1558年、足利義氏が小田原城の北条氏康邸に入り、その神殿での宴会に臨み、酒宴の第一献で荷用は北条氏尭、手長は**松田憲秀**、二献で荷用は伊勢貞就、手長は遠山隼人佐、三献で荷用は北条三郎、手長は笠原綱信、他に北条氏信・清水康英・伊勢貞辰・**松田盛秀**・石巻家貞等が列席する。（鶴岡八幡宮社参記）

1564年、北条氏康の娘**桂林院殿**（後の武田勝頼の室/**松田憲秀**の孫）が誕生する。

1567年、北条氏政が上総国真理谷（木更津市）妙泉寺に、同国久留里陣との往復の使僧を務めた忠節を褒める。奉者は**松田憲秀**。（上総国古文書）

1569年、武田信玄、北条綱成・**松田憲秀**らの守る駿東郡深沢城へ攻め寄せる。

1569年、武田信玄、小田原城へ攻め寄せる。**松田憲秀邸**武田信玄に焼かれる。

1569 年、**松田憲秀**、山口郷左衛門尉を私領横手村の代官職に任じ、村人を不入とした事を心得て百姓の退転が無い様に申しつけ、人馬の御用には憲秀の印判状で申し付けると伝える。（大江氏文書）

1570 年、北条氏政が小田原城に来た上杉の使者との交渉の中に、**松田憲秀**の名が見える。

1571 年、北条綱成・**松田憲秀**らの籠城する深沢城が武田信玄に明け渡される。

1571 年、北条氏政が清水新七郎に、駿河国葛山郷(裾野市)除沢は武田領では無いが、新規築城の同国平山城（裾野市千福）の城下に入り、武田領に近い為に田畠の手作が不可能で、**松田憲秀**も託言を申している。（高崎市清水文書）

1574 年、**松田憲秀**が下総衆の原胤栄に、上総国大坪城（市原市）を里見方の正木時忠が再興したと聞いたが、同城は北条方であるが武田勝頼の指示でこの様になったのは致し方ないと諦め、上杉謙信が上野国厩橋城(前橋市)近くに越山し、北条勢は急いで出馬した。（西山本門寺文書）

1574 年、北条氏政が遠山政景に、武蔵国に上杉謙信・佐竹義重が出馬した為、政景に出陣して急ぎ着陣すべしと命じ、詳しくは**松田憲秀**から副状させる。（早雲寺文書）

1575年、**松田憲秀**が相模国塚原（南足柄市）犬峠の長泉院に、同院周辺の木草刈取りの通行路を本道のみと定め、寺山での松木伐採禁止の制札を下す。（相州文書）

松田家の歴史

1575 年、北条氏政が桑原嘉高に、里見義弘に攻められている上総国一宮城正木種茂への救援に、兵糧米三俵を二十六日に**松田憲秀**の代官に渡し種茂へ届けさせる。（相州文書）

1576 年、北条氏政が酒井康治に、康治からの計策状に満足し、忠節を認めて秘蔵の脇差を贈呈し、詳しくは**松田憲秀**から副状させる。（記録御用所本古文書）

1576 年、**松田憲秀**が有山源衛門に、従来通りに武蔵国関戸関（多摩市）の関銭徴収を安堵する。（武州文書）

1578 年、北条氏政が武蔵国金沢（横浜市金沢区）伊東新左衛門に、四板船四隻で里見方への使者等を今回だけ上総国富津・中島（富津市）の間に送り届けさせる。奉者は**松田憲秀。**（鈴木文書）

1579 年、**松田憲秀**が山口郷左衛門重明に、知行として武蔵国白子村(飯能市)内で大石隼人所務分 20 貫文を宛行い、松田家朱印状は後日に出すと伝える。（大江文書）

1579 年、**松田憲秀**が相模国塚原（南足柄市）長泉院へ板屋ケ窪で寺領 1 貫 500 文を永禄九年(1566)に寄進してあり、新規の林は寺家に預けて木の伐採は禁止したが、他所の者で伐採する者がいると聞き、伐採の時は松田家朱印状を出すと伝える。**憲秀**朱印状の初見。（長泉院文書）

1579 年、北条氏政が**松田憲秀**に、武蔵国岩槻城（さいたま市岩槻区）普請について、特に土塁の工事は間数を人頭割りの分割で施工するため、境目の崩壊に注意させる。（清水市海長寺文書）

1580 年、里見義頼、武田氏に対する北条氏への援兵派遣の意向を**松田憲秀**に伝える。北条氏政,家督を子氏直に譲る。

1580 年、里見義頼が**松田憲秀**に、先月晦日に下総国小多喜城（大多喜町）正木憲時が謀判を起こし、直ちに興津城（勝浦市）に攻撃を仕掛けた。北条氏と武田勝頼との事が不安で、もし軍勢が必要ならば加勢すると伝える。すでに義頼は武田勝頼を見限り北条氏政を支援。（妙本寺文書、稲子文書）

1580 年、 里見義頼が某（**松田憲秀?**）に、正木憲時の謀判を報せ、五日に出馬して数ヶ所も憲時方の城を乗っ取り平定したと伝え、武田豊信・土岐義成も様々に懇望していると述べる。（豊川市竹本文書）

1581 年、**松田憲秀**が常陸衆**の**土岐治綱に、年頭の祝儀に便面(扇)・菱喰・鰊を贈呈され謝礼し、返礼に弓と扇・王明を贈呈し、今後も懇意を依頼する。（秋田藩家蔵文書）

1581 年、北条氏直が相模国浜居場城（南足柄市）番衆中・**松田憲秀代**の須藤源二郎・村野安芸守・小沢孫七郎に五ヶ条の城内掟を出し、

一、城の西方への出入りを禁止し草木伐採は東方で行い、**松田憲秀**の代官に管理させる事。

一、人馬の汚物は城外の遠くに捨てる事。

一、当番衆が城外に出る事は一切禁止の事。

一、昼夜共に櫓に人を配置し武田方へ逃亡する者を警戒する事。

一、夜間の警備を厳重にする事と申し渡す。（相州文庫足柄上郡）

1581 年、**松田憲秀**が常陸衆の土岐治綱に、夏季在陣の苦労に感謝し、23 日に弟の土岐胤倫が着陣した事に北条氏直が嘉悦したと伝える。（秋田藩家蔵文書）

松田家の歴史

1581 年、**松田憲秀**が下総衆の相馬治胤に、書状により佐竹筋の事を知った謝礼を述べ、武田勢が伊豆表に侵攻したため出馬するが、詳しくは陣中より報告すると伝える。（秋田藩家蔵文書）

1582 年、**松田憲秀**が相馬胤永に、三陽の祝儀に雁と鯉を贈呈され謝礼を述べ、答礼に練絹と下緒を贈呈する。（広瀬文庫）

1582 年、**松田憲秀**、諏訪氏の重臣千野左兵衛尉(昌房)に書状を送り、信濃統治について協力を求める。（市原市千野文書）

1582 年、**松田憲秀**が里見氏家臣上野筑後守（貞国）に、甲斐御坂城（河口湖町）での苦労を察して慰労し、徳川家康との和睦が締結されたので今日は武蔵国に馬を収め、三日の内に帰宅出来ると知らせる。（高橋文書）

1583 年、**松田憲秀**、この頃**直秀**に家督相続。

1583 年、天文 7 年 10 月 7 日「第一次国府台の合戦」の時**松田**、志水、笠原が活躍した。

1583 年、 北条氏直が原胤栄に書状を出し、**松田憲秀**が取り次ぐ。当文書は断簡。（尾張文書通覧）

1583 年、北条氏直が分国役所中に、下総国臼井(佐倉市)から紀伊國高野山の僧侶 22 人、荷物二駄、馬一疋が分国中の関所を通行するのを許可する。奉者は**松田憲秀**。（西門院文書）

1583 年、北条氏直が酒井康治に、下総国万喜城（いすみ市）への兵糧を速やかに調え搬入させ、委細は**松田憲秀**から副状させる。（静嘉堂本集古文書）

1584 年、某が某に、徳川家配下の三河・遠江両国の軍勢が駿河国に侵攻したが程無く退去し、これについて北条氏も駿河国への出馬準備をし、**松田憲秀**の書状に答えて三河・遠江の羽柴秀吉との抗争への対応と記すと伝える。（秋田藩採集文書）

1584 年、**松田憲秀**、霊山寺に竹木伐採禁止の朱印状を下す。

1584 年、北条氏直が橋本外記に、山角定勝・**松田憲秀代**の預かる過銭から十二貫文を与え、軍役を務めさせる。奉者は宗悦。（六所文書）

1585 年、**松田憲秀**が関戸の有山源右衛門に対して武蔵国関戸郷(多摩市)中河原の正戒塚に源右衛門が新宿を立て、近辺の荒地の開拓をさせるため 7 年間は無税とする。奉者は岡谷将監。（杉田氏所蔵有山文書）

1585 年、北条氏直が相模国箱根山中の宮城野温泉管理の**松田憲秀代**に、氏直の留守中は入湯を禁止しているが、石井某が京都への御用を命じられたため彼ら 5 人の保養として 4 日から 8 日まで湯治を許可させる。奉者は幸田某。（奥脇文書）

1585 年、里見義康が**松田憲秀**に、自身の元服の祝儀として**松田康長**から返書を受けて謝礼し、殊に**憲秀**から太刀・銭三貫文・刀・三種・三荷の贈呈に感謝し、詳しくは井上憲安から口上で伝えさせる。（手力雄神社文書）

1585 年、北条氏直が下総国宮野木（千葉市稲毛区）市野々（長南町）に掟書を下し、北条勢の竹木伐採・狼藉を禁止させる。奉者は**松田憲秀**・遠山直景。（塩山市網野文書）

※ 奉者：上位者の命をうけ、印判状発行の担当者の事。

松田家の歴史

1586 年、**松田憲秀**が武蔵国関戸有山源右衛門等 6 人の百姓に、郷内給人の配分を書き立て、森岡氏が非分を起こし、百姓が欠落したが成敗したので 6 人の百姓に関戸の郷中の管理を任せる。奉者は御宿綱秀・長尾内膳正・岡谷将監。（武州文書）

1587 年、**松田憲秀**、山口若狭守重明へ知行として武蔵国関戸内勝河村（多摩市）の内より 25 貫文を宛行い、前々からの同国横手（日高市）の知行は山口弥太郎に譲って小田原城に詰めさせ、軍役等を着到の如く務めさせる。奉者は発仙。（大江氏所蔵山口文書）

1587 年、土岐頼基が下総衆の神崎氏に、豊臣秀吉と北条氏が対立し北条氏直から参陣を依頼され、**松田憲秀**からも要請された事等を伝える。（神崎文書）

1587 年、北条氏直が小田原から下総国布川（利根町）迄の宿中に、**松田憲秀**の使者に傳馬一疋の使役を許可し、無賃傳馬とする。奉者は幸田定治。（桜井家文書）

1588 年、北条氏直が下総国相馬郷下山（取手市）に禁制を掲げ、北条勢と甲乙人の乱暴狼藉を禁止させる。奉者は**松田憲秀**。（板橋文書）

1588 年、**松田憲秀**、関戸の有山源右衛門従前通り関銭徴収の権利を認める。

1588 年、北条氏政が豊島貞継に、蠟燭・鷹の贈呈に謝礼し、**松田憲秀**から副状を出させる。（里見氏所蔵手鑑）

1588 年、**松田憲秀・同直秀**が肥田越中守に、鎌倉山内（鎌倉市）の蔭山屋敷について北条氏直の証文と憲秀判物を副えて売却した事を確認する。（雲長庵文書）

1588 年、**松田憲秀**が原邦長・同邦房に、下総国窪田城（袖ヶ浦市）の当番普請役は 2500 人と決めたのに、1000 人で許して欲しいとの依頼であるが、北条氏直が許可せず 2500 人での普請を命じる。（松田氏所蔵原文書）

1589 年、**松田憲秀**、家督を子の**直秀**に譲り、**松田直秀**が相模国加山（小田原市）小沢二郎左衛門尉に、父**憲秀**が当村を隠居分として宛行われ、今後の諸公事や御用は父から引き継いだ**直秀**朱印状で申し付けると伝える。（小沢文書）

1589 年、**松田憲秀・松田直秀**が土岐義成に覚書を送り、北条氏政を京都に上洛させるため上洛の軍勢と費用を分国中の者に賦課すると申し渡す。（安得虎子）

1589 年、**松田憲秀が**山口重明ら 3 名に、知行の武蔵国横手村（日高市）二十貫文の給田配分を定め、山口重久と同重勝には 7 貫 500 文ずつ、同重保は 5 貫文とする。（大江氏所蔵山口文書）

1589 年、**松田憲秀**が山口重明に、知行として武蔵国関戸（多摩市）乞田村で夫銭共に 25 貫文を宛行い軍役を務めさせる。奉者は発仙。（大江氏所蔵山口文書）

1590 年、北条氏直が上田掃部助に、武蔵国戸森之郷(埼・川島町)百姓の深谷兵庫が年貢未納で欠落し、同国一本木の宿（川島町?）に居るとの申告で帰村させる。奉者は**松田憲秀**。（名古屋市大口文書）

松田家の歴史

1590 年、豊臣秀吉が北条氏直に、滝川雄利・黒田長政から、降伏して氏直は切腹するが家臣等の命は助けて欲しいとの懇願を聞いて氏直を助命するとし、北条氏政・北条氏照・大道寺政繁・**松田憲秀**は切腹させると通告する。（小早川家文書）

1590 年、7 月 11 日、**松田憲秀**が切腹する。法名は**竹庵道悟禅定門**。（相州日牌帳）

1555 年頃家督相続、憲秀の母は北条為昌の娘で、北条綱成の妹である。松田憲秀は筆頭家老として北条氏康公、氏政公、氏直公に仕えて内政面で辣腕を振るうと共に、1582 年「神流川の合戦」に先陣、駿河攻め、国府台合戦等各地を転戦した。

当時一国の大名ほどの格式を持ち、文書発給の際に印章を使用した。文書に判を押すのは東国の戦国大名の一特長でもあった。

多摩市教育委員会では「関戸文書(松田憲秀判物)」(1585 年)を所蔵している。

豊臣秀吉の小田原攻めのとき憲秀は当初は徹底抗戦を主張したが、味方になると思われていた徳川家康、伊達政宗が敵方に付き、敵方 22 万、北条方は 5 万となり、抗戦は無謀と籠城を主張した。これに対して北条氏照、氏邦はあくまで徹底抗戦を主張し、論戦を戦わせた。憲秀は豊臣方の圧倒的な力を前にして北条家の存続の為に独自に前田利家、堀秀政と「北条家に相模、伊豆二カ国の安堵と全員の助命」を条件として交渉をしていたが、堀秀政の病死をきっかけに秀吉は城内の混乱を目論んだ「憲秀内応」という戦略的噂を流布した。これを信じた者が憲秀反逆説を唱えるが、これはまさしく秀吉の巧妙な城内離反策にのったものである。憲秀の無謀な戦いを避けた籠城論によって、小田原城下を火の海にすることも無く、何千、何万という死傷者を出す事も無く開城となったことは憲秀の最大の功績である。

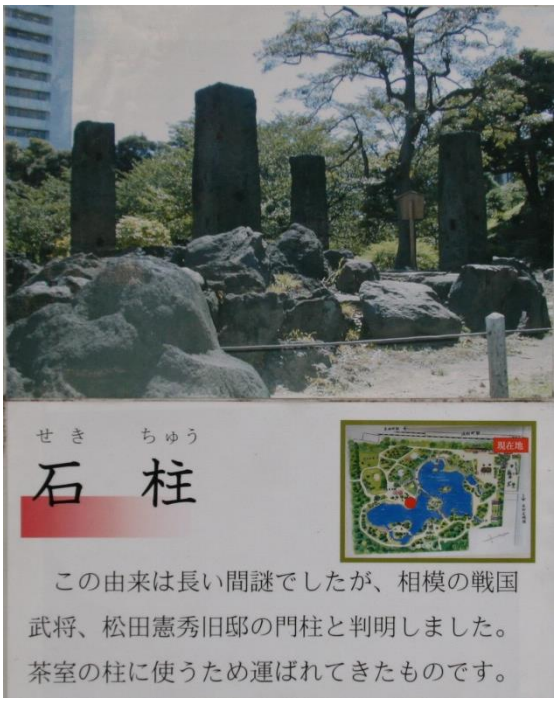
憲秀は 1590 年豊臣秀吉の命により憲秀の家臣岡部小右衛門忠正の介錯で切腹させられたが、岡部忠正は憲秀を高野山に葬った。

「雑学」☆☆☆

松田家の歴史

「松田憲秀邸の門柱」

　東京浜松町駅前、旧芝離宮恩賜庭園（東京都港区海岸 1-4-1）
恩賜庭園の中央の池のほとりに、正方形を形づくるように立っている。
高さ約 2 メートル、幅・奥行き約 50 センチ、石柱の間隔は約 4 メートル。
江戸時代に入り小田原城主の大久保忠朝が五代将軍徳川綱吉の大久保家「お成り」を機に茶室の柱に使用する為に松田憲秀邸(約 6200 坪)の門柱を小田原市南町のお花畑の松田屋敷から運んだもので、将軍接待の目玉になったものである。
　この石柱は箱根火山の基底部を作る凝灰石で出来ている。



松田秀也、　松田弾三郎秀也、直秀の弟、父：憲秀、母：不詳
　小田原開城後は兄直秀と共に氏直公のお供をし、紀伊国高野山に同行した。初め加賀前田氏に仕えたが、医師となり、金沢で開業。子孫はその後氷見を経て高岡に転居し、町医となり、代々名医として江戸時代を過ごした。安永 8 年(1779)加賀藩主前田政斎の嗣子：数千代の眼疾を治療して松田眼科の声価を高めた。子孫は現在も高岡市に居住し、活躍している。家紋は丸に二引きを使用している。

松田家の歴史

松田一族で活躍した人々

松田康郷、(1540～1609)（康江）、孫太郎、父：康定、母：不詳

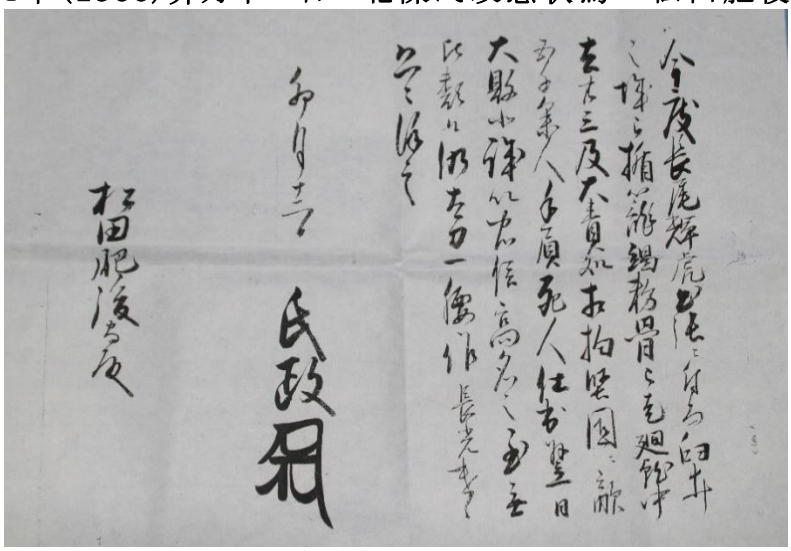
1564 年上杉謙信が北条方の下総国臼井城を攻めたとき、同国大和田城を守っていた松田康郷が手兵を率いて臼井城に馳せ付けて奮戦の末、上杉方を撃退したが、この時の振る舞いを上杉謙信が望見して、「岩舟山に赤鬼の住むと沙汰しけるは、一定彼がことなるべし。」と感嘆したというので有名になり、その後人呼んで赤鬼、または赤鬼孫太郎と仇名したという。孫太郎はこの日の戦に朱色の甲冑を着けていたので、赤鬼と言われるようになったのである。その時に北条氏政公より頂いた感状である。

1540年、**松田康郷**誕生

1564年、下総臼井城（佐倉市）の戦いで、上杉謙信と戦い**松田孫太郎康郷**が大活躍し、北条氏政公より感状を給う。（北条五代記）

1584 年、北条氏直が**松田康郷**に、武蔵国駒林之村（横浜市港北区日吉本町）での旧来からの諸役は務め、北条家朱印状以外の新規の役の賦課を禁止する。奉者は海保長玄。（武州文書）

(24) 永禄九年（1566）卯月十二日　北條氏政感状寫　松田肥後守



北条氏政公の感状

今度長尾輝虎出張ニ付而、臼井之城楯籠、竭粉骨走廻候、
就中、去廿三及大責処、相拘堅固、敵五千余人手負死人仕出、
翌日敗北、誠以忠信高名之至、無比類候、仍太刀一腰作[長光]、
遣候、恐々謹言、

（読み下し）

この度長尾輝虎が出征したことについて。臼井に籠城して粉骨を尽くして活躍した。特に去る23日の総攻撃を受けたところ、堅固に守備して敵 5,000 余人の死傷者を出し翌日敗北させた。本当に忠信・高名の至りで比類がありません。太刀 1 腰（長光作）を差し上げます。

（解説）永禄九年(1566)3 月北条方の千葉胤富等が守る下総国臼井城（千葉県佐倉市）を上杉謙信と里見義堯・義弘等が攻め、3 月 20 日に落城寸前となった。同国大和田城（成田市）を守っていた松田康郷が手兵を率いて臼井城に馳せ付けて奮戦の末、上杉方を撃退し大敗させた。上杉軍は数千人の死傷者が出たという。結果的にこの一戦に依って謙信の関東攻略は挫折し、常陸・上野・下野の諸将にまで離反され、謙信の関東平定の夢を打ち砕いた。この時の振る舞いを上杉謙信が望見して、

松田家の歴史

「岩舟山に赤鬼の住むと沙汰しけるは、一定彼がことなるべし。」と感嘆したというので有名になり、その後人呼んで赤鬼、または赤鬼孫太郎と仇名したという。孫太郎はこの日の戦に朱色の甲冑を着けていたので、赤鬼と言われるようになったのである。その時に北条氏政公より頂いた感状である。上杉謙信が敗走した戦いはこの臼井城の戦いと北条氏康公に負けた生野山合戦のみである。

松田康隆、松田新次郎藤原康隆

1553年、河村郷三宮寺が建立され、棟札に大旦那**松田新次郎藤原康隆**の名が記される。（相模風土記）

松田康吉、因幡守康吉、右京亮、父：康定、母：不詳、松田寺開基。

1564 年北条氏康公が里見義弘と戦って大勝を博した第二回国府台合戦のとき、大剛の勇士松田康吉が、敵将里見越前守忠弘の子息で、長九郎弘次という容貌美麗で花の如き 15 歳の少年を討取って世の無常を感じ、戦場から直ちに世を逃れて、一念発心して山寺に入り浮世(ふせい)と名乗って、生涯長九郎の菩提を弔って行脚した話は「小田原記」をはじめ、多くの書物に、熊谷次郎直実の再来として記述されている。（北条五代記）

松田康定(康光)、松田六郎左衛門康定、父：

1543年、相模国嵯峨郷(小田原市)宗我都比古神社を再建し、大工に平中明王太郎、小田原城の普請奉行に**松田六郎左衛門(康定?)**・中村小四郎が見える。（宗我神社由来記）

1543年、**松田六郎左衛門尉**・中村小四郎が相模国山下郷寺山(平塚市高根）検地分の田畠一反余を六所神社の寺山清三郎に寄進する。（相州文書）

1543年、北条氏康が相模国板間郷(平塚市)高麗寺分に、検地を施行し田分銭五十六貫余を打出し、山下郷高根分十貫文の合計六十六貫文余を定納、諸役は以前の如くと定め、高麗寺別当坊に検地書出を渡す。連署した検地奉行は中村小四郎・関時長・関戸宗悦・岡田宗遁・**松田六郎左衛門尉。**（皇国地誌高麗村）

松田定勝、（1559～1645）　**六郎左衛門**、父：康郷、母：不詳

松田定勝は、各地の戦で功名をあげた勇者であったが、小田原の城下で、自の武芸を盛んに宣伝して歩く人のあるのを見て、「酒樽に酒を詰めたとき、十分に詰めると鳴ることがないが、詰め方が少ないと鳴る音が大きい。人も同様で、自慢して歩く者は内容が少ないのである。」と言ったがそれが的中して、その男は武芸未熟が露顕して、遂に小田原を逐電したので、松田の名言といって評判になった。

松田康長、（1537～1590）助六郎・兵衛大夫、筑前守康長、清秀、父：康定、母：不詳

瀧川一益との「神流川の合戦」（1582）に武功、氏康馬廻衆筆頭。

松田康長は山中城の城主であった。山中城は「箱根十城」の一つであり、東海道を取り込んでいる構造から見ても十城の中で最も重要な城であった。急速に勢力を増していた豊臣秀吉との関係が険悪になって来た為、豊臣軍との対決に備えて 1587 年に改修を開始、岱崎出丸などを築き大幅な強化がされたが、その改修が終わる前に豊臣軍の襲来を受け、未完成のまま攻防戦に突入した。山中城は北条氏勝、間宮康俊、朝倉景澄、多米長守を始め五千の兵であったが、秀吉軍は山中城を特に重視し、羽柴秀次、徳川家康、堀秀政、山内一豊、中村一氏等が率いる凡そ七万の軍勢を山中城攻撃に向かわせた。山中城は未完成とは言え、北条流の築城術の集大成であり、五倍の軍勢に攻められても守り通せると思われていた。

この山中城攻略部隊は中央部隊を羽柴秀次が、左翼部隊を徳川家康が、そして右翼部隊を堀秀政がそれぞれ率いて山中城を攻撃した。圧倒的優勢の豊臣軍相手に奮戦し、一

時は豊臣軍中央部隊の指揮官の一人の一柳直末が討死するなどの状況になるが、ついに城主松田康長、副将間宮康俊が討ち死にし、落城した。康長は戦闘開始に先立って、死を覚悟しての書簡を松田憲秀におくっている。「某小身の身をもって運を開くこと能わず、然れども名字を汚すことなき印には、討死をとぐべし」（小田原記）とあった。

1559年、「北条氏所領役帳」が作成される。**松田筑前守**、編纂に名が見える。
松田左馬助2798貫余ほか松田家所領多数記載有り。
北条氏、**松田康長**が管理する山中城の普請を桑原百姓中に命じる。
松田清秀が鵜沢一右衛門・上代源太に自身は劣勢で大敵を相手に戦うため勝利は覚束ないから、落城の時に一命を惜しんだ等と子孫に伝えさせないで欲しいと依頼する。（鵜沢文書）
伊豆国山中城が羽柴秀次等の大軍に攻撃され、午後には落城、城主の**松田康長**(54 歳)、玉縄衆の間宮康俊(73 歳)等が戦死する。加勢として籠城した北条氏勝は城を脱出して相模国玉縄城(鎌倉市)に帰城した。

1569年、北条氏政が**松田康長**に判物を出す。当文書は断簡で内容は未詳。（茂原市立郷土資料館所蔵文書）

1569年、北条家奉行人の**垰**和氏続・山角康定・**松田康長**・伊東助十郎が連署して伊豆国三島護摩堂に、寺領の藪の竹木伐採を禁止させる。（小出文書）

1582 年、瀧川一益との「神流川の合戦」に活躍。

1583 年、北条氏直が伊豆国河津(河津町)代官・百姓中に、鉛師と**松田康長代官**の申す如く鉛砂二駄を採集させる。奉者は秩父左近。（武州文書）

1585 年、北条氏直が**松田康長**と相模国萩野宿(厚木市)に市場法度を定め、月六日の楽市と規定して押買狼藉、借銭借米、喧嘩口論を禁止とし、市日での郡代触口の干渉を排除させる。奉者は間宮宗甫。（厚木市難波文書）

1585 年、北条氏直が某寺に寺域内の横合いを禁止させ、前々の如く寺域での居住を安堵する。奉者は**松田康長**。（前橋八幡宮文書）

1585 年、北条氏直が伊豆国修善寺に、先代の証文に任せ寺領・門前・末寺共に安堵する。奉者は**松田康長**。（修善寺文書）

1585 年、里見義康が**松田憲秀**に、自身の元服の祝儀として**松田康長**から返書を受けて謝礼し、殊に**憲秀**から太刀・銭三貫文・刀・三種・三荷の贈呈に感謝し、詳しくは井上憲安から口上で伝えさせる。（手力雄神社文書）

1587 年、北条氏、**松田康長**が管理する山中城の普請を桑原百姓中に命じる。

1587 年、北条氏直が伊豆国桑原(函南町)百姓中に、同国山中城(三島市)の普請人足一人を賃雇いし、12 日から 10 日間の普請工事に従事させ、賃金 60 文を永楽銭で**松田康長**から支払う。（森文書）

1590 年、**松田康長**が相模国箱根権現に、伊豆国山中城の防備堅固で羽柴勢は兵糧に不足し、弱敵で安心して欲しいと述べ、箱根山は羽柴勢を防ぐには不向きで、箱根路は山中城、片浦口は韮山城、川村口は相模国足柄城で防ぐ事が肝要と伝える。（箱根神社文書）

1590 年、**松田康長**が相模国箱根権現に、徳川家康の東海道方面の動向を報せ、駿豆相境に布陣した豊臣勢は兵糧に欠乏して野芋を掘り食べている状況で、兵糧は一升で百文の高値で雑炊は一杯十文と聞いており、長陣は不可能と甘い事を報告する。（箱根神社文書）

松田家の歴史

1590 年、**松田清秀**が鵜沢一右衛門・上代源太に自身は劣勢で大敵を相手に戦うため勝利は覚束ないから、落城の時に一命を惜しんだ等と子孫に伝えさせないで欲しいと依頼する。（鵜沢文書）

1590 年、伊豆国山中城が羽柴秀次等の大軍に攻撃され、午後には落城、城主の**松田康長**(54 歳)、玉縄衆の間宮康俊(73 歳)等が戦死する。加勢として籠城した北条氏勝は城を脱出して相模国玉縄城(鎌倉市)に帰城した。

1590 年、北条氏直が**松田直長**に、父**康長**が伊豆国山中城で討死した忠節を賞し、家督と知行・同心・被官等を相続させる。（記録御用所本古文書）

松田直長、（1562～1657）助六郎、市兵衛、337 貫 600 文。

父：康長、母：不詳、妻：山角左近大夫の娘、子：長重・俊長・山角勝長

戒名：了青　墓所：全長寺(新宿区)

生誕：永禄 5 年(1562)、明暦 3 年 8 月 30 日(1657 年 10 月 7 日）亡

松田直長は、山中城で戦死した父の遺領を継ぎ、愛甲郡萩野郷・伊豆国牧郷などを領した。北条氏没落後は徳川家康に仕え、旧領を安堵され、荻野郷に 230 石、慶長 19 年(1614)から勃発した大坂冬の陣・夏の陣の戦に参陣。寛永 2 年(1625)相模国愛甲郡から上総国に移される寛永年間（1624～1644）までこの地に居住した。後に上総国武射郡・上総国山辺郡・下総国香取郡内に 430 石余を与えられる。慶安元年(1648)徳川家綱付きとなった。松田一族で只一人旧領を安堵され 230 石から 430 石余に加増されたのは何故か、又、7 歳の次期将軍の徳川家綱付きになる程信用されたのは何故か、徳川家綱は 1641 年に生まれ、1651 年に 11 歳で 4 代将軍になった。

大石照基、松田惣四郎、源七郎松庵、父：**松田**康定

1577 年、北条氏照が下野国小山祇園城（小山市）諸蝕口中に、新規随伴の小甫方(おぼかた)備前守は他国衆の為、手作地については努めて違乱の無い様申しつける。奉者は**大石照基**(**松田惣四郎**)。（矢島文書）

1580 年、北条氏照の家臣で下野国小山城城将の**大石照基（松田惣四郎）が**生井郷に、百姓等の望みに任せて郷中を預け置き、先の証文類を悉く集めて郷内の諸事の事を任せる。（小山市立博物館所蔵大橋文書）

1586 年、北条氏直が北条氏照に、佐竹義重が下野国壬生城・鹿沼城(栃・鹿沼市)に侵攻し、壬生義雄への加勢として水海衆五十人を送らせ、同国小山城（栃・小山市）**大石照基（松田惣四郎）**の注進次第で小山に移らせ、小山衆は壬生に移らせる事と命じ、水海衆に知らせて氏照にも出陣の準備をさせる。（楓軒文書纂）

大石秀信、松田四郎右衛門尉、父：**松田**康郷、

1578 年、北条氏政が足利義氏に、年頭挨拶の使者に**松田四郎右衛門尉（松田康郷の子）**を遣わし、太刀・五明を進上する。（喜連川文書案・古河市史史料中世編）

1578 年、武蔵国虎秀(飯能市)吾野神社を造営し、大旦那に**大石秀信（松田四郎右衛門）**、奉行に宮本周直、大工に容後新左衛門、鍛冶大工に中沢十郎左衛門、執り持ちに当社の朝日藤右衛門が見える。（吾野神社所蔵棟札）

1578 年、武蔵国南村(飯能市)妙見社を建立し、**大石秀信（松田四郎右衛門）**が見える。（新編武蔵・武風）

松田家の歴史

1581 年、北条氏照が木住野善二郎・同十郎兵衛に、檜原衆が甲斐国譲原(上野原市)に侵攻して武田勢と合戦に及び、敵を討ち取る忠節を認め、北条氏直に感状を申請すると約束する。奉者は**松田四郎右衛門尉。**（武州文書）

1584 年、北条氏照家臣の**大石秀信（松田四郎右衛門）**が天野景抜貫に、22 日の佐竹勢との下野国小山表での合戦で忠節を尽くした事を激賞する。

（東京大学史料編纂所所蔵天野文書）

1589年、**大石秀信（松田四郎右衛門）**が武蔵国北野(所沢市)天神社に、社殿等の破損無く修築する事や神宝等の紛失のも注意させる。　（北野天神社文書）

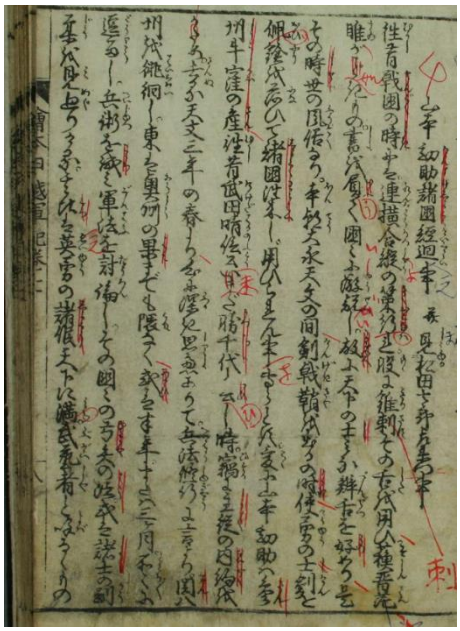
「雑学」☆☆☆

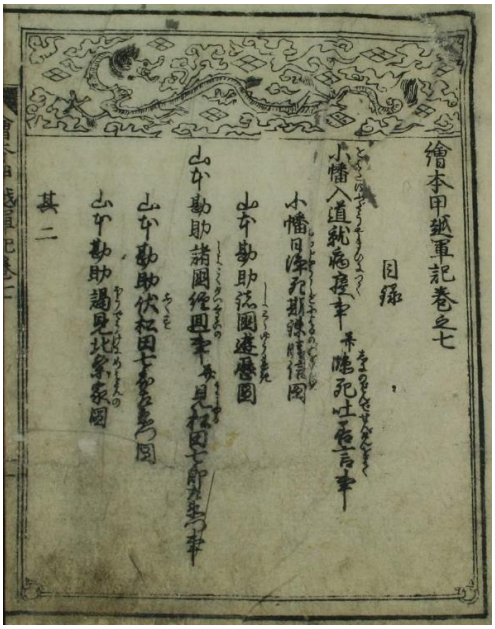
松田家の歴史

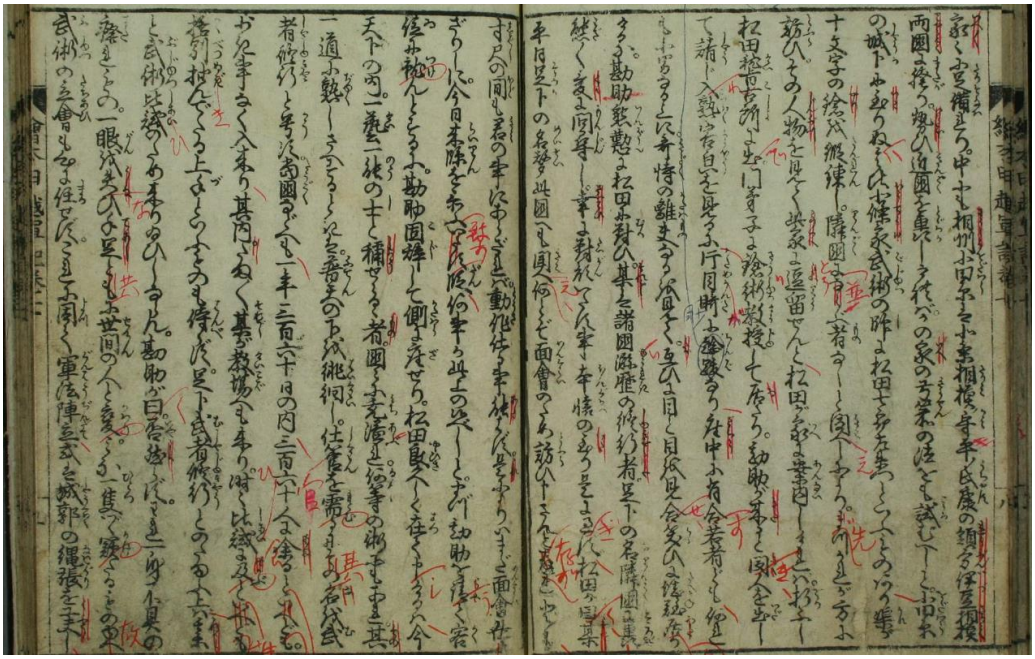
山本勘助と松田七郎左衛門　勘助は武田氏で 100 貫後に 800 貫

山本勘助関連の伝承によると、今川義元への仕官を断られた勘助が北条氏康の武術指南役であった松田七郎左衛門に取り入って仕官を申し出たという。しかし氏康は勘助の容貌を嫌って申し出を拒否し、勘助は小田原を離れ武田氏に召抱えられた。原作者・井上靖の 2007 年 NHK 大河ドラマ「風林火山」でも松田七郎左衛門を登場させている。

「絵本甲越軍記」（山本勘助と松田七郎左衛門）







松田家の歴史

「相州兵乱記」・「小田原記」の松田家関係の抜粋(内容同一)

「小田原軍之事並并大森敗北之沙汰」
　早雲入道最前に進みたまい。戦いを事風の発する如く。攻める事河の決まる如くありしかば。敵一返もかえさず城を落としければ。則追い払いて小田原の城へ移りたまえば。**松田左衛門**と云う人有り。是は公方家仲臣たりし故に。終りに上杉の下知に随はで相州西郡にて度々合戦したりけるが。早雲小田原へ入りたもうと聞き。大いに喜び。最前に馳せ来たって一になる。誠に此外群臣功を積み、相随う事、誠に骨節屈伸のごとく、武勇の程こそ目出度けれ。

「立河原合戦之事」

「權現山合戦之事」
　去る程に上田蔵人入道。武州神奈川へ打ち出でて。熊野權現山を城郭に取り立て。小田原の宗瑞と引き合い謀反の色を立てにけり。早雲。小田原には子息新九郎を止め。吾が身は**松田**。大道寺以下の軍勢を引卒し。高麗寺山并住吉の故城を取り立てたてる。

「外郎事」
　鎌倉建長の開山大覺禅師来朝の時お供いたし。本朝に渡り候てよりこの地に住み候と申す。誠に珍しき貴物なり。すなわち小田原に有るべき由仰せつけて。明神の前に町屋を住み被りける。外郎と云うは是なり。其比**松田孫太郎**・佐藤四郎兵衛・高橋将監・笠原能登守・鈴木兵庫助以下若侍共依り合って申しけるは。武勇の家に生まれては本よりも本望なれども。吾等が生涯こそあまりなし。唯合戦に明け暮れのみにて詩歌管弦に心を寄せる事もなし。空しく愚蒙晴れずして年月を送る事勿体無しとて。京都より連歌の達者を呼び下し。各々和歌をぞ嗜みける。

「河越城責ル事」
　氏綱斯れを聞き賜いて。同(天文六年(1537))七月十一日さか寄りに河越の三木と云う所まで押し寄せたり。先駆けの兵には井浪。橋本。多目。荒川を足軽大将と定め。**松田**。志水。朝倉。石巻を五手に備えて待ち懸けたり。上杉五郎是を聞きて。伯父左近太夫。曾我丹波守を相そえ。武州上州兵二千余騎にて合わせ懸ける。火出る程こそ戦いける。

「小弓義明ト合戦ノ事」
　　夜已に明ければ。小田原勢川端に打ち望む。一陣は箱根殿を初めとして。
　松田・志水・笠原、二陣は遠山・山中・多目・荒川・金石齋以下の兵。
　雲霞の如く押し寄せる。

「加嶋合戦之事」
　天文廿三年(1554)二月中旬駿河へ小田原より御馬を出被る。先陣**松田尾張守**。北條常陸介。笠原能登守。志水。大道寺を初めとして下方庄へ打ち入る。吉原柏原に陣をとる。今川義元其比尾張の敵蜂起して三州まで発向しける間其の敵に対陣ある故。小田原衆に向かわんずる事成らずとて。甲斐国司武田大膳大夫晴信は義元の小姑なり。其の上晴信甲州をとる事彼義元の影なれば。今度義元の代官として甲州晴信出勢して

松田家の歴史

北条氏所領役帳　永禄二年(1559)二月十二日

北条氏、所領役帳を作成する　奉行　太田豊後守関　兵部丞　松田筑前守

松田家の歴史

北条氏所領役帳　（松田家関係部分抜粋）

一　　松田左馬助
千弐百七拾七貫七百廿文　西郡　苅野庄
此内
千貫文　　従前々致来知行役辻
残而
弐百七拾七貫七百廿文　自昔除役間、於自今以後も可為其分者也
此外
百五拾貫文　　入間川卯検地辻
此内
七十五貫文　当年改而被仰付半役
合千七拾五貫文　知行役辻
此外
六拾一貫三百四十文　　飯田岡孫太郎分
但散田之内冨永与両代官二而給田同意候間、無役、
廿三貫七百五十文　　飯田冨永知行内より出、
右同理
廿五貫三百文　　東郡　恩馬
少地二付而無役
五拾貫文　　武州　関戸之内
於御代官所内被下間、知行役除之、
百貫文筑前
百八拾貫文　　笠間此内　　五十三貫文因幡
卅貫文ハ彼地水干損地故、年貢無之由、尾張守申候、
是ハ左馬助致代官両人二御蔵出同前被下付而無役、
合千七百六拾八貫百十文　但人数着到・出銭者如高辻、
此外苅野庄段銭卅貫文納之外被下、
此外、酉歳千貫文被下地、四百貫文日懸谷、卅五貫
文横手廿貫文謁(羯)鼓船、廿貫文大屋沢　廿五貫文盧
苅庭、以上五百貫文三田谷、此外五百貫文松山筋、

一　　松田筑前守
六拾二貫六百六十一文　　下小坂卯検地辻
役御免奏者宗甫
買得　四拾貫三百五十文　元酒井中務知行　勝之高野村
酒井ニ如被下、諸役御免御判形被下、
以上百三貫拾一文

一　　松田因幡
百三貫九百七十一文　　西郡壬子検地辻　今井郷半分
知行役御免、出銭者半役、有御印判、
以上

一　　大野跡、今者松田兵部丞
同
八拾六貫八百五十八文　　今井郷半分
自前々五十貫役到来　者(着)到・出銭者可懸本途、

松田家の歴史

（中　略）

一　　**松田新次郎**

弐百拾九貫十五文　　西郡　川村

拾四貫五百八十文　　西郡　松田西分

五拾六貫五十三文　　同　　東大友

以上弐百八拾九貫六百五十文

此内

弐百五十貫文　自前々致来、

残而

卌九貫六百五十文　除役

以上

（中　略）

一　　**松田助六郎**

買得　百七拾七貫弐百七十一文　　中郡荻野郷元田中知行

此内百十四貫百五十一文　壬寅検地増分

同　　百貫文　　豆州牧郷半分元蜷川知行

六十貫三百六十文　　東郡台之村元松石斎知行

出銭・大普請可申付、御判形有之、

以上三百卅七貫六首卅一文

此内

弐百廿三貫三百六十文　従前々致来、

残而

百拾四貫弐百六十八文　但荻野壬寅増分、役重而惣検地上改可被仰付

此外

十五貫六百廿二文　　三嶋宰相給

除役

百五拾貫　　三浦　久里浜　正木知行

彦九郎殿御知行、役帳二是非これを注すべし。

廿五貫文　　豆州　仁田堀内分

以上百九拾貫六百廿二文

合五百三貫弐百五十三文

此外年期買之分

八十貫文　但戊午三月より六年記定、

七拾貫文　　肥田

百七十貫文　戊午三月より十弐ヶ年記定、

九拾九貫八百文　　多古分

以上百六拾九貫八百文　自前々致来、

（中　略）

右、当方諸侍知行役不分明間、

此度遂糾明、於御眼前被定畢、

後日可為本帳状如件、

永禄弐年己未二月十二。奉行　太田豊後守

関　兵部丞

松田筑前守

筆者　安藤豊前守

松田家の歴史

(読み下し)

一　　**松田左馬助(松田直秀)**

千弐百七拾七貫七百廿文　　西郡((にしごおり)足柄上・下両郡の総称)
苅野庄((かりののしょう)南足柄市全域と山北町・
開成町・箱根町の一部)

此の内

千貫文　　前々より致し来る知行役の辻(合計)

残りて

弐百七拾七貫七百廿文　昔より除役の間、自今以後に於いても其の分たるべきもの也。

此の外

百五拾貫文　　入間川(埼玉県狭山市入間川一帯)卯の検地(1555年に
北条氏によって行われた検地)の辻

此の内

七十五貫文　当年改めて半役仰せ付けらる。

合わせて千七拾五貫文　　知行役の辻

此の外

六拾一貫三百四十文　飯田岡(小田原市飯田岡)孫太郎分

但し、散田の内冨永と両代官にて給田同意し候聞、
無役。

廿三貫七百五十文　　飯田冨永知行の内より出す。

右同理(ことわり)

廿五貫三百文　　東郡(鎌倉・高座の二郡と愛甲・津久井郡の一部)
恩馬(海老名市の本郷上河内・中河内・杉久保一帯)

少地に付いて無役。

五拾貫文　　武州関戸(東京都多摩市関戸)の内

御代官所の内に於て下さるる間、知行役これを除く。

百八拾貫文　笠間(横浜市戸塚区笠間町)此の内　百貫文筑前五十貫文因幡

卅貫文は彼の地水干の損地(洪水や日照りにより被害を受けた田畠)故、年貢これなき由、尾張守(松田盛秀)申し候。是は左馬助代官致し、両人に御蔵出(北条氏の直轄領より収納された穀物の中から家臣に給付される蔵米)同前に下さるるについて無役。

合わせて千七百六拾八貫百十文　但し人数着到(軍役の人数)・出銭(北条氏の命により家臣が上納する銭貨のこと)は高辻の如し。

此の外、苅野庄段銭卅貫文、納の外に下さる。

此の外、酉歳千貫文の地を下さる。四百貫文日懸谷((ひかけだに)埼玉県飯能市赤沢・中藤・原市場あたり)、卅五貫文横手(埼玉県日高町横手)、廿貫文羯鼓船((かつこぶね)埼玉県飯能市平戸)、廿貫文大屋沢(埼玉県日高町大谷沢・下大谷沢)、
廿五貫文蘆苅庭(埼玉県飯能市芦刈場)、以上五首貫文三田谷((みただに)高麗川と入間川の間に広がる地域一帯)、此の外五百貫文松山筋(埼玉県東松山市周辺)。

一　　**松田筑前守**

六拾二貫六百六十一文　下小坂(埼玉県川越市下小坂)、卯の検地の辻

役は御免、奏者(北条氏当主に諸事を取り次ぐ者。又はその役職)宗甫

買得(買い取ること)　四十貫三百五十文　勝(すぐろ(埼玉県坂戸市東部付近))の内高野村　元は酒井中務知行

酒井に下さるる如く、諸役御免の御判形下さる。
以上百三貫拾一文

一　　**松田因幡**
百三貫九百七十一文　　西郡壬子の検地(1552年の検地)の辻　今井郷半分
知行役は御免、出銭は半役、御印判あり
以上

一　　大野跡、今は**松田兵部丞**
同
八拾六貫八百五十八文　今井郷半分(小田原市寿町を中心した地域)
前々より五十貫役到来　着到・出銭は本途(本年貢)に懸くべし。

(中　略)
一　　**松田新次郎(松田康隆)**
弐百拾九貫十五文　　西郡川村(足柄上郡山北町山北・岸・向原一帯の古称)
拾四貫五百八十文　　西郡松田西分(松田町庶子辺り)
五拾六貫五十三文　　同　東大友(小田原市東大友)
以上弐百八拾九貫六百五十文
此の内
弐百五十貫文　前々より致し来る。
残りて
卅九貫六百五十文　除役
以上
(中　略)
一　　**松田助六郎(松田康長)**
買得　百七拾七貫弐百七十一文　中郡(淘綾・大住両郡と愛甲郡の一部。現在の平塚・伊勢原・厚木・秦野(東部)の各市と大磯町・二宮町・愛川町・清川村がその範囲にふくまれる。)荻野郷(厚木市荻野)、元は田中知行
此の内百十四貫百五十一文　壬寅の検地(1542年の検地)増分
同　百貫文　豆州牧郷(静岡県修善寺町牧ノ郷)半分、元は蜷川知行
同　六十貫三百六十文　東郡台之村(鎌倉市台)、元松石斎知行
出銭・大普請申し付くべし。御判形これあり。
以上三百卅七貫六百卅一文
此の内
弐百廿三貫三百六十文　前々より致し来る。
残りて
百十四貫弐百六十八文　　但し、荻野壬寅の増分、役は重ねて惣検地の上改めて仰せ付けらるべし。
此の外
十五貫六百廿二文　三嶋宰相給
除役
百五十貫　三浦九里浜(横須賀市久里浜)　　正木知行
彦九郎殿(北条為昌)御知行、役帳に是非これを注すべし。
廿五貫文　豆州仁田堀之内分(静岡県函南町仁田)
以上百九拾貫六百廿三文
合わせて五百三貫弐百五十三文
此の外年期買　(一定の年期を限って買得すること)の分

松田家の歴史

八十貫文　但し戊午三月より六年定め記す。
七拾貫文　　肥田(静岡県函南町肥田)
百七十貫文　戊午(1558年)三月より十弐ヶ年定め記す。
九拾九貫八百文　多古分(小田原市多古).
以上百六拾九貫八百文　前々より致し来る。
(中　略)
右、当方の諸侍の知行役不分明の間、此の度糾明を
遂げ、御眼前に於て定められ畢んぬ。後日の本帳た
るべきの状、件の如し。
永禄弐年己未ニ月十二。　奉行　太田豊後守
関　兵部丞
松田筑前守
筆者　安藤豊前守

(解説)

北条氏は家臣に対して軍役や普請役などを賦課するために、それぞれの家臣の所領高を記した「北条氏所領役帳」を作成した。その中に松田家の名が六名見える。小田原衆の筆頭に記載されている**松田左馬助（直秀）**は総所領高2798貫110文で、北条氏家臣の中では最高位を占めている。その内、西部苅野庄は南足柄市を中心とした地域であり、左馬助の所領のおよそ半分に当たる。また日懸谷から蘆苅庭までは埼玉県飯能町や日高町に所在する地名で、合わせ五百貫文の所領高となっている

他に左馬助の所領として、北条氏直轄領の代官給として与えられた小田原飯田岡や東京都多摩市関戸などがある。

松田新次郎(康隆)は足柄上郡山北町に所領の大半を有しているが、松田家の名字の地である同郡松田町や東大友にも所領がある。

松田助六郎（康長）は、厚木市荻野や静岡県修善寺町牧ノ郷・横須賀市久里浜・小田原市多古などに主な所領を所持しているが買い取りも多くみられる。

「雑学」☆☆☆

松田家の歴史

北条氏は早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の五代 96 年間、小田原城に拠って、遂に関東の覇権を握ったのであるが、松田家は終始その家老職を勤め、歴代当主を補佐し、一族は各地の戦場でも勲功を挙げて、次第に他家を圧倒し、三代氏康公のころからは、北条家家臣団の第一人者として実権を振うようになっていった。北条氏康公の永禄二年(1559)二月十二日「小田原衆所領役帳」が編纂された。これは北条氏が一族や家臣に対して諸役を賦課する為に、その基準となった各人の役高をその知行地について明記したものであるが、同書には松田家の分を巻頭第一に記してあり、その役高も（北条氏の分を除いて）北条氏家臣団中の最高である。

北条氏内の氏族別所領高

松田氏族	**３９２２.９９５貫**	**（筆頭家老）**
太田氏族	**２４８３.２８７**貫	
遠山氏族	**２４０４.４３５**貫	（三番家老）
内藤氏族	**１６４７.７５８**貫	（津久井城主）
大導寺氏族	**１５６３.８１３**貫	（次席家老）
山中氏族	**１４７７.３５１**貫	

以上の様に松田一族の所領高は破格であった。

松田一族内の所領高

松田左馬助直秀（筆頭家老）	**2798 貫 110 文**
松田筑前守康定（御旗本四十八番将衆）	103 貫 011 文
松田因幡守康吉（御旗本四十八番将衆）	103 貫 971 文
松田兵部丞康隆（御旗本四十八番将衆）	86 貫 858 文
松田新次郎（御馬廻衆）	289 貫 650 文
松田助六郎（御馬廻衆）	541 貫 395 文

松田家（直秀）の領地（2798 貫 110 文）

足柄上郡　松田筋、松田西分、河村及び苅野庄（36ヶ村）。
※苅野庄は現在の南足柄市全域、山北町全域、開成町全域、
箱根町の一部の地域で、苅野庄だけで 1000 貫である。

足柄下郡　飯田岡村（小田原市の一部）、今井村、多古村。

相模国内　高座郡（相模原市〈旧城山町・上溝・下溝を除く〉、綾瀬市、
座間市、大和市、海老名市本郷と河内)。
三浦郡（三浦市、横須賀市、逗子市)、
鎌倉郡（横浜市栄区を含む）。

武蔵国内　多摩郡（多摩郡の内　中野、杉並、武蔵野、三鷹、調布、町田、小平、東村山、国分寺、国立、狛江、東大和、東久留米、
武蔵村山、稲城、日野市の一部、多摩市関戸まで）。
高麗郡（日高市全域、鶴ヶ島市全域)。　川越市（入間川以西)、飯能市、入間市(大字野田、仏子、新光))、
入間郡（狭山市、入間市、越生町、三芳町、毛呂山町、沢、等）。

伊豆国内田方郡（伊豆市・三島市の一部)、君沢郡（三島市の大部分・沼津市)。

松田家の歴史

松田助六郎（御馬廻衆）の領地（541 貫 395 文）

萩野郷（厚木市萩野）、豆州牧郷（伊豆修善寺町牧之郷）、
東郡台之村(鎌倉市台）、三島宰相給（三島市の一部）、
三浦久里浜（横須賀市久里浜）、豆州仁田郷（静岡県函南町仁田）、
肥田（函南町肥田と新田）、下小坂（埼玉県川越市下小坂）

北条氏家臣団

御由緒家：**松田**、大道寺、多目、荒川、荒木、山中、有竹、の七家
御供衆(駿河衆)： 葛山、九嶋、岩本、朝比奈の4家
伊豆衆：早雲公伊豆入りの前後に家臣になった伊豆地方の豪族・地侍が主である。桑原、横井、笠原、松下、遠山、富永、高橋、鈴木、山本、佐藤、安藤（狩野）、山角、村田、上村、梅原、朝倉、横地、田中、南条、清水以上20家
相模十四家：間宮、石巻、安藤、大谷、河村、等14家
浮役寄合衆：仁杉伊賀守など28家
御家門方　（箱根殿、小机殿、六郷殿、伊勢備中殿、伊勢兵庫頭殿、大和兵部大輔殿、）
家臣団の中核的存在
『三家老』**松田尾張守**、駿河興国寺城預かり(今川氏、武田氏の侵攻に備えた西の守り)、小田原城代、浜居場城主
大道寺駿河守、上野松枝城代(上杉氏、武田氏に備えた北の守り)
遠山丹波守、江戸城代(千葉氏、佐竹氏、里見氏に備えた東の守り)
『五家老』(五色備)

北条綱成	黄備、武蔵河越城代
北条綱高	赤備、相模甘縄城代
富永右衛門尉	青備、武蔵栗橋城代・伊豆海賊衆
笠原能登守	白備、伊豆下田城代
多目周防守	黒備、上野平井城預かり

『二十将衆』駿河、伊豆、相模などの国人衆であり、領国内の諸城の守備を分担していた。
荒川豊前、山中主膳正、荒木右衛門尉、在竹又太郎、福島伊賀守、横井越前守、清水上野介、南条九衛門尉、山角四郎左衛門尉、石巻勘ヶ由、佐藤左衛門尉、板部岡右衛門尉、中条出羽守、伊丹右衛門尉、行方弾正、間宮豊前守、朝倉右京亮、大藤式部丞、大谷帯刀、安藤左近太夫。
『御馬廻衆』氏康公の近くを守ったのが御馬廻衆である。総数は 120 家。
松田助六郎・松田新次郎・山角康定・窪田又五郎・大草康盛・伊藤政世・仁杉正通・他
『御旗本備四十八番将将』**松田因幡守・松田筑前守・松田兵部丞**・他。
『二十八老将』四十六家の中から三家老・五家老・二十将衆を選び、二十八老将、譜代として家臣団の中核を担った。

松田家の歴史

松田家を御由緒家に加えたのは、「**松田家**は相模国の出身だが、大身である上に、家名、由緒もある、また早雲公の小田原攻略のときの**松田頼重・頼秀**の協力が大きな効果を示した」ので、それを高くかわれたものである。

御由緒家の七家、駿河衆(御供衆)の四家、伊豆衆の二十一家、相模衆の十四家の計四十六家が後北条氏の草創の功労のあった家臣である。

松田家の家臣団

「関八州古戦録」に**松田憲秀**は相州東野、山室、岩崎、三ヵ所の要害を兼持て、凡そ手の者五千余人を扶助し、南方随一の腹心たりとある。

松田憲秀の家臣・同心

松田康郷(肥後守) 同心、 康定の次男 天文九年生まれ、
北条氏滅亡後結城秀康に仕え、越前北庄(福井市)2300 石。
慶長十四年五月二日死去七十歳、法名は「宗喜」。

松田因幡守 (盛秀・康定の兄弟？) 103 貫 971 文

松田兵部丞 (因幡守の兄弟？) 86 貫 858 文

御宿綱秀(越前守) 同心 妻は憲秀の妹、天正十四年三月十二日松田憲秀朱印状写(諸州古文書)では御宿越前守が奉者を務めた。小田原城開城後に結城秀康に 1 万石という高禄で召し抱えられる。元和元年の大阪夏の陣で討ち死にした。御宿勘兵衛の通称で有名。594 貫文 千福(裾野市)・御宿(裾野市)

御宿隼人佑 同心 綱秀の子、母は憲秀の妹、
26 貫 536 文入西勝之内広野(河越市)

岡谷将監 家臣 奉者

長尾内膳正 奉者

岡部忠秀 家臣 松山本郷の代官 天正七年越後国で討ち死にした。

岡部忠正 家臣 憲秀は忠正の介錯で切腹、忠正は憲秀を高野山に葬った。

岡部忠吉(越中守) 家臣、忠秀の嫡男、松山本郷の代官 (岡部家菩提寺は飯能市下直竹の長光寺、後に杉並区の天慶寺岡部吉正は徳川氏 1500 石)

岡部泰忠 忠高子 右衛門三郎

岡部憲澄 家臣 東京都杉並区の杉並と云う地名は松田憲秀家臣の
岡部氏の領地の境目に植えた杉の並木から始まる。

小澤次郎左衛門尉 家臣 栢山村の小代官

小澤孫七郎 同心 浜居場城の代官

須藤源二郎 浜居場城の代官

村野安芸守 浜居場城の代官

園部忠吉 忠吉の室は笠原康明の娘

窪田又右衛門尉 (後に内藤氏の家臣)

狩野介 支配 吉原城城主のち松山城城将 771 貫 550 文
永禄十二年十二月六日駿河国蒲原城(静岡市清水区)で城主の北条氏信と共に武田勝頼の軍と激戦の後、討ち死にした。

肥田越中守 同心

松田家の歴史

蔭山氏広　　家臣　蔭山氏広の養女(北条氏尭の孫)は北条氏滅亡後家康の側室(お万の方)となり、十男頼宣・十一男頼房を生み、頼宣に常陸水戸二十万石、頼房に下総下妻十万石が与えられる。後に頼宣(8 才)駿河･遠江五十万石に、その後、頼宣､紀伊五十五万石に移封。頼房(7 才)水戸二十五万石に移封され、頼宣は和歌山藩主、頼房は水戸藩主となり、それぞれ御三家の和歌山藩・水戸藩の祖となった。

発仙　　奉者

山口重明　同心　武蔵国横手村代官(日高市)

山口重久　同心　武蔵国横手村代官(日高市) 重明の嫡男

橋本外記　30 貫、天正十二年(1584)十二月十一日北条氏朱印状、P.314 参照

井上憲安 但馬守、天正十三年(1585)十一月十日里見義康書状、P.319 参照

池田出雲

松田憲秀の配下

山角定勝（紀伊守）81 貫文　室は松田康長の娘。松田康郷の室は定勝の娘。徳川家康と交流があった。定勝は北条氏直と徳川家康の娘督姫の婚儀では媒酌人を務めた。松田憲秀の指南する下総国衆の小指南を務めた。
鎌倉市岩瀬の大長寺に釈迦涅槃画像を山角定勝室が寄進した。大長寺は松田憲秀との関係も深い。小田原城開城後は徳川家臣となり 1200 石。

山角康定　北条氏評定衆 御馬廻衆筆頭 300 騎の侍大将 虎朱印状の奉者
長尾景虎との「越相同盟」の交渉に関わった。

笠原康明(越前守) 憲秀の配下　天正八年三月十日織田信長と謁見
御馬廻衆の一員で、奉行衆、評定衆を務める内務官吏として重きをなした後に岩槻城代

石巻康敬　80 貫文 家貞の次男、御馬廻衆で奉行人・評定衆
由良氏との同盟交渉にも関与　後に徳川氏 111 石

垪和康忠(伯耆守)　小田原城評定衆、奉行人、奉者
永禄 12 年(1569)に遠山康光と共に越相同盟締結のため
上杉謙信との交渉、元亀 2 年(1571)の甲相同盟の交渉

依田康信(下総守)　小田原城評定衆、奉行人、奉者

岡本政秀(越前守)　配下　(初め北条氏康・氏政・氏直の家臣、普請奉行)

酒井康治　上総国東金城主･館林城代

松田憲秀の指南に属した者

北条氏照　北条氏家臣　八王子城城主・古河城城主・小山城城主・栗橋城城主・関宿城城主・榎本城城主・水海城城主

遠山政景　北条氏家臣　江戸城城主

富永政家　北条氏家臣　江戸城城将

内藤康行　北条氏家臣　津久井城城主　1200 貫 808 文

山中康豊　北条氏家臣　三崎城城代・三崎郡郡代　168 貫文

笠原綱信　北条氏家臣　三島東方代官　　447 貫文

松田家の歴史

上田憲貞　北条氏家臣　松山城城主　長則の弟
山上久忠　大道寺政繁家臣
金子紀伊守新五郎　内藤康行家臣　10 貫文　天正十八年松山城に籠城
窪田又右衛門尉　　内藤康行家臣
宍倉兵庫助　　内藤康行家臣
平山源左衛門　　内藤康行家臣
原胤貞　（上総介）　臼井城城主(佐倉市)
原邦房　森山城城将・佐倉城城主千葉邦胤の家臣。北条氏に属した。
　　後臼井城城主
原胤秀
原胤榮　　臼井城城主(佐倉市)　胤貞の子
原志摩守　　原胤榮の家臣
酒井胤敏　　東金城城主　8 貫文(坂戸市)
酒井康治　　土気城城主(千葉市)、伯耆守、胤康(胤治の次男)、原胤貞に仕えたが、松田憲秀の命で、津久井城の内藤氏の指揮下に入った。
　　嫡男重治は徳川家康に仕え 650 石
豊島三河守貞継　　府川城(利根町)城主
正木藤太郎　金谷城城主(富津市)・一宮城城主(千葉県一宮町)
幸田政治　　常治子　大蔵小指南松田

松田康郷の家臣と同心
蔭山氏広　同心？　蔭山忠広の嫡男、臼井城の合戦で活躍
山下民部左衛門尉　与力

松田康隆の家臣と同心
原次郎左衛門　　相模国西郡の鍛冶職人
向原政秀(式部丞)　　代官

松田康長の家臣
土屋豊前守

「雑学」☆☆☆

松田家の歴史

松田家 10 代松田憲秀は左衛門尉頼秀の孫で、初め左衛門佐を称し後に尾張守を号した。憲秀に至って松田家が全盛に達し、関八州の太守北条家の重代の家老職として権勢並ぶものがなかったことは、「関八州古戦録」に詳しく記されている。「松田尾張守が祖先は、相州西郡の領主三浦備中守時方が家人にて孫三郎頼重と言い、後に左衛門尉と号す。生得知勇あって、本主時方を欺きたらし、その領地を押領して扇谷上杉朝良に従い、先隊の将と成て、永正元年九月二十七日、武州立河原の時も抜群の粉骨を顕し、其後北条早雲に属して当時尾張守に至り、君臣相共に五代を経たり。初め北条家の長臣は荒木、山中、大道寺三人たりしが、荒木は淫乱無道にて逆心の企て有し故、氏康自身手にかけ殺戮せられ、その代りに尾張守憲秀を補せらる。相州東野、山室、岩崎、三ヵ所の要害を兼持て、凡そ手の者五千余人を扶助し、南方随一の腹心たり。」と述べている。

文中に「君臣共に五代を経たり」というのは、北条家は早雲、氏綱、氏康、氏政、氏直の五代、松田家も、北条氏に属してから、頼重、頼秀、顕秀（盛秀）、憲秀、直秀（直憲）と五代続くので、これを言ったものである。大道寺家は別として、いわゆる早雲同志の由緒家が次々と衰微したので、それに代わって、松田家の勢力が益々伸張することになって、憲秀の全盛期を迎えたのであるが、彼自体頗る知能才幹の優れた人物であったらしい。

小田原の松田屋敷と武田信玄と徳川家光

場所は早川口近く今の小田原市南町西海子通りから、お花畑あたりにあった広大な邸宅であったらしい。**1569 年武田信玄の小田原攻め**のとき、城下の侍屋敷、商家、民家まで火を放って焼いたが、風祭の陣所で、信玄が**松田屋敷**を焼き残したと聞いて、「究竟の家をもたらす事、後日の批判如何なり。松田も定めし威言すべし、残念の至りなり。」と言って（関八州古戦録）、馬場美濃守に手兵を率いて**松田屋敷を焼き払わせた**ことがある。

その後再建し江戸時代までその屋敷が残っており、**1634 年 6 月 23 日、三代将軍徳川家光が上洛の途次、小田原城に滞留中に、将軍自らこの屋敷を見るために足を運んでいる。**

また「新編相模風土記」に、稲葉時代の図面に、**宅跡東西八十六間、南北七十二間ある（約 6,200 坪）と記している**から、広大な屋敷であった事と憲秀の豪奢な生活振りが想像できる。松田憲秀は一国の大名ほどの格式を持ち、文書発給の際に印章を使用したものがある。文書に判を押すのは東国の戦国大名の一特長でもあり、松田家が戦国大名に準ずる立場にあったことを示したものでもある。又、憲秀は北条家の領地の管理もしていた。

松田屋敷はその後、藩主稲葉氏の別邸となり、諸大名の接待に利用された。
稲葉正則が藩主の時に花畑とした（新編相模）中には藩主の館や長屋，そして鉄砲場・矢場・水練場・馬場があり，参勤途中の大名を招いて宴がはられた（永代日記）。稲葉氏藩主時代の小田原城下を描いた寛文・延宝図によれば（小田原市立図書館所蔵），花畑の広さは 97 間×110 間ぐらいで、北東隅と南西隅に武家屋敷が見える。

藩主大久保氏の代に大部分が武家屋敷地に割かれ，南西隅に浜御殿が建てられた小田原城下の嘉永図では 100 石以下の家臣が多数住んでいる（小田原城天守閣所蔵）明治 5 年浜御殿内に共同学校が開校、同校は明治 7 年教員養成講習所，同 9 年小田原師範学校となったが，同 12 年廃校明治 8 年小田原駅十字町の一部となる。

松田家の歴史

笠原政尭考

笠原政尭については内通者とのレッテルが貼られ、討たれたという説が通説になっているが、一方で、北条家滅亡後僧となって三島市の蔵六寺を開山し、一生を過ごしたという寺伝もある。

憲秀の長男(武田氏文書では憲秀の次男)政尭は笠原光貞の次男、笠原新六郎常克で、松田憲秀の養子となり、新六郎政尭と称した。しかし、松田家にも直秀が生まれ、直秀は氏政公、氏直公に幼い頃より寵愛され、政尭は松田家の家督は継げず、笠原家に帰された。その後、笠原能登守に実子の平左衛門照重が誕生した為政尭は笠原氏の家督も継げず、主君には直秀ばかり取り立てられ主君の強い要望もあり弟が松田家を継いだので、この原因を作った主君氏政公に対して不信の念を抱くに至った。

1579 年に武田勝頼と北条氏政公との甲相両家が手切れとなって、武田、北条領の接触点の駿豆国境線が重大化したので、北条氏はこの線上にある長窪城に清水上野介、獅子浜城に大石越前守、泉頭城に大藤式部輔などの諍々たる大将を置いて守らせたが、戸倉城へは、武田領の沼津城に隣接しているので最も大切だというので、笠原新六郎政尭が配せられて立て籠もることになった。ところで、ここを政尭が守っている二年間のうち、駿豆国境では常に夜懸の足軽等の小競り合いが行われたが、他の城々からは度々多数の敵を討ち取って、その注進が続々小田原に至ったが、戸倉城の方からは一向の手柄もなく過ぎたので、氏政公、氏直公父子は笠原政尭を臆病者とののしった。だが戸倉城の付近は三方を川に囲まれ、深水の地で、働き不自由な処であるから政尭が手柄をあげようにも成し得られなかったのである。この頃から政尭の謀反心が動き始めた。政尭と対陣していた高坂弾正忠昌信の養子春日宗次郎昌之が、三島の心経寺の住職を戸倉城に遣わして、政尭に伊豆一国を与え、武田勝頼の聟にするという条件で、武田方に味方になるように、種々の方法で勧誘したので、政尭も遂に寝返りを決意して、1581 年 10 月になって、武田家に降伏して、北条氏に謀判することとなったのである。そして、武田方の応援を得て来攻した北条方と戦って義弟の笠原平左衛門を討取るという結果にまでなった。しかし、その翌年の 1582 年 3 月に、武田勝頼は織田信長に滅ぼされたので、戸倉城も落城し、政尭は寄りどころのない身となってしまった。そこで再び氏政公に降参したが、氏政公は以ての外の気色にて諸臣への見せしめだから、召し捕らえて死刑にすべしとのことであったが、義父尾張守入道憲秀の嘆願によって漸くにして打ち首だけは免れたが、頭を剃って僧体とされ、父の領土の川村の郷へ蟄居を命ぜられたのである。と云う説が残ってはいるが、**笠原新六郎政尭忠臣説**もある。

それは直木賞作家、NHK 大河ドラマ「天と地と」の原作者、小説家新田次郎氏は小説「武田勝頼」の中で、「武田が滅んだ後、織田、徳川は必ず関東に兵を進めてくるに違いない！そうさせない為にはなるべく武田を長持ちさせることだ！　従って北条氏政と松田憲秀は徳川を抑制する為に伊豆地方を武田に寝返りさせようと考えていたのであり、笠原政尭が武田に降ったのは北条氏政の命によるものと信じている」と記載している。又、静岡県三島市御園 508-1 の蔵六寺は 1535 年に開創され、開基は土地の土豪後藤石見守と云われ、この人が友人である正厳和尚を招いて開山したと伝えられている。寺伝によれば、この正厳和尚は笠原政尭とされ、以前政尭が僧となった時に号していた蔵六坊という名から亀霊山蔵六寺という寺の名にしたという。また、亀霊山という山号も亀のように頭、手足、尾の六本をかくす（蔵）意味から付けたようである。笠原政尭は笠原隼人佐とも言われ、1626 年 60 才で病没したと言い伝えられている。忠臣政尭は氏政公により密かに逃がされていた可能性も出てくる。

松田家の歴史

亀霊山蔵六寺

1590 年豊臣秀吉の小田原攻めの時、小田原城内での評定は約 3 ヶ月も続くが、結論としては籠城策が採られ続けたのである。結果的に戦いが避けられた事は両軍共何万という死傷者を出さずに済んだ。これは松田憲秀、北条氏規の籠城策を続けた最大の功績である。秀吉軍 22 万に包囲され、徳川家康も敵に付き、伊達政宗にも裏切られた。小田原城の支城は 6 月 24 日迄にほぼ全滅し、圧倒的な兵力差を見せ付けられた。特に、八王子城の戦いで討ち死にした老将狩野一庵・中山勘解由ら大勢の首が小田原城中に届き、6 月 27 日にはそれ迄見た事も無かった本格的な天守もあり、石垣の積まれた石垣山一夜城を突如として見せられ、籠城兵士の逃避もあった。これ等によって小田原城内の士気は一気に削がれた。このことがあって間もなく小田原城は開城するのである。北条氏政公、氏照が責任をとらされ切腹、筆頭家老松田憲秀切腹、次席家老大道寺政繁切腹、となった。通常の戦後処理より厳しいのは秀吉が北条氏の再起を恐れた為と他の大名への見せしめの為であった。

徳川家康の娘婿である氏直公は死一等を減ぜられて、高野山に追放の身となったが、この時、高野山に従って行くことを許されたのは、一族、腹心 30 人と雑兵 300 人であったが、腹心 30 人の筆頭に松田左馬助直秀がいた。このとき、義弟元津久井城主内藤左近太夫直行、直秀の弟松田弾三郎秀也、大道寺孫九郎直政もいた。松田直秀は氏直公に余程の信頼の篤かった人物であったと見える。直秀達は北条家の再興に奔走し、氏直公は翌 1591 年下野足利等で一万石の大名に取り立てられ、秀吉はさらに翌年伯耆一国、十万石の大名に取り立てようとする意志を示したが、氏直公の突然の病没に遭って望みは絶たれてしまった。直秀は氏直公より感状を賜っている。直秀はその後関白豊臣秀次に仕えるが、関白没後は前田利家公在世中子息の前田利長公より加賀藩に召し出され、1597 年に松田四郎左衛門憲貞(直秀)が 4000 石で召抱えられた。四郎左衛門憲貞は前田利常公の時に公儀御普請の為、御普請奉行を仰せ付けられ越後の国に赴き、1614 年 7 月 23 日同地で病没した。その嫡男、四郎左衛門憲成は遺知 2000 石を賜ったが、1615 年正月大阪の御陣屋で 14 歳のときに病没し断絶となっている。次男、次郎右衛門は遺知 1000 石を賜ったが、「松田家先祖由緒一類附帳」には自身期するところ有り、お暇を乞い東国へ行くとある。三男、四郎兵衛憲次が遺知 500 石を以って松田本家を継ぐことになるのである。この頃二人の姉妹がおり、姉は持参金として遺知 300 石をもって有賀縫殿室となり、有賀家の 100 石と併せて 400 石となり、有賀縫殿助はこの時より松田を称し、新しく一家を興している。妹は遺知 200 石を持って冨田弥五作室(1200 石)となった。加賀藩での松田家は御馬廻役であったが、御普請清會所道具調奉行兼道具渡奉行、御普請奉行、検地奉行、武具奉行等を歴任した。加賀藩での約 260 年間松田家は平穏無事に過ごした。

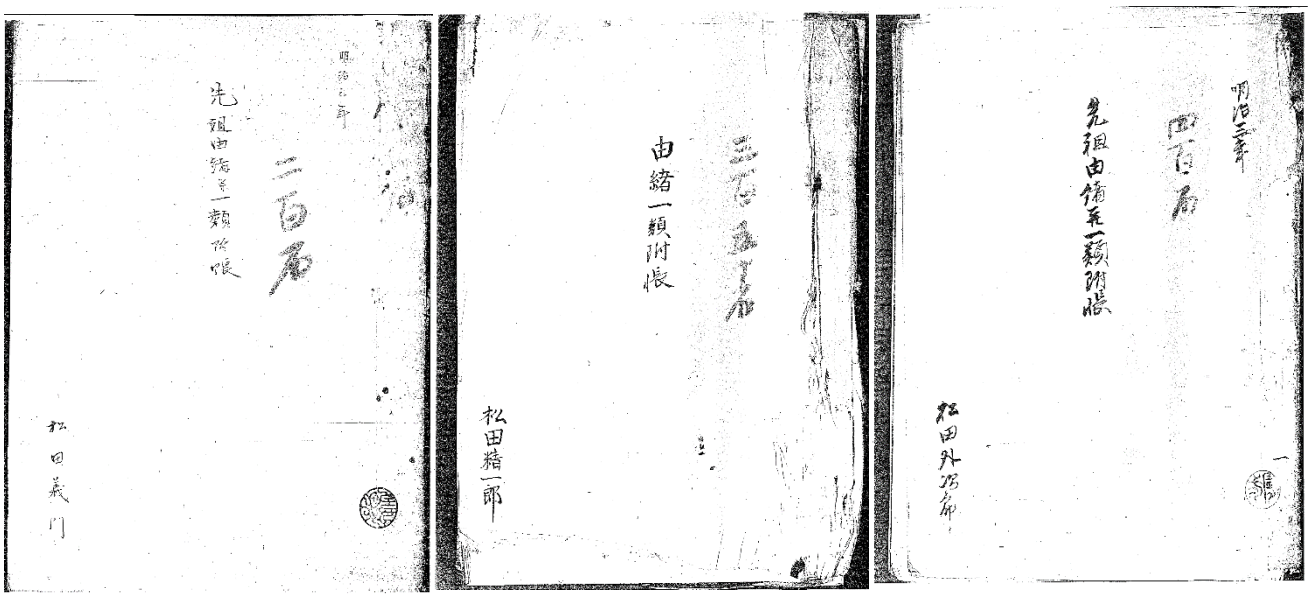
松田家の歴史

その後、時代も移り徳川幕府も崩壊し、1869 年(明治 2 年) 版籍奉還、1871 年(明治 4 年) 廃藩置県となり全国 200 万人の藩士が大量解雇となるのである。

1870 年「明治 3 年」に松田義門藤原憲成、松田精一郎藤原郷憲、松田外次郎藤原憲一はそれぞれ**「先祖由緒并一類附帳」**を書き残し、現在金沢市立玉川図書館に保存されている。その後の我が松田家は金沢市長町三番町から東京府神田鍛冶町、東京府中野、八王子市南町、先祖に引き寄せられるように現在は神奈川県相模原市に移り住んでいる。

又、憲貞と共に高野山に従った義弟(内藤大和守綱秀)の子内藤直行（助右衛門）は憲貞（四郎左衛門）が前田家に召抱えられた時に同行し、200 石で召抱えられ、内藤家も明治 3 年に「先祖由緒并一類附帳」を書き残している。菩提寺は松田家菩提寺本因寺近くの高岸寺である。

松田家「先祖由緒并一類附帳」（本文は P.450~514）



「雑学」☆☆☆

松田家の歴史

小田原評定と松田憲秀

「小田原評定」という言葉は「いつになっても決まらない会議や相談」という意味の諺として使われるが、元々は小田原城中で以前より行われていた毎月 2 回の重臣会議の事である。当時としては独創的な制度であり、約 100 年間五代にわたって家臣・国人の裏切りが皆無に近い後北条氏の強さの裏付けと考えられている。

問題にされている「小田原評定」は 1590 年の豊臣秀吉による小田原城を攻撃した際の「小田原評定」である。関東の地は京都から独立を志向する風土でもあり、難攻不落の小田原城、城郭は総構え 9 ㎞と現在の約 10 倍あり総構え 7.2 ㎞の大阪城より立派であったという。北条氏は 265 万石を領有し、当初は徳川家康、伊達政宗とも同盟を結んでいて、ほぼ東日本をこの三家が支配し、十分に秀吉に対抗していた。特に北条氏直の室は徳川家康の娘であり、同盟は堅いものと信じていた。ところが、徳川家康は豊臣秀吉の実力を近くで見ており、対抗せず、秀吉の軍に参加してしまった。伊達政宗は成り行きをみていたが、形勢不利と見るや、秀吉に跪いてしまった。北条氏と老臣松田憲秀は上杉謙信や武田信玄に攻められた時にも籠城策で撃退した実績があったので、籠城策を採った。秀吉は 22 万もの軍勢で長期に亘って物資が賄えずに攻め続けられるものでは無いと判断したのであろう。当初は交戦を主張したが、形勢不利と見るや評定では松田憲秀・北条氏規は籠城策を主張し、これに対し北条氏照・北条氏邦は無謀な野戦を主張した。憲秀は氏康公からの重臣、筆頭家老でもあり、年齢も 60 歳、氏政公は 52 歳、氏直公は 28 歳、氏照は 50 歳であり、憲秀は幼い頃から氏照の指南をして来た関係でもあった。この様な状況で憲秀の意見を尊重しなければならず、三か月間も評定が続いたのである。これを世に「小田原評定」と云うが、これは秀吉方から見た判断で、敗北の決断を早くして開城して欲しい処、なかなか城門を開けずに日時が懸っているので「いつになっても決まらない会議や相談」と云ったが、実際の「小田原評定」では籠城策を採用すると云う結論が出ており、最後まで野戦をする事無く、籠城を続けたのである。

評定衆の訴訟裁決の結果について、具体的内容が記された文書と評定衆

「北条五代記」：**松田尾張守・松田肥後守**・伊勢備中守・大和兵部少輔・小笠原播磨守・山角紀伊守・山角上野守・安藤豊前守・垪和伯耆守・板部岡江雪入道

「改正三河後風土記」：（天正 18 年正月 2 日）この評定では松田憲秀が籠城説を唱え、伊勢定宗（貞運?）が沼津か三島辺での迎撃説を述べている

松田尾張守憲秀・松田肥後守憲範（康郷）・伊勢備中守定宗・大和兵部少輔晴親・小笠原播磨守長範・山角紀伊守定勝・山角上野介定方・安藤豊前守載正季・垪和伯耆守綱可・板部岡江雪斎入道、（定宗は時代が違う）

「関八州古戦録」：（天正 18 年正月 20 日）北條氏邦が駿州沼津城を攻取る迎撃戦を主張し、松田憲秀が籠城戦を主張している。**松田尾張守入道・松田肥後守康郷**・伊勢備中守貞運・大和兵部少輔晴親・小笠原播磨守長範・山角紀伊守政長・安藤豊前守載正季・垪和伯耆守綱可・板部岡江雪斎・福島伊賀入道道眸

北条氏評定衆は 20~30 名いたようだが、それぞれ 10 名ほどしか記載されていない。

その他の評定衆：大道寺政繁・遠山政景・垪和康忠・垪和康忠・清水康秀・笠原康明・石巻家貞・石巻康保・狩野康光・笠原綱信・山角康定・等

松田家の歴史

松田憲秀の内応説

戦国時代は下克上の世の中で、生き延びる為、家族・家臣・領地を守る為に必死で生きた時代である。信長は尾張守護・斯波氏を裏切り、家康は今川氏を、秀吉も最初は今川氏に、次に織田氏に仕え、信長の死後は世継ぎ候補を殺し、追い落とし、織田氏を乗っ取っている。それぞれ離反して、のし上がった。全ての価値が混乱し、乱れた乱世であった。

当時は人を裏切ることは現代人が考えるほど卑怯な事では無かった。江戸時代になると君臣の別を重く見る朱子学は幕府体制を維持するのに役立つので、公式学問のようになっていった。「甲陽軍艦」・「信長公記」等は、朱子学の影響が広まる前のものなので、「謀反」を悪とする倫理がまだそれ程強く無い。また、我々の知る歴史は勝者の立場で書き残されたものが殆どなので、統治する者の側に立った英雄伝である。敗者には反論が出来ないまま語り継がれてしまっているので、我々の知る歴史は全てが真実とは限らない。

また、内応工作はどこの大名もしていた事で、敵の勢力下で諜報活動や攪乱工作を行い、味方が有利になる様に画策した。その様な時代なので憲秀が内応したとしても不思議では無いが、次の5つの理由で憲秀の内応は無かったと考える。

まず最初に

松田憲秀内応説は、「北条五代記」や「小田原北条記」が元になって世間に広がったものである。「北条五代記」「小田原北条記」は史実を忠実に著したものでは無く、内容は逸話を集めたもので、諸事聞きかじりと小説の様に事実で無い事も書き加えた江戸時代の戦記物語である。歴史書としてはあまり評価の高くない書物で、読者の興味をそそるように再編した作品であり、「小田原北条記」を元に後世の書物に記録したものが史実の様になっていった。「小田原北条記」の元と考えられる内応と思わせる文書も残っているが、調査をしたが、これは秀吉の城内の人心を撹乱させる戦略的偽文書や噂を真に受けた者が作文をしたものであった。これらからは憲秀が内応の当事者とは特定は出来ない。なを、不名誉な密会の様子を当事者が公にこの様に細かく話をするであろうか。「講釈師見て来た様な嘘をつき」の例えも有る。後日内通の密会に出席していたとされる参加者は養子の笠原新六郎を除き、前田氏・結城氏・徳川氏に高禄で召し抱えられている。笠原新六郎については別説があり、直木賞作家新田次郎氏は当時の「武田氏は力が無く、織田・徳川が攻めて来た時に武田氏を少しでも長持ちさせる為に氏政と憲秀の考えで新六郎を武田に寝返りさせたのであろう」と書いている。三島市の蔵六寺の寺伝によると笠原新六郎が僧になって蔵六寺を開山し1626年迄生きていたとの事である。

「北条記」「相州兵乱記」「北条盛衰記」「北条五代記」などは歴史書では無く、江戸時代の戦記物(物語本)を元に述べられた事は次の事でも証明できる。北条早雲の出自について「北条記」と「相州兵乱記」は伊勢素浪人説を記載し、「北条五代記」・「北条盛衰記」は山城宇治説を記載している。北条早雲の出自は室町幕府の政所執事を務めた伊勢氏で、伊勢氏のうちで備中国に居住した支流で伊勢新九郎盛時であり、備中荏原荘(井原市)で生まれ、荏原荘の半分を領する領主(300貫)である。北条早雲は文明15年(1483年)に9代将軍足利義尚の申次衆に任命されており、長享元年(1487年)奉公衆となる。松田頼重と北条早雲とは足利将軍の近くで同じ奉公衆であった。

松田憲秀は豊臣秀吉の小田原攻めの時、当初徹底抗戦を主張していたが、豊臣秀吉の軍が職業軍人22万の大軍であり、北条軍は半農半士も含めた5万人、徳川家康も敵に付いたと見るや評定では松田憲秀、北条氏規は籠城策を主張し、これに対し北条氏照、北条氏邦、伊勢貞運は無謀な野戦を主張した。

松田家の歴史

憲秀が籠城策を主張したのは以前上杉謙信や武田信玄に攻められた時にも籠城策で成功した実績があり、22 万の大軍では長くは物資が賄えないだろうとの目論見があったが、秀吉軍は物量も豊富であった。この評定は約 3 ヶ月も続くが、結論としては籠城策が採られ続けられた。結果的に戦いが避けられた事は両軍共何万人という死傷者を出さずに済んだ。これは松田憲秀、北条氏規の意見で籠城策を続けた最大の功績である。松田憲秀の失敗は前田利家・堀秀政と戦後処理に就いての駆け引きを独自に行っていた事である。それは憲秀が長老として若い氏政・氏直を補佐しなければならないという、北条氏を存続させる為の忠義と誇りの方策であり、松田憲秀が抱えた苦衷は大きかったと思う。その為に誤解も生むが、北条氏の安泰を念じていた憲秀は秀吉からの誘いには最後までのらず、城門を開ける事は無かった。北条方は今まで見た事の無い瓦葺で石垣の立派な石垣山一夜城を見せられ、又城内の内部分裂を謀る戦術的な噂の吹聴や偽文書などによって城内の人心は撹乱され、秀吉の攪乱戦術に北条方はまんまとはまり、開城となるのである。
その結果秀吉の誘いにも乗らず、当初徹底抗戦を主張していた事、北条氏再起への恐れもあって憲秀は切腹となった。

なを、この当時の事が郷土史家の中野敬次郎氏に依って次の様に書かれている。「天正十八年(1590)小田原戦役の北条軍籠城中に、家老松田尾張守憲秀が敵方に内応して反逆を企てたので誅殺された事件は、小田原落城悲劇中の大詰の一場面として有名であるが、松田尾張守とはどんな人物なのか、その謀判の真相はどうなのか、此の事については従来疑問とされた点が頗る多いのである。(中略)北条氏康は寛仁大度の名将で、その赫々たる武徳はよく家臣をなづけ、条理を正し、裁断厳正であったので、威令関八州に行なわれた。憲秀はもとより才幹衆に優れた人物で、権勢あっても、これ独り計弄することなく、家老として忠勤を励み、各地の戦場でも抜群の勲功をあげて、氏康からも他界篤い信頼を受けていたのである。松田一族は、早雲以来、主家北条家の為に惜しみなき忠勤を励んだ家柄で、其の為権勢も増大したが、とにかく元亀二年(1571)氏康が世を去って氏政の時代に入ったが、氏政は氏康程の大器ではなく、残念ながら人心集欖の資に欠けており、むしろ憎愛の念が強かったので、家臣の間に相当の動揺を与える事が有り、松田憲秀一家もそのあおりを喰ったものの一つである。」と記述している。以上が憲秀の内応は無かったと云う最初の理由である。

2 つ目の理由は、3 か月経っても城門は開かなかった。もし、内応をしていればもっと早くに城門を開けていた筈である。秀吉はイライラしており、何度も城門を開けるように要求が来ていた筈である。22 万もの大軍を抱えて楽に待てる筈は無く、当時日本に来ていたポルトガル人のルイスフロイスの書いた「日本史」によると北条氏の籠城がもう少し長引けば秀吉軍は撤退しただろうと書いている。しかし、北条軍は石垣の積まれた瓦葺の一夜城を見せられ、八王子城で討ち死にした老将狩野一庵ら大勢の首が小田原城中に届き、小田原城内では松田憲秀内応との戦略的噂を流し、籠城軍の戦意を喪失させた。これらに依って開城となるのである。

3 つ目の理由は、北条氏滅亡後、直秀は家来筆頭として氏直公と共に高野山に追放されるが、直秀が高野山で発行した文書に尊敬していた父憲秀の「憲」の文字を自分の名に使用し、直憲と改名した。天正十九年(1591)五月十一日と七月十八日に松田直憲書状を残している。憲秀の「憲」を高野山にいる内に使用するという事は内応が無かった証拠である。内応が有れば氏直公や周りの人々に憚って(はばかって)「憲」の文字など使用出来ない筈である。又、随行した約 30 人の家臣達や他の随員 300 人の人々も黙っていなかったであろう。

4つ目の理由は、

この当時、前田利家と徳川家康の力が拮抗しており、前田氏と徳川氏が戦いになった時に関東の北条氏の旧勢力を前田氏に確保したい目論見があった為に4000石の高禄で加賀前田氏が松田直秀を召し抱えたのである。松田憲秀に内応があったとすれば、裏切り者の跡取りに付いて来る者は一人も有り得ない。北条氏の旧勢力を纏める事を直秀に期待して前田氏が召し抱えたのである。

「加賀藩資料『寸錦雑編』」に前田利家公談話と云う記述が有り、

「松田四郎左衛門(直秀)を加賀前田氏が召抱えた理由」が記載されている。

加賀藩資料『寸錦雑編』に依ると「利家公は利長公に対して「内府(徳川家康)と我らは必ずや敵対関係になるのは必定であろう。その時関東は先主である北条を忘れぬ国であり、義理深い国であるから、かの北条を押し立て、その方(利長)に属する松田四郎左衛門に関東で旗を挙げさせたならば、たちまちの内に関東の八カ国は我らに味方するであろう」と言った。と記述されている。

5つ目の理由は,

その後、憲秀の子の直秀は前田氏に召し抱えられた時に四郎左衛門憲貞と改名した。また子供達にも憲成・憲次と「憲」の文字を使用し、明治時代迄子孫達も22名中21名が憲秀の「憲」又は「郷」の文字を使用している。「郷」は憲秀の別名憲郷の「郷」である。内応が有り、松田の名を辱めたのであれば子孫達も憲秀の文字を使用する事は有り得ない。子孫の全員が憲秀を尊敬していたと云う証拠である。以上5つの理由で憲秀の内応説は事実では無かったのである。

NHK大河ドラマの時代考証をされ、戦国時代史研究の第一人者として活躍されている、静岡大学名誉教授**小和田哲男氏**から次の様な手紙を頂いた。【御先祖のこと、くわしくお調べになり、関係する地に足を運ばれていること、頭が下がります「松田家の歴史」の中で一番気になったのは、憲秀のご子孫が憲の字を付けておられる点でした。普通ならば、謀判人は嫌いますので、つけないと思います。むしろ触れないようにしたいと考えるのではないでしょうか。そうなるとご子孫の間には、通説とは異なる受け止め方をしていた事が伺われ、私はその点に興味を持ちました。さて、その憲秀謀判の一件ですが、私は、秀吉からの誘いに乗ろうとしたのは事実だったと考えています。しかし、それは、主家北条家に対する謀判と云うよりは、北条家の存続を考えた行動だと見ています。結果的には謀判(内通)が露顕し、失敗したため主家を裏切った悪人のイメージで語られますが、これはよくいう「歴史は勝者が書いた勝者の歴史」になっています。】と述べられています。

松田憲秀内応説についての高村不期氏の説

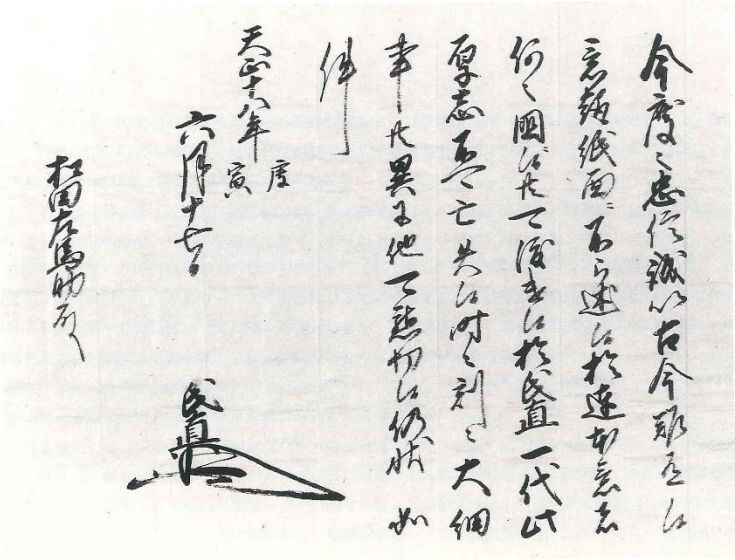
松田憲秀の裏切りは裏づけがあるか

既に秀吉の大軍に攻囲され、分国内の支城も次々に陥落していた状況である。徳川家康も敵方に付き、陸奥の伊達政宗も恭順し、籠城している北条方は、日本全土を敵に回して孤立していた。

通説では、重臣の松田憲秀とその長男の政晴が「これでは勝てない」と敵を城内に引き入れる計画を立て、羽柴秀吉から伊豆・相模をもらう約束を取り付けたという。実行の直前で、政晴の弟である直秀が氏政・氏直に報告し、憲秀・政晴は捕縛。事なきを得たとする。ところが、「北条氏直判物」を見て、何故文章が曖昧なのか、何か意味があるのではないかと考えた。

松田家の歴史

「北条氏直判物」（北条氏直感状）



「北条氏直判物」

天正十八年(1590)六月十七日　北条氏直、松田直秀の忠節を賞す

北条氏直感状

懸紙ウハ書

「松田左馬助殿」

今度之忠信、誠以古今難有候、」意趣紙面二不被述候、
於達本意者、」何之国二候共可渡遣候、於氏直一代此」
厚志不可亡失候、時々刻々大細」事共、異于他可懇切候、
仍状　如」件、

天正十八年庚寅

六月十七日　　氏直（花押）

松田左馬助殿

(読み下し)「この度の忠信、本当に古今ないことです。内容は紙に書かれません。本意を達したら、どの国でも(知行を)お渡しします。氏直一代において、この厚志は忘れません。時間が経とうとも些細なことでも、他とは異なり親しくします」松田左馬助殿

(解説)

実に模糊とした内容である。反乱が多数見られる今川家であれば、こんな曖昧な言い方はしていない。今川家であれば、次の様になる筈である。

「今度福島彦次郎構逆心、各親類・同心以下令同意処、存代々奉公之忠信、
最前馳参之条、甚以粉骨之至也」

また、「内容は紙に書かれません」の部分の原文も少し違和感がある。通常であれば「難尽紙面候」と書くものを「紙面不被述候」としている。「書きつくせない」ではなく、「書くに書けない」という意味が込められているようだ。

直秀が自ら主犯となって罪をかぶり、北条氏直をかばった可能性が考えられる。氏直の祖母・義母の死、側近の拘禁を受けてなお氏直が活動できたのは、直秀が隠せる部分は隠し通したからとしか思えない。口を割らなかったからこそ氏直の開城工作は続けられ、開城となった。

憲秀の内応を直秀が告発したと言われて来たが、直秀を直長が告発したものと考える。北条氏直の妻は徳川家康の娘であり、家康から情報が入って来ても不思議では無い。氏照と氏政が一番鋭く豊臣との決戦を主張し、氏直や氏規等は家康を通した和平を望んでおり、

松田家の歴史

氏直が主戦派の氏政や氏照に内緒で行っていた開城工作を氏政・氏照らが気付き、氏直の近辺を調べ上げたに違いない。そうした中、16 日に松田の弟の証言によって状況が判明し、告発された「松田」は拘束される。
この時の様子を城外から見たのが家忠日記の 6 月 16 日項である。
（冒頭に挙げた奇妙な氏直書状は翌日の 17 日の日付）。
「城中ニ松田調儀候へ共、弟返忠候てちかい候、松田成敗ニあい候由候」
「松田成敗」とあるが、これが即座に死刑を表わすことは限らず、『処罰』を指すケースが多い。「松田」は拘禁された可能性が高いように思う。
そして、直前までの北条氏直の動きを見る限り、「松田」が単独で動いていたとは考えにくく、氏直の指示で開城工作を行なっていたと考えた方が自然である。氏直こそが調儀の主役だった。氏直に忠節を尽くしていたのが直秀である。その為、感状には「紙面不被述候」としている。「書きつくせない」ではなく、「書くに書けない」という意味が込められている。事情を知る氏直があの奇妙な感状を送ったと考えると、曖昧な文章にも合点がいく。氏直が直秀に宛てた感状を改めて見てみると、氏直の身代わりとなって軟禁されていた直秀に「事情は判っている。恩に着る」と告げたかったように解釈が導き出される。
　憲秀が「松田」だった場合、弟ではなく息子に告発されたことになり、直秀への感状も、氏直から明確に忠節を賞されたものになる筈である。従って、この感状の内容からは「松田」は直秀であり、弟とは直長である。そして調儀の主役は北条氏直であった。
　直長は 28 歳で、直秀の又従兄弟ではあるものの「弟格」にはなるだろう。父康長の率いた兵は山中城で失っているから余力はなかったはずで、本家の直秀に陣借していた可能性が高く、その動向を見知っていただろう。
直長の心情を考えると、兵力差から到底勝てぬと判っていながら最前線に立って死んだ父がいて、その一方で、堂々と開城交渉をするでもなく、秘密裏に工作している氏直・直秀がいる。父の壮絶な死を茶番の前座にしないためには、告発は当然の流れだったのだろう。
　一方、小田原合戦後の直長はどうかというと、氏直らとは完全に別行動をとっていた。文禄 4 年(1595)に徳川家康旗本となり父の知行である相模国荻野郷を給されている。後北条時代の本領が安堵されたのは珍しく、父の奮戦と自身の内応阻止が評価されたのではないかと思う。
　氏直は 4 月下旬頃から、直秀に出していたと同じ様な感状を上田氏、木呂子氏、林氏に対して駿河、上野、甲斐を与えるので頑張るようにとの内容で出している。この他にも多数の同様の感状を出していたとの予測が出来る。
4 月 26 日　氏直が木呂子氏に、戦勝後は駿河・上野の知行を与えると約束
4 月 29 日　氏直が上田氏に、戦勝後は駿河・甲斐の知行を与えると約束
6 月 01 日　氏直が林氏に、戦勝後は駿河・上野の知行を与えると約束
「其書状写」（古今消息集六）
「芳翰并御使者口上之趣、即殿下へ令披露処、尤忠節之段、悦思召候、然ハ伊豆相摸、永代可被扶助旨候、弥被極御分別、重而誓紙等之儀、委御沙汰候て、頓而可被仰越候、恐惶謹言、六月八日
後筆：北条家老松田尾張守政賢反逆ニテ秀吉へ内通ノ答、態タガヒノ名字ナカリシト云ゝ」
「ご書状とご使者の口上の内容、すぐに殿下へ披露いたしましたところ、もっともな忠節であるとお喜びになりました。ということで伊豆・相模は末永く扶助されるとのことです。ますますご分別を極められ、重ねて誓紙などのことを詳しくご処理いただき、すぐに仰せになるでしょう」

この文書は差出人と宛名が失われており、従来は羽柴秀吉から松田憲秀に宛てられたものと解釈されてきた。しかし、家臣筆頭とはいえ 2 カ国を得るような約束を憲秀が得られるものだろうか。ちょうどこの頃の氏直は開城に向けて邁進している点からも、これは氏直が得たお墨付きだと考えるのが自然であり、「後筆」の内容は誤りである。
しかし、この開城交渉は内々で行なわれたため難航する。岡田利世(織田信雄家臣)が「氏直様御壱人」としか話していなかったと証言しているように、その席に氏政・氏照らはいなかった。だからといって厳密に秘した訳でもない。氏直は信定に開城のことを縷々告げており、4 日後の 12 日には以下の状況になっている。
「北条氏直覚書写」（東京都目黒区尊経閣所蔵小幡文書）
「覚。一、扱之様子之事。一、扱之取沙汰ニ付而、諸役所油断之由候、改而堅固之仕置肝要候。以上、
六月十二日
［貼紙］「調」朱印
小幡兵衛尉殿」
「覚書。一、和睦交渉の状況のこと。一、和睦の噂について諸部隊が油断しているとのこと。改めて堅固(けんご)な指示を出すのが大切なこと。以上」
このように城内で変な噂が出回っていたというが、その日に氏政の母と妻が亡くなる事件が発生する。同日ということから自害したと考えられているが恐らく彼女たちは氏直の近くにいてその動きを察知し、諫死したと思われる。ここに来て、城内各所にいた氏政・氏照らは異変に気づき、彼らは氏直の近辺を調べ上げたに違いない。そうした中、16 日に松田の弟の証言によって状況が判明し、告発された松田は拘束される。（岡田利世を城内に手引きした垰和善七郎（豊繁）も拘束されたものと思われる）
以上をまとめると、城内で極秘に開城工作を進める氏直は、情報を祖母と継母に知られてしまい、彼女たちの自害を招いてしまう。そして側近の直秀を、従兄弟の直長が告発し直秀は拘禁される。黙秘を続ける直秀に氏直は感謝の書状を送りつつ、開城へ向けて準備を進め、ついに滝川雄利の陣所に駆け込んだ。
また、余湖浩一氏は『北条五代記』や『北条記』などについて疑問点を多数記述している。一例を挙げると次のようである。
「三増峠の戦いのおかしなところ」
北条軍が武田と戦い大敗した三増峠の戦いの記述でも、「五代記」では、北条の先陣が武田軍に破れただけで、その後北条氏康・氏政がやっと先陣に到着したが、すでに武田軍は相手になることをせずに退いていったというように記述してある。氏康が戦えば北条軍が当然勝ったはずなのに、武田が戦わずに去っていったと言わんばかりの内容である。この戦いについても、本当に氏康が直接参加して敗軍していないのかどうか、検討の余地があるように思われる。（確かにこれと同じことは史料の上からも見ることができる。（「相武境三増山地迄進軍候、敵手早取越間、当旗本一日之遅〃故、取遁候」（上杉謙信宛の北条氏康書状・戦 1321）　一方、同時期の氏照書状では「武田の兵をさんざん討ち取ったが、信玄一人を討ち漏らしたのが残念」（敵押崩、宗之者数多討取候キ・・・・・今般信玄不討留事、無念千萬ニ候（河田伯耆守宛て北条氏照書状・戦 1325）といかにも圧勝したかのように書いてある。この戦いは実際は武田が勝利しているのだが、書状はそれを伝えてはいない。書状は一級史料とはいえ、自分に都合よく書かれているので、そのまま信用できない面もある。）

松田家の歴史

童門冬二著『名補佐役の条件』より一部を抜粋

童門冬二氏は歴史小説家、本名太田久行氏、東京都企画調整局長、政策室長などを歴任し、1979 年に作家として独立。第 43 回芥川賞候補、勲三等瑞宝章受章。

松田憲秀～小田原評定を
**　主人の北条氏直とともに演出したナンバー2**

豊臣秀吉の小田原攻め：

・・・秀吉に標的とされた北条氏は、当時五代目の当主氏直がそのトップに立っていた。彼は、19 歳で父氏政から家を譲られた。秀吉にターゲットとされた天正 15 年には、彼は 26 歳だった。そして、そのナンバー2 として補佐役の筆頭を務めていたのが松田憲秀である。・・

小田原評定と松田憲秀の意見：

北条側でも、どう対応すべきかを、小田原城ですぐ会議を開いた。天正 18 年（1590）1 月 20 日のことである。その 10 日前に、豊臣軍は動員を完了していた。小田原城に集まったのは、当主の北条氏直を中心に、後見役としての父の氏政、そして一門の北条氏照、氏邦、氏規、氏忠、氏尭などがズラリと並んだ。これに一族の太田氏が脇に座る。そして、筆頭家老の松田憲秀などナンバー2 がズラリと控えた。

一門の中では、北条氏邦が主戦論者であった。籠城するのではなく、城を出て堂堂と東海道で豊臣軍と戦おうということだ。・・・

これに対して、

「わたくしは、反対です」と手をあげたのが松田憲秀であった。みんな変な顔をした。というのは、その座にいた者のほとんどが、北条氏邦の作戦を良策だと考えたからだ。どよめきが起こった。全員が半ばとがめるような視線を集中させるのに対して、松田憲秀はそれを平然と受けとめながら、こういった。

「箱根の山を敵が越えることはできないと思います。また敵は、攻撃軍を各地方に分散しています。まとまりがありません。同時に、いま氏直公が仰せられたように敵は烏合の衆で、忠誠心という点においては当北条家にかないません。また、戦線が各方面に長く伸びているので、やがては敵は兵糧や弾薬が欠乏いたします。それに対して当小田原城には、数年間籠城してもひとつも困らないほどの兵糧や弾薬があります。この際は、韮山と山中のふたつの城を前線として、各部将はそれぞれ自分の城を守る方法を取るべきだと思います」・・

この松田の案に対して、その座にいた人々は動揺した。つまり、はじめからぐらついていたのである。というのも、大将の北条氏直自身がぐらついていたのだ。この会議の前に、松田は氏直とふたりだけの秘密会議を持った。そして、「天下の空気をよくご覧ください。日本は、すでに豊臣秀吉のものです。これに逆らうことはできません。その証拠に、あなたの岳父の徳川殿も、すでに小田原を見捨てて秀吉殿のもとに走ったではありませんか。しかも、今度は攻撃軍の先鋒に立っています。以前なら秀吉様と和を講ずべき時期があったかも知れませんが、いまさらそれをいってもはじまりません。このうえは城を守れるだけ守り、攻撃に手を焼いた豊臣軍が、和を申し出てくるのを待つべきです。そして、北条氏を高く売りつけ、有利な条件で講和するのが最も良い策だと思います。小田原城を捨てて、討って出るなどというのは下の下です」そういうことを吹き込んでいた。氏直は、松田のいうことにも一理あると思っていた。彼もまた徳川家康からいろいろな情報を得ていたから、ここでがんばってみても、結局、豊臣秀吉は小田原城を落城させるであろうという嫌な予感を持っていた。それなら、確かに松田のいうように、がんばれるだけがんばって、チャンスを見て有利な条件で講和したほうがいいか

も知れない、と考えていた。そういう考えが心の底にあるものだから、どうしても決断が下せないのである。
会議はずいぶん長びいたが、結局、まず後見人の北条氏政が松田を支持した。そこで氏直も、決断した．「作戦は、籠城と決定する。韮山、山中の両城の守りを固め、各部将はそれぞれ自分の城に戻って応戦してくれ」いっせいに「オォ！」という声はあがらなかった。受け取り方がマチマチだったからである。その意味では、すでに豊臣軍のほうがそういうことも含めて、北条一門が一枚岩になっていないということを見抜いていたのは、正しかった。しかし、松田憲秀は、なぜ積極作戦に反対したのだろうか。このときの彼の態度から、「松田はすでに秀吉から手を伸ばされ、北条氏を裏切っていた」といわれる。
　このへんの裏切り者への評価というのはむずかしい。裏切り者といって一蹴してしまうのはたやすいが、やはり大名家というのは、「家の存続と、そこで働いている人たちの生活の安定」ということを考えないわけにはいかない。いくらトップやトップの一族が悲壮な決意をして気勢をあげても、部下の全員がそれについていくかどうかわからない。まして、下層の人間ほど生活不安を持っている。無益な戦いをやめて、いままで通りの給与がもらえるなら、そのほうがいいと考える者もいる。トップの北条氏直も、そのへんのことは十分心得ていた。松田がいう通りだろうと思った。「たとえ局地戦で豊臣軍に勝ったとしても、秀吉様は絶対にあきらめません。必ず、また来ます。そのときは、さらに大軍となって、こちら側はメチャメチャにやられるでしょう。制裁はひどくきびしいものになると思います」このへんは、伊達政宗に対して伊達成実が、「豊臣軍と戦うべきです」といったのに、片倉景綱が、「いや、ハエはうるさいものですぞ」といったのと同じだ。つまり、片倉景綱にしろ、松田憲秀にしろ、このころはすでに豊臣秀吉の実力を知って、とうていかなわないということをわきまえていたのである。時代はすでに豊臣秀吉のものであった。それが、いわゆる時代の空気であり、また潮流なのだ。逆らっても、必ず流される。それよりも無益な戦いをやめて、家と従業員の生活の安定をはかったほうが、はるかに利口だと考えていたのだ。この時代の目先のきくナンバー２は、みんなそう考えていた。したがって、同じ考えに立つ片倉景綱を名ナンバー２といい、松田憲秀を裏切り者だ、というのは当たらない。その点は、北条氏直もトップとしてよく知っていた。その意味では、北条家の中でも北条氏直はふたつの性格を持っていた。つまり、北条一門という形式的なナンバー2 群を抱える氏直と、松田という実質的なナンバー2 を抱える氏直という、二面性を持っていたのである。だから、このときの氏直は、ふたつに分裂している自分をどうひとつにまとめるかに苦慮したのだ。・・・

「妙策」と信じた裏切り：

　松田の献策によって、北条家は小田原城に籠城と決めたが、ちょっと予想しないことが起こった。それは、豊臣秀吉のほうも気長な攻撃をはじめたことだ。一挙に小田原城に攻めかからなかった。彼は、分散している北条の支城を次次と落とした。そして、小田原城を孤立させた。そうしておいて、大軍をもって小田原城を囲み、そのまま攻撃の手を休めてしまった。攻撃軍は、それぞれ各地から商人や女たちを呼んだ。物や酒を売らせ、また踊りや博打に興じた。なかには付近を耕して、野菜を植えるようなのん気な兵士も出てきた。小田原城内の兵糧が尽きるのを待つという作戦である。小田原城内にも、松田憲秀の意見で、そういう店や、いろいろな娯楽用品が設けられていた。彼は氏直に、「城の各口に配置された兵は、そこだけを守るようにして、ほかの口が攻撃されていても、絶対に応援に行かせないようにしてください。それぞれの分を守るのです。ほかの口が攻撃されていても、よその口は、むしろ将棋でもさしているくらいのゆとりを持たせてください」と進言した。これも変わっている。しかし、その精神をよく理解した氏直は、松田の言に従ったその意味では、このときのトップの氏直は、完全に松田と気持ちを一致させていた。

しかし、豊臣秀吉は、このふたりをそんな次元ではとらえない。あくまでも裏切らせてやろうと考えていた。したがって、しきりに手を伸ばしてきた。次々と使いが松田のところに来た。「秀吉公は、もし攻撃軍の一部を、城の中に引き入れてくれるのなら、あなたに伊豆と相模国を差し上げると申しております」そういう誘いをかけた。松田憲秀は、延々と続く籠城にそろそろ嫌気がさしていた。それというのも、その間にもまだ集まっては、「このまま籠城を続けるべきではない。討って出るべきだ」とか、「いや、このまま籠城を続けるべきだ」と、際限のない論議を繰り返している北条家の幹部に嫌気がさしていたのである。つまり、のちにいう「小田原評定」にあきれていたのだ。その気持ちは、トップの北条氏直も同じだった。ある夜、松田は自分の息子たちを呼んだ。そして、「おれは、豊臣軍に内応しようと考えている」と告げた。長男は、「賛成です。このままでは北条家もジリ貧で、いまにのたれ死にします」と応じた。が、次男は、「そんな武士にあるまじきことはできません。籠城を主張したのは父上ではありませんか。全員が死滅するまでがんばるべきです」
といった。松田は弱ったなと思った。息子たちの意見がこう割れてしまっては困るのだ。そこで、次男を一室に閉じ込めて、内応のしたくにかかった。ところが、この次男が閉じ込められた部屋から脱出して、このことを北条氏政に訴え出た。氏政はびっくりして、松田憲秀とその長男を逮捕した。結果からいえば、松田憲秀の裏切りは失敗したのである。これが豊臣軍に洩れた。・・・そして北条氏直は、徳川家康の娘婿だというので命を助けられ、高野山に追放された。一緒に行ったのは北条氏規、氏忠、氏勝たちである。家臣としては、松田憲秀の次男がついていった。数百人の兵が一緒に行ったという。・・

小田原城に対する豊臣軍の攻撃という未曾有の事態に対して、ナンバー2 だった松田憲秀の考えを、彼がそのときにどう評価していたのかわからない。しかし、少なくとも、（おれは、決して間違ってはいなかった）と考えていたことだろう。その意味では、**こういう時期におけるナンバー2 としての松田憲秀の意見も、一概に裏切り者であったというわけにはいかない**のだ。

北条氏からの偏諱

偏諱（へんき）とは、将軍や大名が、功績のあった家臣や元服する者に自分の名の一字を与える事で名誉な事であった。

盛は伊勢盛時（北条早雲）の偏諱、
　松田盛秀、
康は北条氏康の偏諱、
　松田康郷、松田康隆、松田康吉、
　松田康定、松田康長、
直は北条氏直の偏諱、
　松田直秀、松田直長、

山中城祭りにて 伊藤潤氏（作家） 松田邦義

松田家の歴史

松田直秀、（～1614 年）**松田家 11 代** 左馬之助・**四郎左衛門・直憲・憲貞・鉄斎**・憲定
父：憲秀　母：不詳、元和元年(1614)7 月 23 日没

1589 年、**松田憲秀**、家督を子の**直秀**に譲り、**松田直秀**が相模国加山（小田原市）小沢二郎左衛門尉に、父**憲秀**が当村を隠居分として宛行われ、今後の諸公事や御用は父から引き継いだ**直秀**朱印状で申し付けると伝える。
（小沢文書）

1589 年、**松田直秀**が武蔵国横手（日高市）山口重明に、前項同様に伝える。
（大江氏所蔵山口文書）

1589 年、**松田憲秀・松田直秀**が土岐義成に覚書を送り、北条氏政を京都に上洛させるため上洛の軍勢と費用を分国中の者に賦課すると申し渡す。
（安得虎子）

1590 年、**松田直秀**、相模国塚原（南足柄市）長泉院へ禁制を掲げ、寺中での殺生を禁止し、寺山での木草伐採には本道を往復させ、脇道に入り伐採する者は処罰する事。寺領として塚原内の板屋ヶ窪で 1 貫 500 文を安堵し、諸役を免許する。（長泉院文書）

1590 年、**松田直秀**、相模国塚原（南足柄市）長泉院に寺領として中沼之郷（南足柄市）内 5 貫文を寄進し、代官の池田出雲守に断り、田畠を受け取らせる。
（相州文書）

1590 年、北条氏直、**松田直秀**の忠節を賞す。北条氏直感状。

1590 年、**松田直憲が**紀伊國高野山高室院に、小田原開城で北条氏家臣等は窮乏している等を伝える。（高室院文書）

1590 年、北条氏直が北条氏規・北条氏忠・北条氏房・北条氏勝・北条直重・北条直定等の一族衆と**松田直憲**・大道寺直繁等の家臣 30 人と随兵 300 人と共に小田原から紀伊國高野山に向かう。（家忠日記）

1597 年、**松田直秀**、**四郎左衛門憲貞**と名を変え前田利家に 4000 石で召し抱えられる。

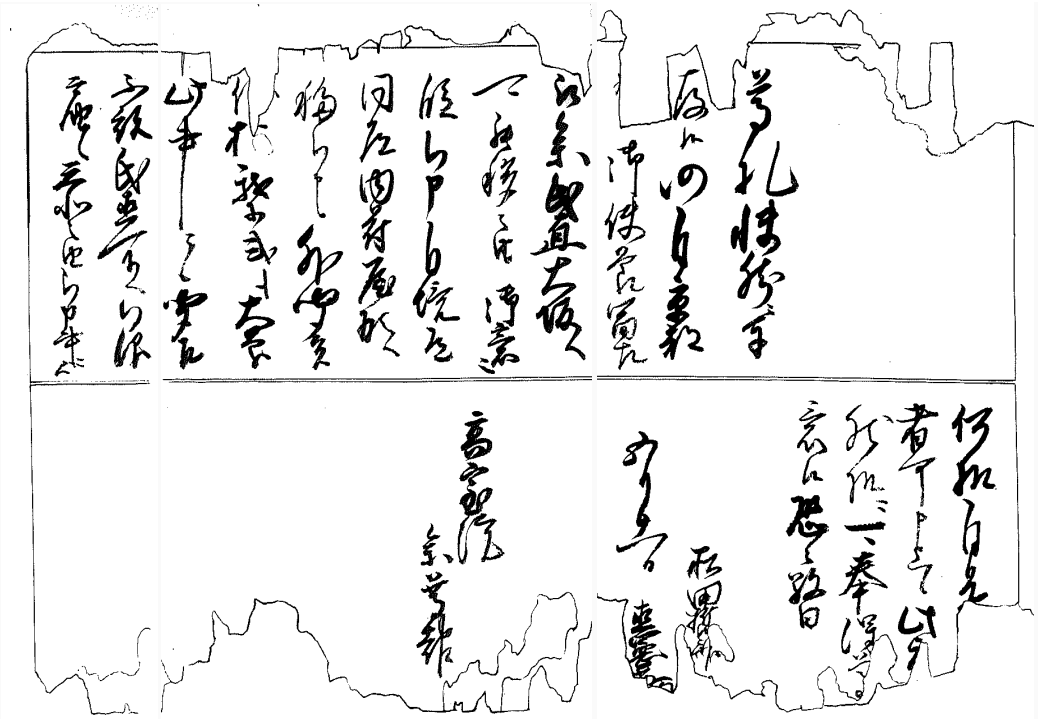
1599 年、**松田憲貞**、御普請奉行として高山右近の配下にて金沢城の惣構を造る。
前田家家臣一万石大峪城主片山延高を徳川家康に内通したので油断しないようにとの前田利家公遺言により、利長公の命で、石川左源太と共に大阪で上意討ちする。

直秀の直は北条氏直公の偏諱。1583 年憲秀より家督を相続。直秀は「松田直秀朱印状」「松田直秀判物」等を書き残しているが、直秀は北条氏直公に仕え、小田原開城後は氏直公のお供をし、紀伊国高野山に家来筆頭として同行した。直秀は北条家の再興に奔走し、氏直公は翌 1591 年下野足利等で一万石の大名に取り立てられ、秀吉はさらに翌年伯耆一国、十万石の大名に取り立てようとする意志を示したが、氏直公の突然の病没に遭って望みは絶たれてしまった。直秀は氏直公より 1591 年 6 月 17 日に感状を賜っている。直秀は氏直公病没後一時、関白豊臣秀次に仕えたが、関白没後に加賀藩前田利家公在世中に子息の前田利長公より加賀藩に召し出され 4000 石で召抱えられた。直秀は父憲秀を尊敬していたとみえ、父憲秀の憲の文字を自分の名に使用し直秀は四郎左衛門憲貞と改名した。子供達にも憲成・憲次と憲の文字を使用し、その後子孫達の多くが憲を用いている。
1599 年前田利家公家臣片山延高は一万石大峪城主であったが、徳川家康と通じた。利家公遺言状には片山延高に謀判の気配があり、油断しない旨書き残されており、直憲は片山

延高(伊賀)を利長公の命により石川左源太と共に利家薨去八日目の閏三月十日に大坂の宿所で上意討ちした。(片山延高上意打ちは四郎左衛門憲郷説有り)また憲貞は大阪夏の陣では鉄砲大将を務めた。その後、前田利常公に命ぜられ公儀御普請のため、御普請奉行として越後の国に赴き、1614 年 7 月 23 日同地で病没した。

(115)　天正十九年(1591)五月十一日　「松田直憲書状」高野山高室院文書

松田直秀、高野山高室院に、北条氏直の大阪転居を知らせる



尊札快然ニ奉存候、仍自京都■御使節富左彼参、氏直大阪へ可能移之由、御意之段被申、自境道同道、内府屋形へ移被申候、外聞実■、於我等式も、大慶此事ニ候、聞召不絶氏直所へ被仰届候、忝之由被申事ニ候、何様自是■■■者可申上候、此旨■然様ニ可奉得尊意候、恐々敬白、

五月十一日

　松田哲斎　直憲（花押）

高室院　御尊報

(解説)

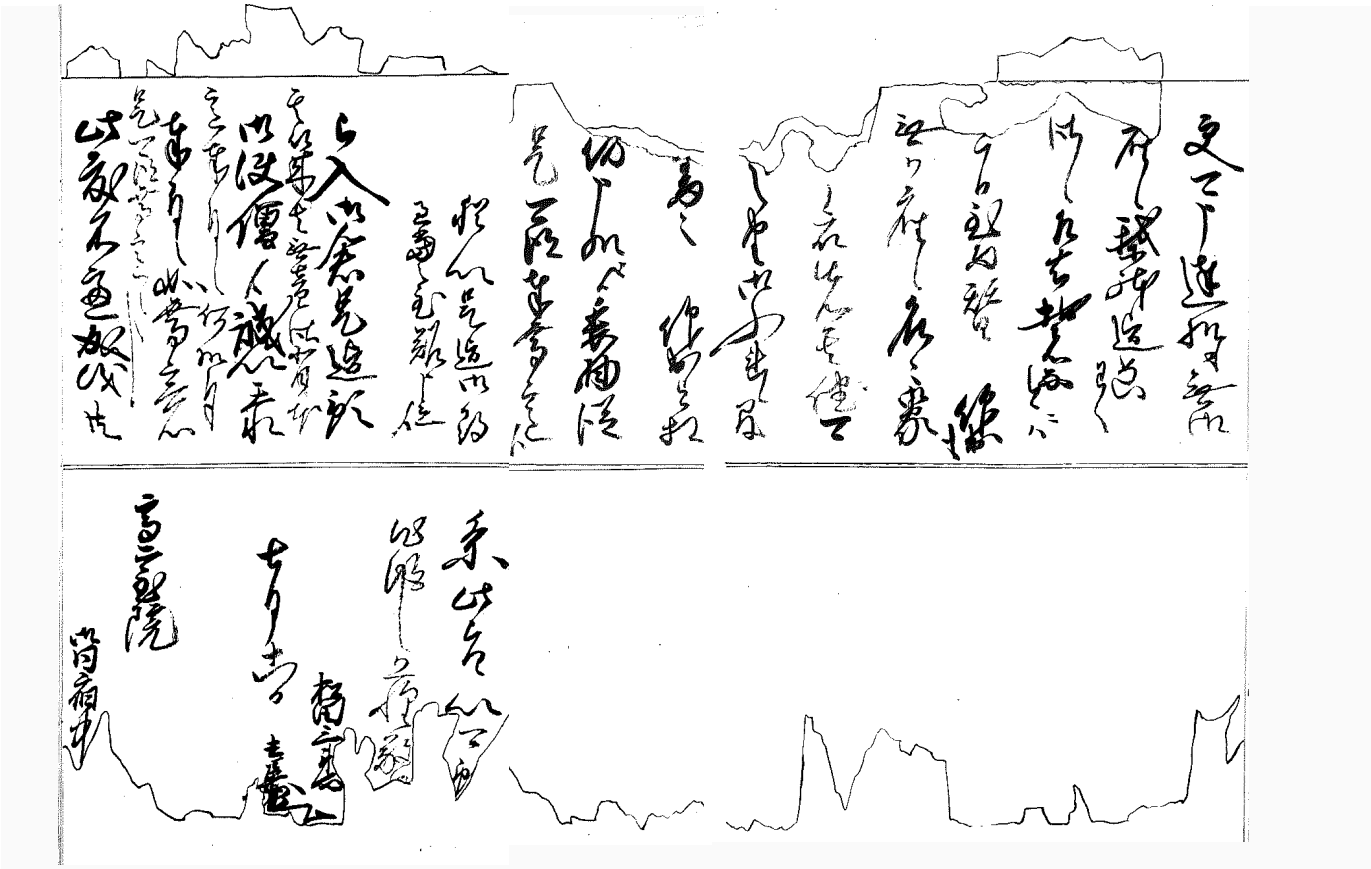
　ご書状快然に存じます。さて京都よりのご使節である富田知信が参られまして、氏直が大阪へ移りたいこと、ご許可があったとお知らせ下さいました。堺より道を同行して内府の館へ移るとおっしゃっています。外聞にしても実態にしても、私めにとっても大慶とはこのことです。要望はないかと絶えず氏直のところへお伺いいただき、ありがたいことだと申されています。何れにせよ、こちらから□□（お礼？）を申し上げるでしょう。このことはしかるべく尊意を得られますように。

直秀は憲秀の憲を使用し、直憲に改名している。

　富田知信：秀吉家臣　伊勢国安濃津城主　5万石。

(116)　天正十九年(1591)七月十八日　「松田直憲書状」高野山高室院文書

松田直秀、高野山高室院に北条氏直からの指示がないことを伝える



猶以、是迄御尋、過当之至、難申上候、其以来者、無音信、背本意奉存候、何様自是可得尊意候、かしく、

被入御念、是迄預御使僧候、誠以忝奉存候、如尊意、此度不慮成儀共、更可申達様も無御座候、我等躰迄めいわく仕候、乍去、拙者なとニハ■日至而、替仰出も無御座候、名ゝ御家■■候故、先其侭可■■之由、御ふれ候間、■■面ゝ仰出旨相待申処ニ候、委曲従是可得奉尊意候条、此旨以可■■心得候、恐惶敬白、

七月十八日

松田三衛門尉　直憲（花押）

高室院　御同宿中

（解説）

念を入れてこちらにご使僧をお預けいただき、本当にありがたいことです。仰るように、この度思いがけないことになりましたが、これにご指示が出る様子もありません。私のような者まで困惑しています。とはいいながら、私などには今日に至っても代わりのご指示はございません。それぞれお家に□□（忠節？）したから、まずはそのまま□□（待機？）するようにとのこと、周知がありましたので、□□（再出仕？）する面々のご提示を待っているところです。詳しくはこちらから尊意を得るようにいたしますので、このことをお心得ありますように。

さらにもって、これまでお尋ねいただいたのは過分なご配慮で、申し上げにくいところです。それ以来は連絡もなく、本意ではありませんでした。どうか尊意を得られますように。

直秀は憲秀の憲を使用し、直憲に改名している。

松田家の歴史

「北条夫人」「相模御前」(1564~1582)　武田勝頼の正室と松田家

松田憲秀の娘は北条氏康公の側室（松田殿）となった。その娘（氏康公の六女）は「桂林院」と称し、北条氏と武田氏の同盟の為に 1577 年 1 月 22 日武田勝頼の正室として嫁いだ。南松院旧蔵所蔵の快川和尚の書き残した「字説蘭渓」という文書の中で、北条夫人について「家語に曰く、善人と居るは芝蘭の室にいるが如し、久しくしてその香を聞かざるも、自然これと化す。善人あに異人ならんや、淑女君是なり」と書いている。これは「北条夫人は高貴で気高い人柄で、周囲の人に良い影響を与える淑女であられます」という意味である。1582 年 2 月 19 日に北条夫人は夫の勝頼の為に武田家の安泰を願い、武田八幡宮に願文を奉納している。
しかし、武田勝頼は織田信長と徳川家康の進攻にあい、天目山近くの田野で、織田信長家臣滝川一益に発見され、北条夫人、嫡男信勝と共に 1582 年 3 月 11 日に自害した。
勝頼の家臣安西伊賀守有味は北条夫人に小田原城に帰る様説得したと云う。

北条夫人の辞世の句（歌人名　らんけい）
「黒髪の乱れたる世ぞ果てしなき思いに消ゆる露の玉の緒」
「帰る雁　頼む疎隔の言の葉を　持ちて相模の国府（こふ）に落とせよ」
北条夫人法名：
「桂林院殿本渓宗光」（1583 年兄北条氏規が高野山高室院(北条氏菩提所)で供養）
「北條院殿模安妙相大禅定尼」（1588 年景徳院（勝頼公一行の墓所）の位牌）
「陽林院殿華庵妙温大」(1588 年法泉寺（勝頼公の菩提所）の位牌）

北条為昌娘――松田**盛秀**(9 代)
　　|
松田**憲秀**(松田家 10 代)
　　|
秀也　女　**直秀**　女――北条氏康
津久井城主　(松田殿)
(内藤綱秀正室)　**北条夫人**(桂林院)
(武田勝頼正室)

北条夫人生害石

北条夫人墓石(右)
武田勝頼墓石(中央)
武田信勝墓石(左)

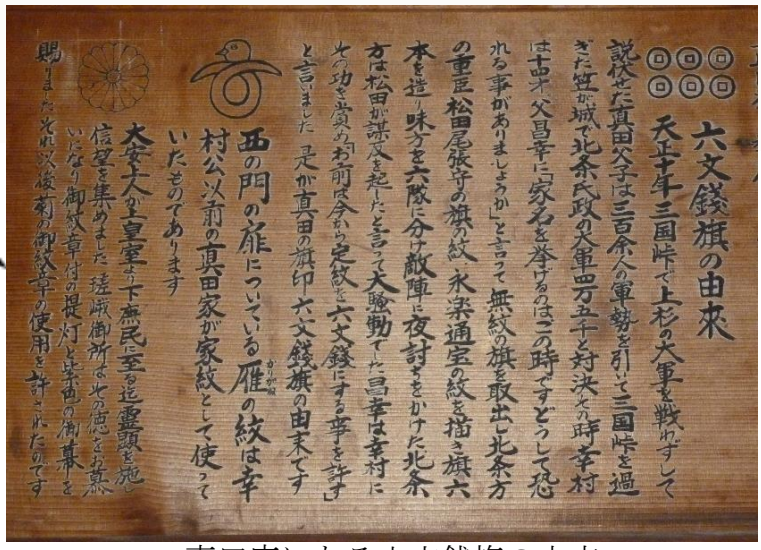
景徳院本堂

松田家の歴史

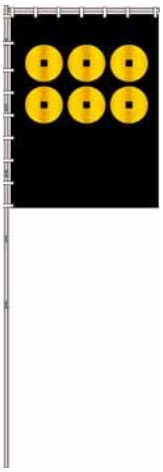
真田幸村の六文銭と松田家「六文銭旗の由来」

九度山真田庵（関ヶ原の戦いに敗れた真田幸村が父と住んだ里）にある六文銭旗の由来。
天正十年（1582 年）武田勢は織田・徳川連合軍に天目山の戦で破れ、武田勝頼は自刃、武田氏の家臣であった真田昌幸は、あとを追って天目山に馳せ参じたが間に合わなかった。昌幸の軍は上田に引き返す途中、徳川・織田の連合軍のほかに、三国峠付近で北条軍の 45,000 の大軍と遭遇。その時の真田軍は僅か三百余、昌幸は進退窮まった。絶体絶命の時に 14 歳の真田幸村は何も書いていない無紋の旗を六本取り出してきて、北条氏の重臣松田尾張守の旗印である永楽通宝の銭形を描いた。味方を 6 隊に分け、永楽通宝を描いた軍旗を翻して敵を欺き撤退に成功、無事上田へ引き揚げた。感激した父の昌幸は幸村の初陣の記念に、真田の紋所を六本の永楽銭にちなんだ六文銭に改めている。この話は「絵本真田三代記」に記載されていた。また、無紋銭を三枚ずつ二列に並べた形は、仏教の六道（地獄・飢餓・畜生・修羅・人間・天上）からきているとも云われる。
死者が渡る三途の川の渡し銭が六文なので、死者はあの世に旅立つとき、六文銭を棺の中に入れてもらう。戦国の世、常に死を覚悟して戦う幸村には恰好の定紋となった。
（但し、松田家の軍旗に永楽通宝が使用された記録は未確認である。松田家の家紋「二重直違い」を丸で囲んだものを遠くで見ると永楽通宝に見えた可能性もある。）
六文銭は真田氏の先祖の海野弥太郎が鎌倉時代に使用していたが、真田幸村の父、真田昌幸は「結び雁金」を定紋としていた。（真田氏は名家海野氏（滋野氏流）の分家となっているが、この系図は後世になって家系の粉飾が行われものとの説もある。）

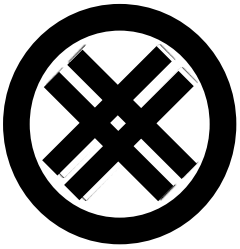
結び雁金



真田庵にある六文銭旗の由来



永楽通宝


現在の松田家の家紋

松田家の歴史

松田一族と城

小田原城　日本 100 名城、 神奈川県小田原市城内 6-1

北条氏の居城として関東支配の中心拠点となった城。小田原城は現在の城郭の約 10 倍の広さがあり、総構え 9 ㎞と大阪城 7.2 ㎞より大きく、戦国随一の居城であったという。北条氏は次々と領土を広げ北条氏政公の頃には関東地方の殆どを領し、その所領と動員力は最盛期の武田氏、上杉氏を上回り、その領国経営は早雲公以来、直轄領では日本史上最も低いと言われる四公六民の税制をひき、飢饉の際には減税を施すといった公正な民政により、安定した領国経営を実現、100 年の善政は領民の人心を捉え、戦国大名の中でも比類なき成功を治めていた。小田原は交通も便利、富士山からの伏流水にも恵まれ、漁場にも恵まれた。石高は 265 万石、城代家老は**松田憲秀**であった。秀吉は小田原城に旧北条氏が再結集する事を恐れ、江戸城を建築中に小田原城の本丸は残したが、外郭や本丸以外の建物を破壊した。又、秀吉や多くの大名は京都の御土居を始め、駿府城、岡山城等に小田原城の城郭様式を取り入れた。

小田原城

二の丸隅櫓

銅門

常盤木門

小峰の大堀切

蓮船寺間堀切

松田家の歴史

松田城　神奈川県足柄上郡松田町庶子字城山 3113。

松田城は 1170 年頃には既に在ったようであるが、**松田康隆**が 16 世紀中ごろに築城し、**松田新次郎**等の居城であった。1989 年東海自動車道改築松田町跡調査会、松田城址発掘調査会が発掘調査の報告書を作成した。

報告書の「松田城址」は A4 版、本文 92 ページ、写真 61 図版に及ぶものである。残念乍ら高速道路の工事によって松田城趾は形を変えてしまった。

北方から見た松田城跡

松田城の堀切跡

松田城跡からの眺望

松田城跡地形図（寒田神社蔵）

松田城跡主郭部

松田城址先端付近の説明板

寛永通宝
百文差し

1 文銭

4 文銭

松田家の歴史

浜居場城

神奈川県南足柄市内山。**松田憲秀**が築城した城。
「相模風土記」には「字城山と唱う。東西北の三方に堀跡あり、長さ東西の二方四十四間、北方二十四間、南方は崖地なり、構内に広さ凡そ二反八畝に、櫓蹟二、廃井一あり。」と記してあって、須藤源次郎、村野安芸守、小沢孫七郎等が松田家に属し、代官としてこれを守っていた。

浜居場城山

浜居場城跡地形図　　原 明利氏作成

浜居場城址標柱

本城郭南西の竪堀

西郭群の喰い違い虎口

本城郭西の堀と土塁

松田家の歴史

湯ノ沢城

　神奈川県足柄上郡山北町中川。西丹沢山城群の一つ、
湯ノ沢城は北条氏が武田氏の侵攻に備えて築いた山城である。湯ノ沢城は北条氏にとって重要な城で、東西を沢に挟まれた屋敷の平と云われる山間の窪地に築かれている。またこの地は見張りにも適した地形である。松田憲秀の弟で松田城主でもある**松田康隆**が城主である。

湯ノ沢城の城山

湯ノ沢城主郭

深沢城　静岡県御殿場市深沢

北条氏が武田氏対策として 1569 年に築城した。北条綱成を城主として配置、
後に**松田康隆**が城主であった城。

深沢城跡碑

深沢城縄張図

松田家の歴史

苅野丸山城　南足柄市苅野

伊豆箱根鉄道大雄山駅の北西 4km、狩川南岸の小丘に築かれた丘城。
松田憲秀が築城した。南足柄市苅野岩の西南にある丸山は松田憲秀の本城であった。「新編相模風土記」の中に「村の西南丸山の頂を言う。高百間余、方十八間、廻りに空塹の跡あり、幅二間許り、相伝う、昔松田入道候楼を置し処と言う。」とある。
足柄峠に登る古道の途中、足柄神社の向かい側の山頂に築城。狩川沿いの要塞の地で、足柄峠などへの間道を監視した。

曲輪跡

竪堀跡

堀跡

苅野丸山城

原　明利氏作成

松田家の歴史

山中城

日本 100 名城 静岡県三島市山中新田

松田康長が城主であった城。北条氏康公により築城される。小田原の西の防衛を担う最重要拠点で、城は東海道を取り込む形で造られていた。

毎年５月の第三日曜日に「山中城まつり」が開催されている。

岱崎出丸の一の堀

障子堀

山中城祭り（作家伊東潤氏の熱演）

山中城祭り

松田家の歴史

戸倉城

静岡県駿東郡清水町下徳倉。笠原新次郎政尭が城主であった、戸倉城は北条氏綱公が築城した。1568 年～1571 年にかけて武田信玄と北条氏はこの戸倉城で戦った。又、1580 年武田勝頼は沼津三枚橋城に本拠を置いて戸倉城を攻撃した。北条方の城主笠原新次郎政尭はよく城を守ったが、1581 年武田方に寝返って城は武田方のものとなった。1582 年武田氏の滅亡と共に戸倉城は再び北条氏のものとなった。笠原新次郎政尭は伊豆一国と武田勝頼の婿にするという条件で 1581 年に武田勝頼に寝返ったが、1581 年といえば武田家が滅亡する前年で、既に武田家は落ち目になっていた。なぜそんな状態の武田家に笠原新次郎政尭は寝返ったのであろうか。直木賞作家、NHK 大河ドラマ「天と地と」の原作者、小説家新田次郎氏は小説「武田勝頼」の中で、「武田が滅んだ後、織田、徳川は必ず関東に兵を進めてくるに違いない！そうさせない為にはなるべく武田を長持ちさせることだ！従って北条氏政と松田憲秀は徳川を抑制する為に伊豆地方を武田に寝返りさせようと考えていた」のであり、笠原新次郎政尭が武田に降ったのは北条氏政の命によるものと信じていると記載している。又、笠原政尭が三島市の蔵六寺の僧になって 1679 年迄生きていた説が在るが、政尭反逆説も豊臣秀吉の流した戦略的流言であり、政尭は氏政公により密かに逃がされていた可能性も出てくる。またこれが真実だとすれば反逆者政尭は北条氏にとって忠義の臣であった事になる。

狩野川の左の山が戸倉城跡

戸倉城跡から見た狩野川

本城登り口

戸倉城跡

松田家の歴史

八王子城　日本 100 名城　東京都八王子市元八王子町

北条氏は氏照を武蔵国守護代滝山城主大石定久の娘と婚姻させ定久の養子となり、定久を隠居させ氏照が滝山城主となった。その後武田信玄軍二万に攻められた時に滝山城の防御体制が不十分であることを痛感し、八王子城を築城した。

松田憲秀は松田家の分家、康定の孫**松田四郎右衛門秀信**を大石定重の次男大石憲重の養子として、三男の大石定基には**松田源七郎照基(惣四郎)**を養子とさせ、大石氏を取り込み、氏照を補佐した。また松田康定の娘が大石定仲の室となり、直久を儲けた。
八王子城は関東屈指の山城であったが、未完成の内に攻撃され、脆くも落城した。

アシダ曲輪に架かっている橋

御主殿の滝

アシダ曲輪下の木橋

曳橋から三段石垣を見る

大石信濃守照基(松田惣四郎)は氏照側近、小山・祇園城代だったが八王子城本丸を守備。
氏照の信頼の厚かった横地監物吉信を城から逃がし、天正 18 年 6 月 23 日討死？
八王子城山頂付近の「小宮曲輪」には狩野一庵、「中の曲輪」には中山家範、「山頂曲輪」には横地監物と大石照基が守っていたが、中山家範と狩野一庵は曲輪の中で自害し、大石照基は討って出て討死したとされるが、八王子城で討死しておらず、松田惣四郎松庵と復姓し、結城秀康に 2300 石で召抱えられた説もある。（秀康卿給帳？）。また、攻めての前田勢は苦戦を強いられ、前田利家の家臣・青木信照ら 30 余名が討死した。

大石照基書状　天正 8 年 2 月 19 日　（小山市立博物館所蔵 大橋文書）
大橋播磨守に生井郷(小山市)を知行として宛行う。

大石照基判物　天正 16 年 11 月 28 日　（小島文書）
枝惣右衛門尉を小山領の鋳物師の司に任命し北条氏の御用を務める様に命じた

松田家の歴史

相模松田家一族と寺院

紅葉山（広養山）龍泉寺（曹洞宗）

神奈川県津久井郡青野原。龍泉寺は 1471 年**松田頼秀**が開基となっており頼秀の墓と位牌、鞍と鐙、「松田左衛門尉頼秀遺状」（写）が保存してある。

華嚴山 松石寺（曹洞宗）

神奈川県厚木市上荻野 4226。松田家分家一族の墓所、墓石群がある。憲秀の父の弟康定の子、**松田助六郎康長**の領地であったので、この寺を氏寺としていた。

室生山 般若院（真言宗）

神奈川県山北町岸 1640。

松田憲秀の祈願所、憲秀は寺領五貫文を寄附している。河村氏の菩提寺でもある。

松田家の歴史

上開山 極楽寺（臨済宗）　神奈川県南足柄郡苅野 782。

松田憲秀を中興開基としており、憲秀の二十五回忌の追福のために建立した供養塔がある。

玉峯山 長泉院　（曹洞宗）

神奈川県南足柄市塚原 4440。大森氏の菩提寺であったが、**松田憲秀**が保護を加えた寺院。憲秀が山林伐採禁制を命じた制札状と板屋窪一貫五百文を寺に寄附した朱印状二点がある。また直秀の証文も小田原戦役開始直前の天正 18 年 1 月 26 日と 3 月 20 日に発行した二通が現存されている。

松栄寺（真言宗智山派）

埼玉県北葛飾郡杉戸町椿 291

埼玉松田家開基寺。松田寺の末寺。

松栄寺

松田寺（真言宗智山派）

埼玉県北葛飾郡杉戸町佐左衛門 1294。

松田左京亮康吉を祖とする**松田佐左衛門信光**の開基寺。

松田寺

埼玉松田家墓石群

松田家の歴史

東月山普光院 宗閑寺（浄土宗）

静岡県三島市山中新田。山中城の三の丸跡にあり、**松田兵衛太夫重長（康長）**の墓がある。山中城合戦では山中城城主松田康長、副将間宮康俊、豊臣方重臣一柳直末等敵味方合わせて 8000 人～10000 人が討ち死にした。山中城副将間宮康俊の娘、於久は当時関東一の美女と噂されていた。暫くして於久は徳川家康に召し出され、家康の側室となり、四女松姫を儲けた。於久は幕府に宗閑寺建立を願い出ていたが 1618 年に駿府城で病没。於久と特に親交のあった了的上人（芝増上寺十四世上人）が宗閑寺開山の労をとり 1620 年に双方の武将達の菩提を弔う為山中城三の丸跡に宗閑寺を建立した。明治時代になり、一柳直末の子孫が宗閑寺を再興し、朽ちかけていた敵味方双方の墓を分け隔てなく整備し直した。

宗閑寺

松田康長の墓石

本照山 法光寺（日蓮宗）

石川県金沢市寺町 5-3-10

1581 年(天正 9 年)越中に創建、1597 年（慶長 2 年）金沢に移る。

1623 年(元和 9 年)に失火消失。**有賀松田家**の菩提寺で、墓石群がある。

文化五年(1808 年)の金沢市内地図には**松田寺**と記載されている。

法光寺

有賀松田家の墓石群

享保一分金　**元文一分金**　**文政二朱銀**　**嘉永一朱銀**　**安政一分銀**　**万延二朱金**

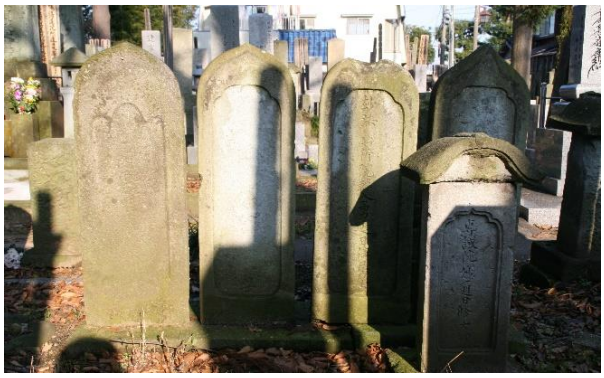
松田家の歴史

松田家の菩提寺

興冨山 本因寺（法華宗）

石川県金沢市寺町 5-2-15
1615 年(元和元年)に創建。建物は本堂、庫裏、山門。建物は江戸中期に建てられた。
本因寺門前には金沢市の立てた北条家重臣の子孫松田家の墓所を示す立て札がある。
松田家本家、分家の菩提寺で、84 名が眠っており、両家の墓石群がある。又、本堂の奥には松田家の仏壇が安置されている。

金沢市立看板　　松田家墓石群



松田家仏壇　　松田家仏壇

松田家の歴史

「雑学」☆☆☆

松田家の歴史

「金沢城の惣構（総構え）と松田四郎左衛門憲貞（直秀）」

金沢城の内・外二重の惣構（総構え）延長約 2.9 キロは、西内惣構堀は金沢城の旧金谷門付近から始まり、城の西側と北側を巡って主計町から浅野川に注いでいる。二代藩主前田利長公が高山右近に命じて慶長 4 年（1599 年）に造らせたと言われている。高山右近配下の**松田四郎左衛門憲貞（直秀）**は、父の憲秀が筆頭家老をしていた北条氏は関東地方の殆どを領有し 265 万石、小田原城は現在の城郭の約 10 倍の広さがあり、総構え 9 ㎞と大阪城 7.2 ㎞より大きく、戦国随一の居城であった。

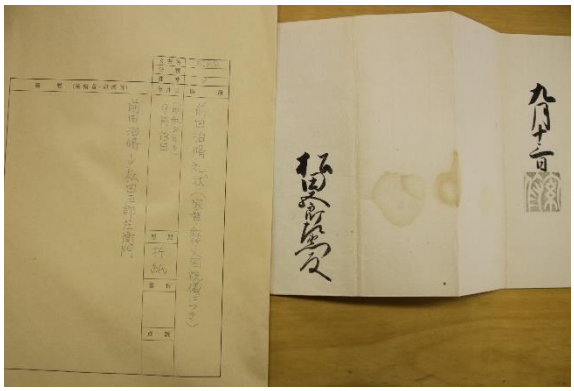
惣構（総構え）が全国的に広がったのは、小田原城は豊臣秀吉の小田原攻めの時に何度攻めても難攻不落で最後まで城は落ちなかった。北条氏は小田原城が落城して敗北したのでは無かった。この経験から豊臣秀吉・徳川家康・その他の大名は京都の御土居を始め、大阪城・駿府城・岡山城等に小田原城の城郭様式を取り入れた。従って、前田利長公が御普請奉行松田四郎左衛門を高山右近の配下にして金沢城の惣構を造らせたのは、利家公、利長公、高山右近が小田原征伐に参加しており、小田原城の惣構（総構え）の攻め難さを経験していた事で、小田原城城郭様式を取り入れて金沢城惣構を修築した。

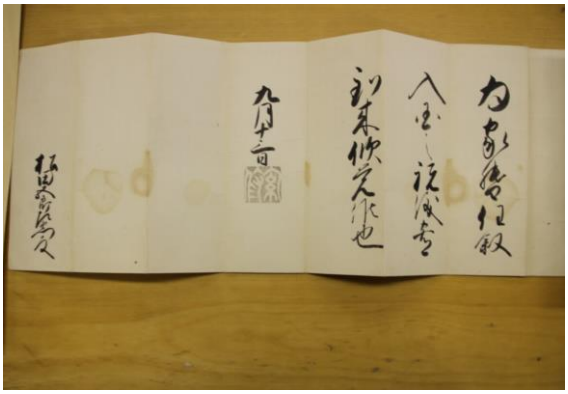
「高山右近」

高山右近はキリシタンであり、船上城（兵庫県明石市）六万五千石の城主であったが、天正 15 年（1587）秀吉に依って発令されたバテレン追放令によって船上城を追放された。その後、一万五千石を以って前田利家公に迎えられ築城家として金沢城を修築し、高岡城・富山城を築城したと言われている。慶長 19 年（1614）家康のキリスト教禁止令によって国外に追放され翌慶長 20 年（1615）にマニラで没した。

江戸時代の松田家文書

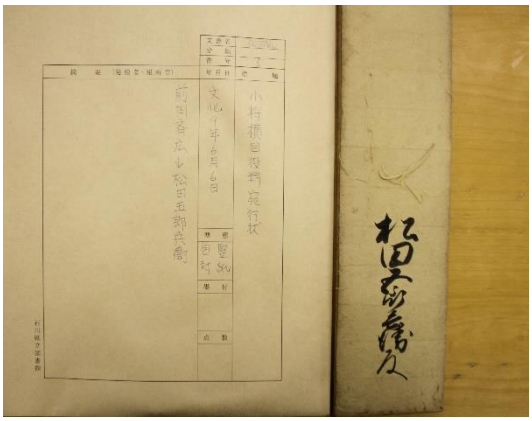
(187)　明和八年松田五郎左衛門儀郷（前田治脩礼状　家督・叙任・入国祝儀につき）

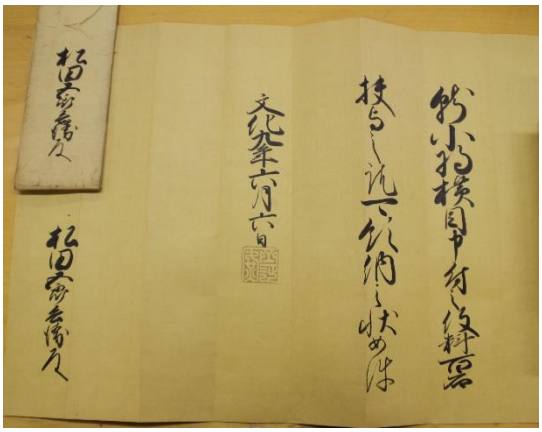




前田治脩公より松田五郎左衛門宛て文書(明和八年(1771)九月十三日)　石川県立図書館蔵

(188)　文化九年(1812)六月六日松田五郎兵衛知郷(小将横目役料宛行状)

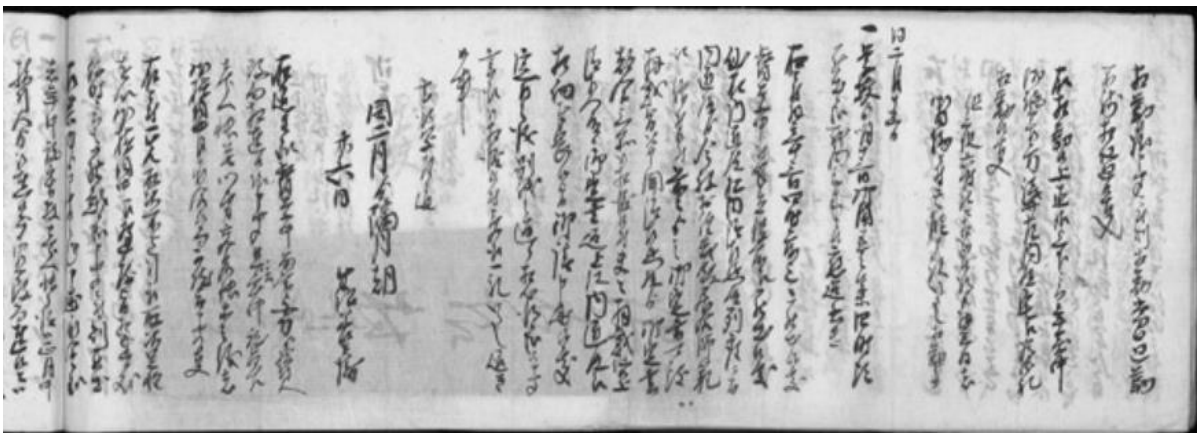




前田斉広公より松田五郎兵衛宛て文書　　石川県立図書館蔵

「加賀藩生沼家文書」

御定書拝裁　嘉永 5 年(1852)2 月 12 日



同二月十二日
一学校ゟ明十三日御用有之候条四時頃
罷出候様紙面到来二付應返書遺
右二付翌十三日四時前迄二罷出候處
督学中被呼立役所江罷出候處
仙石内匠殿**松田治左衛門**殿列座二而
内匠殿ゟ今般於経武館居合師範
被　仰付候付前〃ゟ之御定書可致
拝戴旨被申聞治左衛門殿ゟ御定書
都合三品被相渡候付夫〃拝戴仕候上
清左衛門殿へ御定書返上仕内匠殿江
相向奉畏候旨御請申述候處
定日之儀別紙之通り相心得候様被申聞
書取被相渡候付受取一礼いたし退き
候事
　書取写左之通
　　同二月ゟ隔月朝
　　廿六日　　生沼善兵衛

松田家の歴史

江戸時代の松田家

松田四郎兵衛憲次	松田家 12 代	寛文元年（1661）8 月 27 日没
松田熊之助憲郷	松田家 13 代	宝永 6 年(1709 年)1 月没
松田喜三郎近郷	松田家 14 代	宝暦 8 年(1758 年)8 月没 70 歳
松田治右衛門倫郷	松田家 15 代	文化 2 年(1805 年)11 月 28 日没
松田勘左衛門命郷	松田家 16 代	文化 13 年(1816 年)8 月没 52 歳
松田治左衛門信郷	松田家 17 代	天保 10 年(1840 年)5 月 22 日没 41 歳
松田九郎右衛門（佳養）憲信	松田家 18 代	明治 6 年(1873) 9 月 24 日没　61 歳

「雑学」☆☆☆

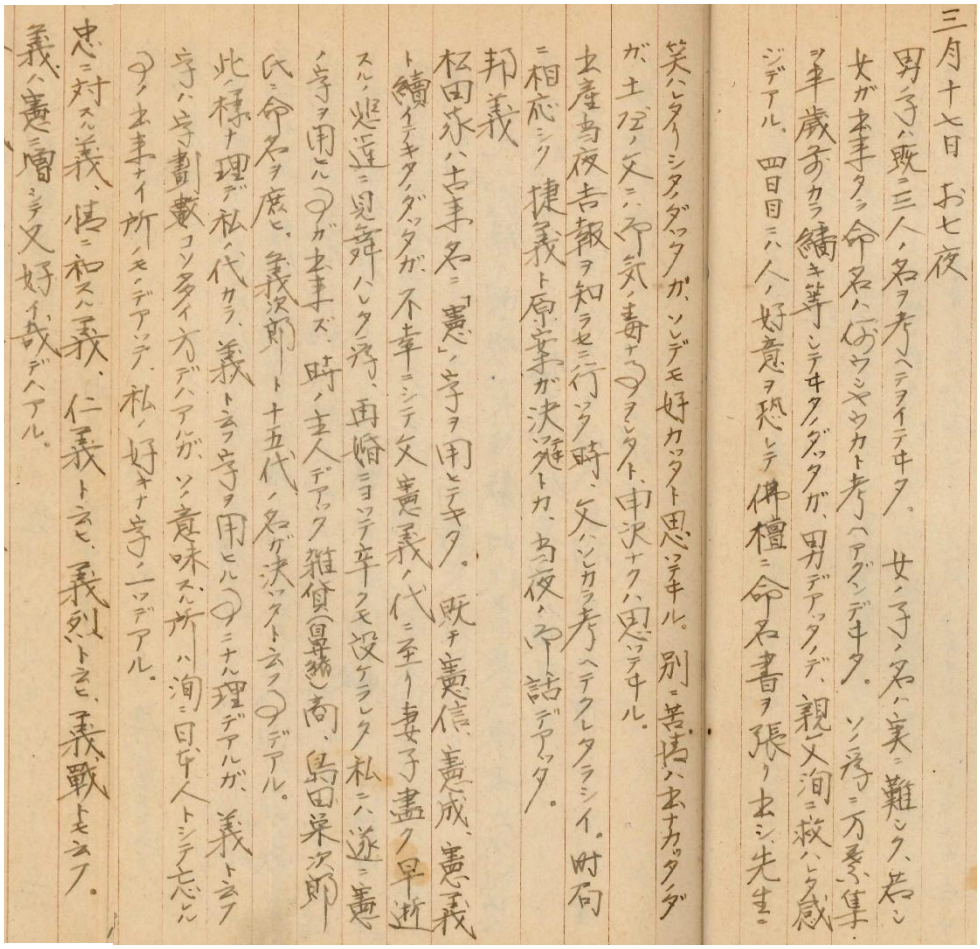
松田家の歴史

明治以降の松田家

松田義門憲成	（1843~1914）	松田家 19 代	天保 14 年 12 月 8 日生 大正 3 年 3 月 17 日没 70 歳
松田憲義	（1868~1932）	松田家 20 代	明治元年 1 月 12 日生 昭和 7 年 1 月 28 日没 65 歳
松田義次郎	（1919~1947）	松田家 21 代	大正 8 年 1 月 10 日生 昭和22年2月7日没29歳

（165） 松田義次郎の手記

邦義のお七夜に命名についての手記の一部『通字「憲」から「義」への理由』



三月十七日　お七夜

男子ハ既ニ三人ノ名ヲ考ヘテヰテキタ。女ノ子ノ名ハ実ニ難シク、若シ女ガ本年タラ命名ハ(ウシヤウカト考ヘテヰタンデキタ。ソノ子ニ万葉集ヲ半歳ヨカラ繙キ等シテキタノダガ、男デアッタノデ、親父洵ニ救ハレタ感ジデアル。四日目ニハ人ノ好意ヲ恐レテ仏檀ニ命名書ヲ張リ出シ、先生ニ

笑ハレイシタダッタガ、ソレデモ好カッタト思ッテヰル。別ニ苦情ハ出ナカッタダガ、土地ノ父ハ可気ノ毒ナコトヲシタト申訳ナク思ッテヰル。

出産当夜吉報ヲ知ラセに行ク時、父ハソレカラ考ヘテクレタラシイ。附句ニ相応シク捷義ト原案ガ決定トカ、当夜ハ可話デアッタ。

邦義

松田家ハ古来名ニ「憲」ノ字ヲ用ヒテキタ。既チ憲信、憲成、憲義ト續イテキタノダガ、不幸ニシテ父憲義ハ代ニ至リ妻子盡ク早逝スル、悲運ニ見舞ハレタ存、再婚ニヨッテ辛クモ没ケラレタ私ニハ遂ニ憲ノ字ヲ用ヒルコトガ出来ズ、時ハ主人デアッタ雅貨(昌弘)商、島田泉次郎氏ニ命名ヲ庶ト、義次郎ト十五代ノ名ガ決ッタトスルコトデアル。

此様ナ理デ私ハ代カラ、義トスル字ヲ用ヒルコトニナル理デアルガ、義トスル字ハ字劃数コソ多イ方デハアルガ、ソノ意味スル所ハ洵ニ日々人トシテ忘ルベカラザル事ナイ所ハモノデアッテ、私ノ好キナ字ノ一ツデアル。

忠ニ対スル義、信ニ和スル義、仁義トモ、義烈トモ、義戦トモ云フ。

義ハ憲ニ優ッテ又好イ感デハアル。

憲義

かほり(憲義妻)

義次郎

松田家の歴史

松田義次郎の親友達

松田義次郎は東京府立第六中学校(現在の東京都立新宿高校)以来の親友に次の方々がいらした。

有住直介氏(1918 年～2007 年 12 月 6 日) 89 歳 東京大学理学部物理学科を卒業され、昭和 39 年 4 月に気象庁観測部高層課長。東京大学のロケット開発チームの協力を得て鹿児島県の内之浦で気象ロケット MT-135 の開発実験が有住さんを中心として行われた。日本の静止気象衛星の基本計画を定め，実施への道をつけた。昭和 49 年に観測部長、昭和 51 年 4 月に気象庁長官になられた。

高層課長になられたお祝いを大宮市大成町のお宅でされていた時に邦義も訪問し、氷川神社など案内して頂いた。毎年頂いた年賀状に俳句・川柳が書かれていた。

「初鴨の 色ある声や 老いの春(無住)」「寒旦や 照らすが如し 石蕗の花(無住)」「元旦や くれない新た 寒椿(無住)」「初日影　映ゆさるすべり 春を待つ(無住)」「陽だまりに 昔話を 福寿草(無住)」「廓然無 大師渡るや 冬の江(無住)」「功徳とは 無くても有るなり 初日の出(有住無住)」「何事が あってもめでたし 老いの春(無住)」「梵鐘や 終戦後はや 三十年」「改めて 梵鐘かなし 老いの春(直介)」「透析や 余命に読経の 年始め」

林良一氏(1918 年 4 月 24 日～1992 年 10 月 2 日) 74 歳

筑波大学名誉教授。昭和 27 年東京大学文学部美学美術史学科を卒業、同 32 年 3 月東京大学大学院特別研究生を修了。東西美術交渉史を専門とし、文様史、正倉院の研究でも知られ、著書に「シルクロード(1962 年)」・「シルクロードと正倉院(1966 年)」・「ガンダーラ美術紀行（1984 年)」等がある。「シルクロード」は翌 1963 年に日本エッセイスト・クラブ賞を受けた。関係した大学は多摩美術大学・日本大学・明治大学・東京教育大学である。林さんの御自宅に訪問した時に著書「シルクロード」を戴き、裏表紙に「君のお父さん(義次郎)の筆跡を真似して書きましょう」と言って、松田邦義様 恵存 林良一と書いて下さった。

高橋一氏(1918 年～)　東京大学卒業

丸善石油取締役兼千葉製油所長(現在コスモ石油)。文京区本郷の浄心寺で行った義次郎の十三回忌の法要の時には親友の方々(有住直介氏・林良一氏・高橋一氏・広瀬博氏)にご出席頂いたが、高橋一氏は会社の専用車で、運転手付きの大きな外車で出席され、子供心に「すごい！」と思ったものである。1946~7 年頃義次郎が病床で自宅静養をしている時にバラック(戦後の焼失後のボロ家)に何度か泊って頂いたそうである。

高橋一氏は妹「那美道」の名付け親である。

広瀬博氏(1918 年～)

国税局。広瀬さんは時々相互に訪問し合い、杉並区和田の御自宅から新宿御苑などに連れて行って頂いた。東京府立第六中学校(現在の東京都立新宿高校)の同窓会にも連れて行って頂いた。

菅谷英二氏(2 月 7 日生)

学校以外の友人に画家　菅谷英二氏。我が家では英さんと呼び、 ご夫婦でも「英さん・田鶴さん」と呼び合い、仲の良いご夫婦だった。足立区関屋の御自宅にはよく泊まらせて頂いた。近くの土手に登ると 4 本のお化け煙突が見えた。英さんの作品は美人画・風景画が有り、我が家と妹那美道の家に 6 枚の絵画が残っている。

松田家の歴史

中条静夫氏(1926 年 3 月 30 日～1994 年 10 月 5 日 68 歳)

親しい後輩で、NHK テレビ朝の連続ドラマ「雲のじゅうたん」（平均視聴率 40.1%、最高視聴率 48.7%、全 156 回）、「ザ、ガードマン」・「あぶない刑事」・「赤い衝撃」・「京ふたり」・「オトコの居場所」等で活躍した俳優中条静夫氏（本名中条静雄氏）がおり、大映調布撮影所や俳優の野球チームの試合などに連れて行って頂いた。そのチームには根上淳氏・見明凡太郎氏・高松英郎氏・菅原謙次氏・倉石 功氏・品川隆二氏などがいた。中条静夫氏一家とは大映に入社する前から親しく家族ぐるみで交際していた。また、静夫氏のお父さん(巍乎(たかお)氏)には大映系の八王子の映画館「八光館」によく連れて行って頂き、邦義が小学生の時にお父さん(巍乎氏)は商工日々新聞社を退職され、毎日のように遊んで頂いた。俳優見明凡太郎氏のハワイ土産に当時珍しかったボールペンを戴いたこともあった。静夫氏戒名「信楽院端正日静居士」

義次郎は柔道(講道館加納治五郎師範)を趣味とし有段者で、健康であった。第二次世界大戦に出征し、罹病して帰宅した。発熱していても防空壕を掘り、無理を重ね 29 歳で他界した。当時特効薬とされたストレプトマイシンの輸入が間に合わなかったと英さん(菅谷英二氏)に聞かされた。残された家族は義次郎亡き後も上記の親友の方々と他界されるまで家族ぐるみで親しくさせて頂いた。

有住直介氏

中条静夫氏

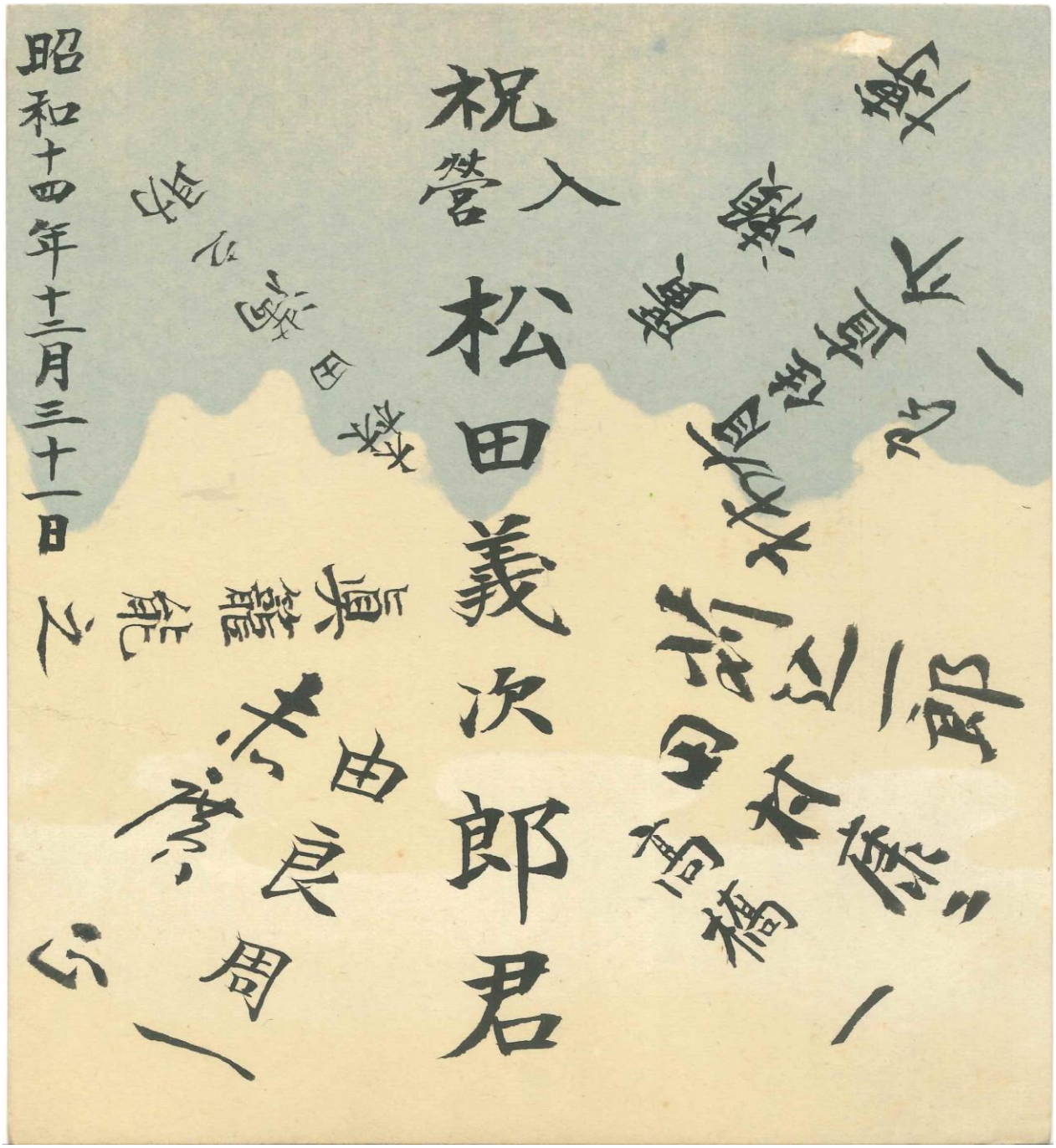
中条巍乎氏・昭氏・松田旭子

広瀬博氏・娘さんと共に 邦義

那美道(妹)・中条静夫氏・邦義

松田家の歴史

昭和 14 年(1939)義次郎入営(兵役に編入される者がその服役の為に初めて兵営に入る事)時、東京府立第六中学校(現在の東京都立新宿高校)以来の親友達 21 歳時の寄せ書き



中条静夫氏

「危ない刑事」柴田恭兵・舘ひろし・中条静夫

松田家の歴史

中条静夫氏 出演作品(敬称略)　写真は中条静夫氏奥様より提供

「雲のじゅうたん」浅茅陽子・浅利香津代「ザ・ガードマン」宇津井健・藤巻潤・神山 繁

「赤い衝撃」三浦友和・宇津井健・山口百恵「危ない刑事」舘ひろし・柴田恭兵・浅野温子

「春よ、来い」森光子・泉ピン子・杉村春子　「春よ、来い」中条静夫・森光子

「四捨五入殺人事件」中条静夫・中村雅俊　「京ふたり」中条静夫・山本陽子・畠田理恵

松田家の歴史

皇太子殿下 麻衣子(姪)の職場御訪問　邦義・菅谷英二氏（八王子の我が家にて）　亜倩・邦義

小只志乃め氏（かほりの姪・邦義の恩人）・旭子　　亜倩・崇義・邦義

旭子・基義・珈甄・邦義・亜倩・崇義　　旭子(87 歳時) (2008 年)

松田家の歴史

昭和から平成の松田家

旭子(義次郎妻 61 歳時)

邦義(67 歳時)

亜倩(邦義妻 53 歳時)

基義(17 歳時)

崇義(27 歳時)

佳織(崇義妻 27 歳時)

崇義・佳織結婚式(2012 年)

邦義・旭子(87 歳時) (2008 年)

松田家の歴史

基義 空手道場にて 2009 年(養心塾)

基義(左) 空手道場にて 2009 年(養心塾)

邦義 神奈川県立高校にて特別授業(2009 年)

亜倩 中学校でウーロン茶を入れる(2009 年)

金沢 本因寺にて(珈甄と共に 2007 年)

松本城にて(林秀貞氏と共に 2011 年)

邦義ハワイ上空 4300m(69 歳時) (2014 年)

松田家 相模原市の自宅

松田家の歴史

美容院の歴史（かほり・旭子）

松田かほりは柳橋で髪結いの修行をした。柳橋は現在の台東区柳橋1丁目あたりに有り、洗練された地域で、江戸時代から市中の商人や文化人の奥座敷と云われた。交通の便にも恵まれ隅田川沿いに位置していた為風光明媚の街として栄えて新興の新橋と共に「柳新二橋」（りゅうしんにきょう）と称されるようになる。このころは柳橋芸者の方が新橋より格上で、合同した場合は、新橋の者は柳橋より三寸下がって座り、柳橋の者が三味線を弾き始めないと弾けなかったと云う。（浅原須美著）柳橋は昭和3年(1928)には、料理屋、待合あわせて62軒、芸妓366名の大規模を誇り、芸妓の技芸も優れ、新橋演舞場や明治座に出演し披露していた。柳橋で腕を磨いた松田かほりは八王子市中町に移転後髪結い処を開業し、南町に移った。当初屋号を三好屋と称したが、日本髪も粋で仕事が早く、お客様からは柳橋のお師匠さん(おっしょさん)と呼ばれ、自然と柳橋美粧院と改名してしまった。

八王子市は明治30年4月に八王子市の大半を焼く大火があり、その頃の八王子市の芸妓は各貸座敷に分散していたが、明治40年(1907)には現在の中町に八王子三業組合(見番)を結成し、更に第一次世界大戦の勃発と共に空前の好況期を迎え、大正5年(1930)には料亭26軒、置屋35軒、芸妓215人とピークに達した。第二次世界大戦中は八王子市の花柳界も休業、空襲の被害を被ったが、戦後はネクタイなど繊維関係の需要や建築関係も栄え、昭和25年(1950)には料亭43軒、置屋27軒、芸妓135人と復興した。その後中町にあった八王子三業組合は南町に移転した。

旭子は幼い頃は八王子市元横山町(八王子駅北口を浅川に突き当たった辺り)で過ごした。生家は八王子市で有数の絹織物の買継問屋を営み、父親は庭で乗馬や弓を射っていたとの事である。昭和5～6年の世界的昭和大恐慌により八王子市の糸関係の産業も壊滅的打撃を受け、父の事業も倒産、屋敷も売り払い南新町次に上野町へと移転した。旭子はそのような家庭環境により手に職を付けようと東京都千代田区飯田橋の美容院に住み込みで修行に入った。山本光子先生の御子息山本泉氏は東京大学農学部を卒業され厚生省に勤務されており(後に健康を害してから立教大学教授)、御子息の奥様富美子氏はお茶の水女子大学を卒業された方であった。客層も山の手の上品な方々であったと云う。その後八王子市に戻っていた旭子は昭和18年に義次郎と結婚した。

第二次世界大戦も激しくなり、父義次郎は八王子市は空襲が予想され危険と考え、 山梨県南巨摩郡鰍沢町に疎開した。同行したのは旭子・かほり・博子(旭子の妹/山本)・生後四か月の邦義であった。八王子駅に着いた父は貨車を拳で叩いて木製の貨車を避け、鉄製の貨車に乗ったそうである。父母は甲府市に空襲があった昭和20年7月6日に鰍沢町に着いた。私が成人してから妹の那美道と共に母旭子に連れて行って貰った事が有ったが、宿舎になった所は地元の人はおばんじん様と云い、お寺の本堂に向かう階段を登った左側の六畳程の広さのお堂で、電気もない薄暗いお堂の中には仏像が有り、奉納された絵馬や髪の毛が下がっており、薄暗く何とも気味の悪い処で、よくこの場所で耐えたものだと感心した。

帰宅する直前10月5日頃に水害があり、大水が出た時に村人達がこの階段を駆け上がって来たそうである。鰍沢では近隣の住人の髪を結って食料や牛乳を得た事もあったという。牛乳を得ていた家の娘さん村松一子(かずこ)氏も戦後旭子の弟子になり、同居する事になる。一子氏は結婚後(橋本氏)釧路市で美容院を開業した。義次郎は家族を鰍沢に残し八王子市に戻ったが、旭子は我が家が空襲で8月2日に全焼した為に戦争が終わっても戻る事が出来ずに10月頃迄鰍沢に滞在したそうであるが、義次郎は出征したが戦地で結核

松田家の歴史

にかかり帰郷していても無理をした為に昭和 22 年 2 月他界した。義次郎の親友画家の菅谷英二氏は戦後特効薬のストレプトマイシンがもう少し早く日本に来ていれば助かったであろうといつも残念がっていた。戦前は順調に過ごした柳橋美粧院も昭和 20 年 8 月 2 日の第 2 次世界大戦の八王子市大空襲により全焼してしまい何一つ残らなかった(八王子市の 80%が消失)。お客様は有り難いもので鑑、櫛などを持ち寄って頂き、青空の下で柳橋美粧院を再開した。この頃の旭子は大変な苦労をしていた。空襲で家も焼かれた状況で夫に先立たれ、昭和 22 年 7 月には妹の那美道が生まれた。二人の子と病弱の姑を残され、悪戦苦闘しており、頑張ったものである。昭和 27 年には新築の二階建てを建て、その後柳橋美粧院の屋号では一般のお客様が入り難いのでマーブル美容室に改名した。当時住込みで 5～6 人の美容師が同居していた。その頃のかほりは病弱で、歩ける内は毎年一か月間ほど長野県小谷村の温泉にかづさや(町内の人力屋)の若い衆に往復とも付き添われ, 時には背負って貰い、出かけていた。その後、歩行が困難になり、六年間も床に就いており、当時美容師の修行に同居していた堀本敏子氏に一方ならぬお世話になった。敏子氏は後に結婚して(国分氏)北海道上川郡美瑛町で美容室を開業した。その後も数多くのお弟子さん達が故郷に戻り美容室を開業した。

東京都は昭和 37 年 8 月結婚式場を主な仕事とする東京都立八王子生活館を設立した。これに伴って八王子市で有力な五軒の美容院がこれに加わった。美容院以外では貸衣装屋・乾物屋・和菓子屋・洋菓子屋・花屋・写真屋などが参加した。美容院は我がマーブル美容院(南町、見番の裏隣)以外にみどり美容院(寺町)・斎藤美容院(旭町)・山崎美容院(本町)・鎌田美容院(本町)が参加した。みどり美容院(峰田)はかほりの弟子で親戚付き合いをしており、私と一歳年下の峰田清氏(きよしちゃん)とはよく遊んだ。内弟子では無かったが斎藤美容院の大先生(おばあちゃん先生)もかほりの処に日本髪を習いに来たそうである。1964 年東京オリンピックの時、八王子市で自転車競技があり、八王子市の要請で世界中の選手達に着物の着付けや日本髪を披露した。また、毎年年末には毎日新聞社が来店し、正月用の記事の為に日本髪の写真を撮影に来て、記事が毎年新聞に掲載された。平成元年(1989)日本はバブル経済となり、自宅・美容院を売却し、相模原市に移転し、美容院の歴史を閉じた。

空襲を受けた八王子市（昭和 20 年 10 月　斉藤五郎氏撮影）

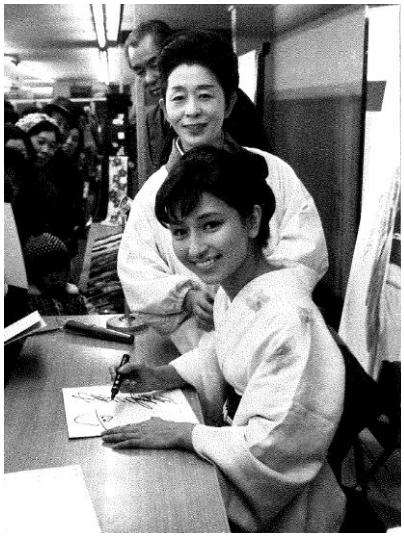
昭和 20 年代後半の八王子の芸者衆

松田かほり

松田旭子

昭和 52 年頃の八王子の芸者衆

松田家の歴史



女優 小林 千登勢氏の
美容・着付けを行う

マーブル美容室・鎌田美容室・みどり美容室
松田旭子　　鎌田とし子氏　峰田久子氏

松田那美道　　邦義

2010 年相模原市立相原中学卒業式(邦義)

報知新聞社主催船釣り大会

松田家の歴史

松田家戒名　熊之助憲郷流

1　筑前守頼重（頼成）(1427~1504) 崇徳院殿頼重信明日源居士
応永 34 年(1427)丁未 2 月 7 日生、
永正元年(1504)甲子 10 月 28 日没　　77 歳

2　左衛門尉頼秀（?~1494) 松田院頼岩義秀居士　明応 3 年(1494) 9 月 17 日没
松為院殿頼秀勇智日極居士

3　筑後守盛秀（尾張守顕秀）(1484 頃?~1560 頃)
光徳院殿盛秀守義日篤居士

4　尾張守憲秀（憲郷・政賢）(1530~1590)「極楽寺雲章喜公」・「鳳巣院竹庵宗悟」
栄極院殿憲秀龍達日誠居士
天正 18 年(1590) 7 月 17 日没　　60 歳

5　左馬助直秀（四郎左衛門・憲貞・直憲）(?~1614)　慶長 19 年(1614) 7 月 23 日没
徳源院殿義翁日勝居士
松労院殿直秀基系日栄居士

6　四郎兵衛憲次(?~1661)　覚心院了順日宗居士　寛文元年(1661) 8 月 27 日没

7　熊之助憲郷(?~1709)　　本了院源智宗信日正居士
宝永 6 年(1709) 1 月 13 日没

8　喜三郎近郷(1688~1758)　義完院勇達日映居士
宝暦 8 年(1758) 2 月 7 日没　70 歳

9　治左衛門倫郷(?~1805)　信覚院殿倫郷普善日耀居士
文化 2 年(1805) 11 月 27 日没

10　勘左衛門命郷(1764~1816)　普善院晴雲命郷日孝居士
文化 13 年(1816) 8 月 21 日没 52 歳

11　治左衛門信郷(1797~1841)　常體院厚義日行居士
天保 10 年(1841) 5 月 21 日没 44 歳

12　佳養憲信(1812~1873)　霊妙院憲信日鏡居士
明治 6 年(1873) 9 月 24 日没　61 歳

13　義門憲成(1812~1914)　深光院禪定日達居士
大正 3 年(1914) 3 月 17 日没　70 歳

14　憲義(1867~1932)　経王院青松日憲居士（位牌）
経王院芳勲青松日憲居士（過去帳）
昭和 7 年(1932) 1 月 28 日没　65 歳

15　義次郎(1914~1943)　義光院宗順日信居士 昭和 22 年(1943) 2 月 7 日没　29 歳

松田家の歴史

松田家戒名　安之丞流

1　筑前守頼重（頼成）(1427~1504) 崇徳院殿頼重信明日源居士
応永 34 年(1427)丁未 2 月 7 日生、
永正元年(1504)甲子 10 月 28 日没　　77 歳

2　左衛門尉頼秀（?~1494）松田院頼岩義秀居士　明応 3 年(1494) 9 月 17 日没
松為院殿頼秀勇智日極居士

3　筑後守盛秀（尾張守顕秀）(1484 頃?~1560 頃)
光徳院殿盛秀守義日篤居士

4　尾張守憲秀（憲郷・政賢）(1530~1590)「極楽寺雲章喜公」・「鳳巣院竹庵宗悟」
栄極院殿憲秀龍達日誠居士
天正 18 年(1590) 7 月 17 日没　　60 歳

5　左馬助直秀（四郎左衛門・憲貞・直憲）(?~1614)　慶長 19 年(1614) 7 月 23 日没
徳源院殿義翁日勝居士
松労院殿直秀基系日栄居士

6　四郎兵衛憲友(?~1645) 了智院月山宗覚日紹居士　正保元年（1645）8 月 20 日　二祖

7　四郎兵衛憲次(?~1661)　覚心院了順日宗居士　　寛文元年(1661) 8 月 27 日

8　安之丞(?~1674)　　始行院轉入勇進日住居士　延宝 2 年(1674) 6 月 23 日　三祖

9　五郎左衛門儀郷(?~1678) 理性院一有了達日恵居士 延宝 6 年(1678) 11 月 3 日

10　甚左衛門安郷(1678~1747)　智嶺院慈照日傳居士
延享 4 年(1747) 9 月 21 日　　69 歳

11　清左衛門忠郷(1724~1795)　嶺通院殿忠郷義専日誠居士
寛政 5 年(1793) 10 月 10 日　　71 歳

12　五郎兵衛知郷(1767~1822)　本信院殿栄性知郷日解居士
文政 5 年(1822) 9 月 23 日　　55 歳

13　(竹亭)茂左衛門弘郷(1797~1867)　忠信院殿篤行弘郷日亭居士
慶応 3 年(1867) 4 月 10 日　　70 歳

14　昇五郎郷明(1842~1866)　清昇院義天日明居士
慶応 2 年(1866) 9 月 16 日　　24 歳

15　精一郎郷憲　？

絶家

松田家の歴史

松田家家紋の歴史

家紋は定紋・替紋がある。定紋は本紋・正紋とも云い、替紋は裏紋・別紋・副紋・控紋とも云う。家紋は日本固有の文化である。欧州にも紋章があるが、大きな違いは家紋が家の紋であるのに対して、紋章は個人の物である。我が国では平安時代後期になると公家が独自の紋を牛車の胴に付け都大路で披露して歩き回り始めた事が家紋の起こりであるという。

武家の家紋は公家よりも遅れ、源平の対立が激化し始めた平安末期に生まれる。戦場において自分の働きを証明、また名を残す自己顕示のため各自が考えた固有の図象を旗幕、幔幕にあしらったことが、その始まりであったと考えられている。他家の定紋は配慮して使わない事とする暗黙の了解があったが、家紋を幾つも所有する事は自由であった。

松田家の家紋は、「鎌倉武鑑」に記載されている物が一番古いとされる記述ではあるが「鎌倉武鑑」は鎌倉時代では無く、江戸時代になって発行されたものである。家紋は源平の対立(1180 年)頃から大きく分かれた平家の赤旗、源氏の白旗が使用される様になり、鎌倉中期から各家の家紋を使用する様になったのであり、「鎌倉武鑑」は波多野義通(1107 年～1167 年)の家紋が「二重直違い紋」なっており正確な記述では無い。

松田家の家紋は、太平記廿九巻「小清水合戦事付瑞夢事」が文書に依る初見となる。「小清水合戦」(足利尊氏と弟直義の戦い)には「兵共暫馬の息を継せて傍を屹と見たるに、輪違の笠符著たる武者一騎、馬を白砂に馳通して、敵七騎に被取篭たり。弾正左衛門義冬是を見て、「是は松田左近将監と覚る。」とあり、松田家は「輪違」の家紋を使用していたのが分かる。「小清水合戦」は観応 2 年(1351)の事であり、備前松田家 3 代松田左近将監元泰は数々の戦いに手柄を立て、足利氏の家紋、「丸に二引き」の使用を許された。足利尊氏の重臣、高師直も輪違い(寄り懸かり輪違い紋)を使用していた。松田家の「輪違」の家紋が足利氏の重臣、高氏の家紋「寄り懸かり輪違い紋」と同じ様な「輪違い紋」なのは何か意味があるのだろうか。

この頃松田家の多くが高師直・師泰軍に参加していた。「太平記」に依ると 1347 年、高師直軍の交名中に松田太郎三郎(経朝)・松田盛信が、同年 12 月南朝方との戦いには重明が高師泰に従った。1348 年、楠木正行との四条畷の戦いの小旗一揆の高師直軍には松田小次郎・松田左近将監重明・重明弟の松田七郎五郎・子息松田太郎三郎(同名だが経朝では無い)・松田盛信の名が見える。又、1351 年には観応の擾乱中の兵庫小清水合戦に高師直軍に松田左近将監重明の名が見える。(左近将監重明は左近将監元泰の別名と思われる)又、備中一の宮の吉備津神社が輪違い紋を使用している。

延文二年(1357)吉備津神社のトップである社務(神職の長として一社の事務を執行した者)という役職に就いていたのは松田肥後守重明であり、貞治元年(1362)頃の社務は松田備前守吉信であった。ついで、応永 12 年 12 月 13 日(1405)仮葺の時の社務は子の松田三郎左衛門尉満朝、応永 28 年 11 月 26 日(1421)桧皮葺の時の社務は子の松田十郎朝郷であった。この事に依り、吉備津神社の神紋は松田家の家紋を使用したと考える。吉備津神社の神紋と松田家の関係を玉松城命名五百年記念講演の時に吉備津神社に付いて講演をされた東京大学史料編纂所教授榎原雅治氏に問い合わせたところ「家紋・神紋の研究はしていませんが、それで良いと思います」と云うご連絡を頂いた。

この二つの輪は「天を表す金剛界」と「地を表す胎蔵界」を表し、「金剛界は智」「胎蔵界は理」のことで、二つの輪が繋がることで「天と地の調和」という意味である。当時は、公家や武家の家紋を神紋・寺紋として使用したり、武家が神紋・寺紋を使用した。

松田家の歴史

神紋も家紋と同様に平安時代に使われ始め、鎌倉時代に多くの神社で用いられた。

松田家・吉備津神社輪違い　　丸に二引き(足利氏)　　寄り懸かり輪違い(高氏)

6 代元運の頃、永享七年(1435)に足利幕府が常陸佐竹(茨城県常陸大宮市長倉)の長倉遠江守を追罰した戦記物語の「長倉追罰記」の文中に、参加した全国諸将の宿陣の紋幕の記述があり、松田家の家紋を「めひきかご（目籠、籠目）松田 相模国足柄上郡松田庄藤原流羽多野氏流」と記載されている。松田家は鎌倉公方足利持氏に味方し、岩松右馬頭持国率いる 6000 の兵で長倉遠江守を攻撃し、4 ヵ月後に城は開城した。

松田家の家紋は観応 2 年(1351)頃には「輪違い」を使用し、足利氏の家紋、「丸に二引き」の使用も許されるが、永享七年 1435 年頃は「めひきかご（目籠、籠目）」を使用していた。その後いつの日か、「二重直違い」に変化した。

「丸に二引き」は京都から下向した松田頼秀が 1471 年に開基した神奈川県相模原市緑区青野原の龍泉寺の瓦や加賀前田氏に召し抱えられた直秀の弟秀也の子孫高岡松田家に使用されている。

籠目　　松田家籠目紋　　備前松田家二重直違い

「籠目紋」と「二重直違い紋」を比較すると、松田家の「籠目紋」は三組の平行線で構成されている。一組の上下の平行した二本の線を除き、残った二組の平行線をそれぞれ中央に近づけると、「二重直違い紋」になるので、「二重直違い紋」は「籠目紋」の変化した紋である。「籠目紋」は六角形と三角形から構成されており、古代から六角形は亀、三角形は蛇の鱗を意味している。つまり、「籠目紋」そのものは、亀と蛇の組み合わせであり、古代中国において、亀は「長寿と不死」の象徴、蛇は「生殖と繁殖」の象徴である。玄武の亀と蛇の合わさった姿を、「玄武は亀蛇、共に寄り添い、もって牡牝となし、後につがいとなる」と、陰陽が合わさる様子に例えている。北に鎮座し、玄武は北方を守護する神である。「籠目紋」は悪を退け、正義を貫き、幸運を呼び、魔よけの意味を持つ。

相模松田家二重直違い　　松田家丸の内二膳箸　　相模松田家女紋

松田家の歴史

小田原北条氏重臣の相模松田家の「二重直違い」は角度に変化があり、徳川氏家臣松田家や埼玉松田家は小田原北条氏時代の「二重直違い」をその儘使用し、加賀前田氏家臣松田家は 1610 年頃から現在まで「丸の内二膳箸」を使用している。相模松田家女紋は松田旭子の羽織を写したものである。

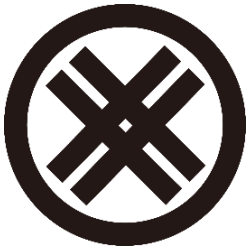
「雑学」☆☆☆

松田家の歴史

松田家と家臣団の家紋（主紋・替紋・女紋）

相模二重直違い
相模松田家

丸の内二膳箸
相模松田家



丸の内二膳箸の覗
相模松田家女紋

備前二重直違い
備前松田家

丸に二引き
高岡松田家

二重直違い
埼玉松田家

丸に隅立井筒
出雲松田家岩田氏

丸に隅立井筒
出雲松田家定秀氏

<u>徳川氏家臣松田家は二重直違いと下記の替紋も併用</u>

二重直違い
徳川氏家臣松田家
定勝-定平系 1000 石・他

鳩酸草
徳川氏家臣松田家
長治系 200 俵

左巴
徳川氏家臣松田家
政名系 300 俵

左三巴
徳川氏家臣松田家
直長-俊長系 200 俵

三頭左巴
徳川氏家臣松田家
廉郷-貞行系 1150 石

左三巴
徳川氏家臣松田家
直長-長重系 430 石

鶴の丸
徳川氏家臣松田家
直長-長重系 430 石

松の丸
徳川氏家臣松田家
定勝-定郷 500 石

右三つ巴
出雲飯南町松田家

丸に違い丁字
井原松田家

丸に右三階松
徳島阿南市松田家

二重直違い
岡山落合松田家

松田家の歴史

九曜
新庄松田家

丸に三つ亀甲花角
可真松田家

その他の松田家家紋
鉄砲角に入山紋―讃岐松田家
的角違い山形――詫間松田家
長下り藤に井筒―新庄松田家
徳川氏臣松田家の定紋(本紋)は二重直違いであるが、替紋として鳩酸草・左三巴・三頭左巴・鶴の丸・松の丸・等も使用している。

丸に下り藤
宇垣氏

丸に違い矢
宇垣氏

剣酢漿
宇垣氏

陰抱き茗荷
土光氏

丸に並び矢
大村氏

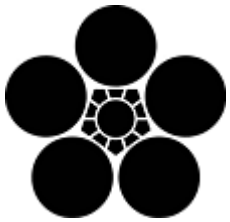
丸に九枚笹
詫間 冨山氏

丸に橘
高松市 冨山氏

丸に陰抱き茗荷
塩納 楢原氏

その他の家臣団の家紋
丸に千木並び矢 ― 大村氏
藤輪に違い鷹の羽―大村氏
入り山形三つ星 ― 津山片山氏
丸に角藤――――松重氏
松川菱に釘抜――楢村氏
隅立井筒に七曜― 御津楢原氏

梅鉢
横井氏・妹尾氏



隼郡松田家

備前玉松城址出土瓦

相模松田家の家紋は松田家８代頼秀の頃は二重直違い以外に足利将軍より使用を許された「丸に二引き」も頼秀の開基した相模竜泉寺の家紋瓦に使用していた。
その後、加賀前田氏の時代になって「丸の内二膳箸」を使用するようになり、現在に至っている。
玉松城の家紋瓦は「二重直違い」(備前系)である。現在相模松田家が使用している「丸ノ内二膳箸」は玉松城の家紋瓦のように「違い」にはなっていないが、殆ど同じである。

松田家の歴史

加賀前田氏家臣松田家略系図　（相模系）

松田邦義 作成

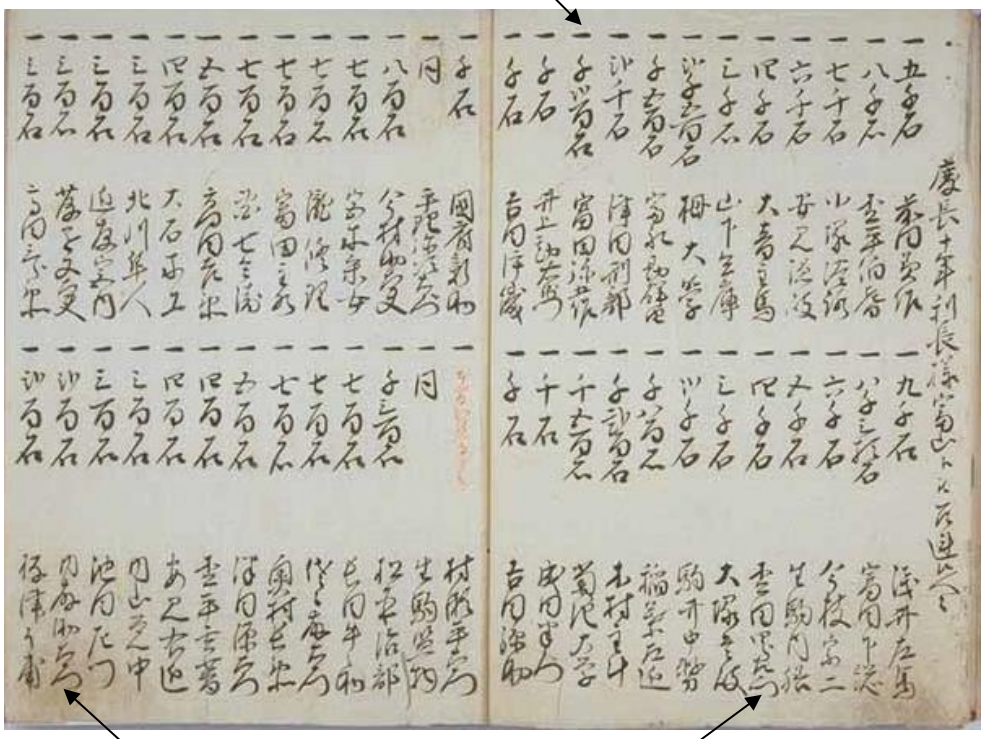
将軍足利義政の命で山内上杉氏の応援として京都より下向した備前松田家の**頼重・頼秀**以降の系図。江戸時代から昭和に架けての先祖達は相模に下向し、相模松田家を家督した頼重を松田家初代と考えていた。

松田家の歴史

加賀藩侍帳　慶長 10 年富山侍帳(1605)　慶長 10 年利長様富山へ召連れられ候人々

富田弥五作（松田憲貞娘婿）（1200 石）

(97)



内藤助右衛門（直行）（200 石）

（元津久井城城主）

松田四郎左衛門（憲貞）（4000 石）

杏＝松

「雑学」☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

「松田」の付く日本全国の地名

神奈川県上足柄郡松田町	秋田県大森町松田
宮城県角田市松田	宮城県加美町松田
茨城県岩瀬町松田	茨城県桜川市松田
栃木県足利市松田	栃木県喜連川町松田
栃木県那須町松田	群馬県吉井町松田
千葉県和田町松田	新潟県寺泊町松田
福井県勝山市松田	岐阜県根尾町松田
愛知県立田町松田	兵庫県太子町松田
岡山県旭町松田	福岡県瀬高町松田
福岡県大任町松田	福岡県勝山町松田
福岡県福岡市東区松田	熊本県田浦町松田
大分県犬飼町松田	宮崎県西都市松田
鹿児島県大隅町松田	沖縄県宣野座村松田

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

松田家の歴史

江戸時代の加賀藩の松田家屋敷

200 石松田家（長町三番丁）

350 石松田家（長町四番丁）

400 石松田家

慶長丁銀 43 匁（約 161.25 g）

元禄豆板銀
（銀 3 匁 8 分）

元文豆板銀
（銀 1 匁 3 分）